川柳塔

令和三年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一三〇号

日川協加盟

No.1130

七月号

―路郎賞・川柳塔賞の応募は八月号の刷り込み用紙で―

① 川柳塔欄・水煙抄欄に6か月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 令和二年9月号から令和三年8月号までの入選句（自分の句を出句する）

③ 8月号刷り込み用紙に5句を楷書で書き8月15日必着のこと。

昨年九月から今年八月の間に誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募して下さい。

ただし「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いのないようにお願いします。

選者交代のお知らせ

九月号（七月投句締め切り分）から来年八月号までの選者を次の通り交代します。

水煙抄　川上大輪

檸檬抄　桒原道夫　久保田千代　共選

川柳塔社

「檸檬抄」課題

共選

発表	月	課題	締め切り日
3年	9月	漂う	7月15日
	10月	音	8月15日
	11月	構える	9月15日
	12月	波紋	10月15日
4年	1月	盛る	11月15日
	2月	淡い	12月15日
	3月	名残	1月15日
	4月	抱く	2月15日
	5月	ユニーク	3月15日
	6月	鈍い	4月15日
	7月	消える	5月15日
	8月	ギブアップ	6月15日

桐の箱

小島蘭幸

6月のある日、同級生の山内静雨君から電話がかかってきました。「実家の整理をしていたら、仏壇の奥から麻生路郎の掛軸が出てきたんじゃが取りに来れるか…」、私はすぐに受け取りに行きました。掛軸は見事な桐の箱に入れてありました。

子澤山僕のまくらは何處へいた　　路郎

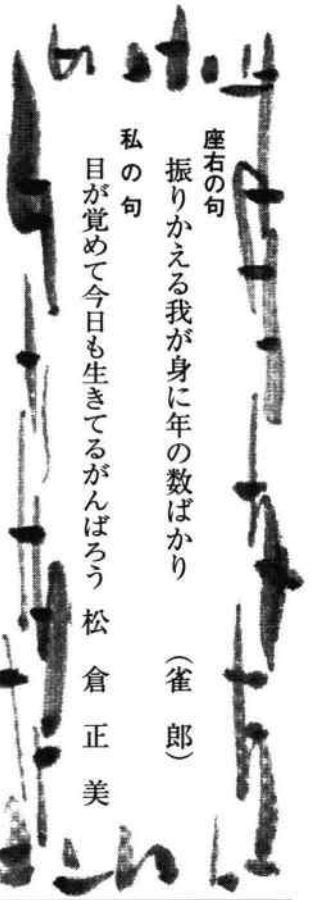
桐の箱を開けると仄かに線香の匂いがしました。静雨君の実家、山内静水居では、月に一回、句会を開催していましたが、路郎の掛軸を見たことはありませんでした。

「君、川柳は情熱だよ、川柳は下手でいいんだよ」、同人になることを躊躇していた時、路郎師に言われたこの言葉を、ことあるごとに私達に言われていた静水にとって、この掛軸は、家宝として大切に保管されていたのだと思います。路郎の命日には、仏間に飾り、ひとり静かに路郎師を偲んでいたのでは…と思うと、涙があふれてきます。

子沢山…、私はこの句から、中学二年生の夏休みに、竹原の酒店でアルバイトをしていたことを思い出していました。味噌、醤油、酢、卵も売っていましたが、そのほとんどが量り売りですので、小さい卵ばかり選って買うおばちゃんがいました。「あそこは子供が沢山いるからねー」、店の奥さんが言われました。実はこのことを子沢山で一句にしたのですが、同想の句があるということが分かりました。以来「子沢山」で句を作らないことに決めたのでした。

朝からコップ酒を飲むおじちゃんの相手をしたり、重荷用自転車での配達、夕方になると飲み屋さんへの注文取り、店が休みの時は大将と釣りに行ったり、初めてのアルバイトは実に新鮮で楽しいものでした。正に人間観察でした。

7月7日は路郎忌、掛軸を我が家の玄関に飾り、麻生路郎と私の川柳の師、山内静水をひとり静かに偲びたいと思います。



座右の句

振りかえる我が身に年の数ばかり　（雀郎）

私の句

目が覚めて今日も生きてるがんばろう　松倉正美

川柳塔　七月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「矢掛・流れ橋」

■巻頭言　桐の箱……小島蘭幸…(1)
七月という月……中島生々庵…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
川柳塔の川柳讃歌⑰……木津川計…(38)
西尾栞句集『水鶏笛』……(39)
自選集……(40)
句集の森……大坂形水…(43)
温故知新……(43)
水煙抄……西出楓楽選…(44)
英語 de Senryu⑮……吉村侑久代…(62)
せんりゅう飛行船⑫……新家完司…(63)
誹風柳多留一三篇研究 11……(64)
愛染帖……新家完司選…(66)

七月という月

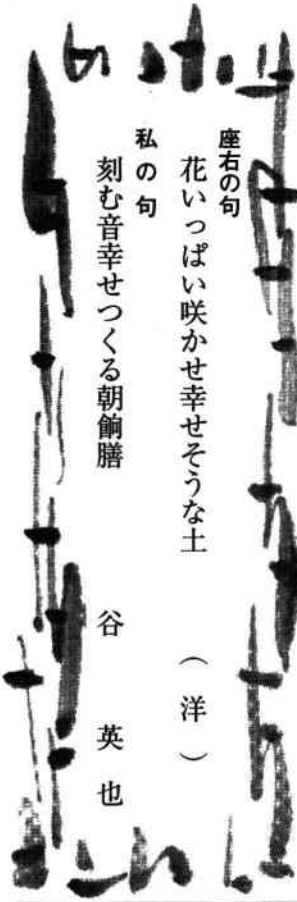
中島生々庵

◎この七月十日に、第一回の路郎忌が営まれた。ご生前中も七月十日前後に川柳塔まつりを毎年つづけられたが、それは勿論先生のご誕生日が七月十日であったからである。

◎七十七の喜の寿をすませた翌年の七月七日おなくなりになったのも、なにか七の字にかかわりがあるように思えてならぬ。

◎七という字がどういう性格を持っているのか、くわしく知るよしもないが、一寸指おりかぞえて見ても七夕まつりや七賢人、七曜日や七福神、お七夜、七五三、七転八起、七去七教、七道七宝、七五調、七味唐辛子に至るまで七の字に

檸檬抄「微　妙」……石橋芳山・古今堂蕉子共選……(70)
一路集（「かたち」……岸本宏章選……(74)
「　骨　」……木見谷孝代選……(75)
初歩教室「半　分」……高瀬霜石……(76)
路郎忌に寄せる
暗合と類句……麻生路郎……(78)
大輪のバラとミニトマト3個……水野黒兎……(81)
川柳塔鑑賞……水野黒兎……(82)
水煙抄鑑賞……福西茶子……(84)
■エッセー（さくらのこえ）……古今堂蕉子……(85)
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世……(86)
五月本社誌上句会……(88)
各地柳壇（佳句地十選／村上玄也・永見心咲）……(97)
七月各地句会案内……(110)
柳界展望……(112)
■編集後記（ひとこと／澤井敏治）……朱夏・眞澄……(144)



座右の句
花いっぱい咲かせ幸せそうな土　（洋）

私の句
刻む音幸せつくる朝餉膳　谷英也

かかわるえんぎが、昔から沢山つたわっている。

◎その上私事で申訳ないが生々庵の誕生日が七月二日。幼にして死別した父の命日が七月十八日。七月という月は私にとっておさない頃から、ただごとでなく頭にこびりついてる月であった。

◎路郎先生と全く交渉のないはたち前後、東京での学生時代、浅草観音の四万六千日の縁日の記憶がはっきり浮びあがってくる。その縁日が七月十日。路郎先生のお誕生日である。

◎それにしても土用入りから大暑、河童忌、天神祭と多彩な七月に、ことしから路郎忌が加わってゆくわけである。昭和十二年七月七日の日に日華事変がおこったように。

（「川柳塔」No.11　昭和41年8月号）

川柳塔

小島蘭幸選

鳥取市　岸本宏章

漫才のボケの役なら地でいける
広辞苑埃被ったままにある
願いみな叶えば夢も消え失せる
生真面目にルール守っている弱者
たまに来る客も大事にする老舗
スマホ買い令和の波に乗り替える

箕面市　中山春代

おすそ分け復活祭のゆで玉子
れんげ田はタイムトンネル昭和の日
剪定鋏に遊んでもらう五連休
マスク飲みできる間は酔ってない
コロナめが盗む私の持ち時間
来年を信じて花の種を採る

大阪市　平井美智子

素っぴんの顔が意外に受けている
雨の日は雨傘 晴れの日は陽傘
怒ったり宥めたりして微調整
雨宿りしていた福の神 ゲット
風になる呪文を思い出せぬまま
取り敢えずピンクに塗っておく明日

堺市　桒原道夫

重心が定まってきたランドセル
ポケットの骰子ひとつ握りしめ
電柱の下でしぼんでいたボール
春の家からぷしゅっと飛び出すものがある
一畳の畳の上の個人主義
図書館で寝ている恋を恋う男

大阪市　谷口義

水は流れてワクチンの接種券
マスクしながら食べる隠し芸ですか
肩透かしという手も時どき使う
形だけの力水つけてお散歩に
じっとしていても現状維持ではない
言わんでも分かるとずっと思ってた

桜井市　安土理恵

スイートピーに手を出している豆のつる
姉さん被りと長ぐつ似合ってきたみたい
金柑の甘露煮自粛もいそがしい
老老介護まだまだ先のはずでした
寄り添うて生きる覚悟に揺るぎなし
悪女には非ず切りキズの血は真っ赤

西予市　西田美恵子

コロナ禍の中で逢いたい人が居る
六月の雲はとっても泣きやすい
お変わりないですか夏には逢えますか
この恋はゼリーの中のさくらんぼ
足して二で割ってつまらぬ妥協案
君のエールが重たくなってくるのです

唐津市　坂本蜂朗

骨折の小柄な妻が重過ぎる
妻不在存在価値が身に染みる
折り返し過ぎた頃から妻優位
食規制して煉獄に生きている
父や兄の歳越え医者が死なせない
年寄りの自覚黙って腕を組む

松江市　石橋芳山

まだ嘘をつくのか異形のつながり
熱燗でないといけないぼたん鍋
アリバイもなにも真っ赤な西の空
クルーズツアー違う世界が流れてる
泡立ち草の図々しさが許せない
切腹も美学かタコ焼きが熱い

西宮市　亀岡哲子

中之島の三階までもバラの風
オルゴール館誘われたまま　そのまんま
腹式呼吸のコツを覚えて山みどり
数学の得意な孫がピザを切る
本日の目標終えたから昼寝
鬼瓦なくて睨みの効かぬ街

枚方市　栃尾奏子

阻むものあって愛燃えあがるもの
七月の虜になってから素足
少しでも近づきたくて読むゲーテ
対岸の人はキラキラして見える
雨音は題名の無いコンサート
大の字で仰ぐ星空ミュージアム

藤井寺市　鴨谷瑠美子

句を追うた人生もよし樹樹みどり
季の移りブランコだって人を待つ
ははが来た気配だ病院のベッド
わたしまだ地上の靴は脱げません
マスクして口は充分休ませた
咲くまでのドキドキが好き百合の花

頁繰るたびに広がる海がある
私のヒストリーです皺の数
巣籠りは続いて動線が縮む
医療現場思うと背筋シャンとする
言い訳はいくらでもある八十路坂
マッサージチェアーに活を入れられる

河内長野市　山岡冨美子

暴動も起きず緊急事態延長戦
匿名で忖度なしのアンケート
百年に一度大谷翔平その一人
「ホラホラあれ」言葉が出ずに大笑い
変わり者同士で続く半世紀
相性の有無人間だけではないらしい

横浜市　川島良子

ライトアップ九時には眠りたい桜
図書券に目を輝かす子になった
友達ができたとランドセルおろす
とうさんが茶碗を洗う音がする
下駄箱にまだ温かい亡妻の靴
イソップの兎のようなチョッキ着る

尼崎市　山田耕治

緊急宣言出ても都会は人の波
コロナ禍の自粛を癒やす駅ピアノ
抱き合った昔今ではグータッチ

富山市　島ひかる

自粛してコロナの波を過去にする
ひと仕事するたび休む椅子がある
良い所を褒めて介護を楽にする

富田林市　山野寿之

大画面国技館やら甲子園
天辺の椅子に纏わりつく孤独
コロナ禍の鬱を払拭する桜
ナナハンを磨く父子の笑い声
乳呑み子も白寿も眠るのが仕事
スープ冷めぬ距離へ引っ越し母介護

島根県　伊藤寿美

焼け棒杭に火を点けたのはお月さま
草木染め亡母をリメークしてお洒落
マスクして植樹祭までオンライン
木の芽和えが旨い春だよまだ死ねぬ
耐え抜いた昭和「おしん」も「おちょやん」も
亡母に似た娘が嫁ぐ堇咲く

奈良県　渡辺富子

思い出のおぼろをつなぐよもぎ餅
たんぽぽの綿毛ふわりと君へとぶ
ビビッときてふたりの音色響き合う
こころの鍵二重にかけてこもる春
上塗りを重ねた言葉届かない
反論へちくりと皮肉混ぜておく

松山市　栗田忠士

ダイヤにはなれぬが重石にはなれる
「老いの才覚」読んで頷く歳になり
鈍いのか不眠症には縁が無い
あたふたはしないなるようにしかならぬ
すったもんだでやっとワクチン予約する

松山市　古手川光

巣籠りを癒やしてくれる四季の花
改葬で次々消える郷の墓碑
過疎の過疎に住むのもいいねこの世相
コロナピンチをチャンスにしてる業界も
コロナ禍を試練と捉え生きてやる

松山市　宮尾みのり

メモをとる癖と付箋を貼る癖と
終活に本腰になる事故に遭い
半分は笑顔で返す耳となる
五七五の欠片探している詩嚢
挫けるな柳誌が味方してくれる

松山市　柳田かおる

褒められてわたしの中の有りっ丈
身の丈を忘れてはしゃぎ過ぎました
長いトンネル抜けて幸せ度が変わる
退屈へ時はちゃくちゃく過ぎていく
ワクチンをどうぞとわたし高齢者

今治市　永井松柏

木の芽時ジリジリ増える変異株
ワクチンを整然と待つ蟻の列
マシンガントークの正論が吠える
ヒメシャリンバイ咲く頃亡き友を偲ぶ
減塩メニュー素材の味を噛みしめる

西予市　黒田茂代

桜咲いて散ってコロナは視野の外
雨予報当たらぬように明日ツアー
お目当てのひょうたん桜だけ散って
まあいいか日帰りツアー出来ただけ
つつじ咲き始めたガラス戸が赤い

土佐清水市　辻内次根

物忘れしている爪が割れている
百面相してもやっぱり老けている
缶ビール開けて夕餉の手を合わす
疑いもなく種無しを食べている
塗り箸でラッキョウつまんでいるひとり

高知県　小澤幸泉

神様の恵みいっぱい祈祷会
亡師と亡友の後追いできぬ弱い足
栄一さん早くお札で会いたいな
コロナには負けぬ愛妻いつも居る
五十年二人はなんで生きている

東かがわ市　川崎　ひかり

理由等ないです好きになりました
留守電になっていますが居留守です
黒マスクメガネ帽子で銀行へ
天と地の恵みラッキョに梅漬ける
終息を信じて今日もスクワット

北九州　小松　紀子

春うらら世相どうあれ花は咲く
今日あたり咲きそうです元気です
ほめる　しかる　子犬の母になりそうで
うっかりが多くなった独り言
お出かけは足腰膝にお祈りを

唐津市　山口　高明

退庁を成され変わらぬお人柄
白秋も小手を翳した松浦潟
邪気払うお湯に浸かってリフレッシュ
辛抱をしたと愚妻のひとり言
苦口を書いて出しますアンケート

熊本市　杉野　羅天

焼酎と餡この二刀流なのだ
祖母の記憶へ生醤油の一滴
巣籠りで太ったコロナ禍のリアル
勝負のワクチン遅れに遅れたり
取り留めがつかなくなって五輪なる

熊本県　岩切　康子

苗届けモロヘイヤ種いただいた
母の日に電報祝品ありがとう
針山を自髪で作りくれた母
三日月や母と銭湯テクテクと
五回目でワクチン予約二回とも

札幌市　小沢　淳

変異株日々一憂の棒グラフ
国連はあるが仲裁まで出来ぬ
腹が立つ僕は進化の中にいる
もうそろそろと言われ賀状を止めにする
武勇伝聞く耳あって人が寄り

男鹿市　伊藤　のぶよし

風を追い風に追われてここで咲く
見てほしい形でさいた座禅草
当り外れ連れ合いだって籤だって
バクバクもキュンも無いけど恋ごころ
無為無職なまけすぎです部屋ごもり

弘前市　稲見　則彦

母ちゃんと鬼は二日の留守でいい
意志疎通できないままで君と居る
断捨離にと心に鬼を棲まわせる
街歩き大手を振ってできぬまま
アナログがまだまだ生きている我が家

花筏残してサクラ散りました
間を置かずりんごの花見奨励す
次行くは陸奥湾片方菜の花畑
純粋な菜種油をみやげにと
山菜取り三密さけるが熊避けぬ

弘前市　今　愁女

巣ごもりが続き父の日忘れられ
自粛してまた一年を折り返す
絵手紙につづき届いたダンボール
何かある晩酌のあて聞いてくる
腰痛が少し治まり梅雨が明け

塩竈市　木田比呂朗

欲しいけどどこに着て行くのと自問
取り敢えず初回は観ます春ドラマ
念の為マスクの下に紅を差す
自粛せぬ人を責めてる鼻マスク
シャンプーを替えて期待の髪の艶

上尾市　中村伸子

変異株とことん人を苛める気
コロナ禍に連休なんて酷ですよ
コロナ満杯五輪の話上の空
アバターに気持をのせて飛んでみる
会いたいね電話の友が居る余韻

朝霞市　前田洋子

生温い答急所を避けている
迷路から出られずクイズ終らない
クイズ解く意地あり徹夜してしまう
山いくつ越えて夫婦の深みどり
これからを考えている日向ぼこ

越谷市　久保田千代

深呼吸やめておこうか春の街
差し引きを考え手を伸ばす未来
慣れてきて時間がかかるようになる
悩んだ末庭に残しておく椿
また会いに行こうと思う夢の中

東京都　川本真理子

密避けて絆が細くなっていく
輝いていた頃もあり鏡見る
知らぬ間に消えたゴールデンウィーク
ステイホーム言葉が独り歩きする
母の日に母を偲んで花を買う

八王子市　川名洋子

孫へするスキンシップも止められる
晩酌の機嫌へ妻の頼みごと
生い立ちのところどころへ修飾語
毒舌を吐いてるうちはまだ元気
自粛こそ自分磨きの時と知る

横浜市　菊地政勝

可児市　板山まみ子

どこまでが不要不急か墓参り
公共の乗り物怖いコロナの世
古いのもまだ役に立つ衣替え
若葉風老後の不安吹き飛ばせ
私のスペアはないと言っておく

名古屋市　山本三樹夫

脱炭素老化原発稼動させ
贈られた旅のチケットお蔵入り
混沌の闇夜に向かう日本丸
コロナ禍に酒は浮世の花となる
この噂尾鰭を付けた人が居る

犬山市　金子美千代

メールより声の便りを子に所望
コロナ禍のまたも一人の誕生日
誤嚥せぬようにおもちゃのピーヒュルル
キャリアある手を隠す事ないけれど
ウグイスに慰められている自粛

犬山市　関本かつ子

窓開けた私を包む鳥の声
お隣とマスクしたまま花談義
スマホから孫の研修作業服
お悔みも電話で終わる家族葬
コロナ去れテーマパークの大花火

愛知県　早川遡行

何でもなかった坂道が辛くなる
いいえまだワクチン接種してません
見つけたら見つからぬよう遠ざかる
お茶たてる庭に二人静の花
集まって笑い合える日いつくるか

奈良市　宇賀史郎

反対を拍手で示したい会議
トラブルに隣近所の見ず知らず
記憶から消したい過去と一人酒
子が巣立ちじゃれあっている口喧嘩
最後まで蛍光色を身に纏い

奈良市　大久保眞澄

シールためて貰った皿が具合いい
コロナ蔓延数字嫌いがまた進む
パトロール猫は朝から忙しい
顔見知りのノラ猫に呼びとめられる
ネコの挨拶はお尻でするんだね

奈良市　加藤江里子

連休をまたも二人で耐え忍ぶ
屈託のないセキレイと散歩かな
コロナ禍のいつもの朝に感謝する
柏餅夫婦で三個買いました
飼い猫も自粛疲れか痩せてきて

奈良市　高橋敬子

食べかけて慌ててマスク外してる
脱炭素成功祈るほかはなし
食べ飽きた頃から旬となる苺
あって良しなくて嬉しの庭掃除
真実もタイムリーすぎ不信呼ぶ

奈良市　辻内げんえい

作句するまでに回復この命
三月後にやっと聞き知る救急経緯
孫合格病室できく情けなさ
歩けずに南へ北へウェブ花見
花見ない春がゆっくり過ぎてゆく

奈良市　米田恭昌

コロナ禍に明かりマスターズの快挙
せめてもと洒落たマスクの地味な顔
黙食は親はテレビで子はスマホ
ＩＴ時代スマホ難民生き辛い
キャッシュレス益々ガラケイ生き辛い

生駒市　飛永ふりこ

花水木やっとの握手さらり散る
いらっしゃいスターチスから笑み零れ
ややこしい時は間を置く文庫本
緑風の花園息もリズミカル
伸びやかな新芽私が労られ

香芝市　大内朝子

子育てのつばめはあの頃のわたし
燃えるもの欲しくて買った赤い薔薇
ワクチンを他国に頼るもどかしさ
両親の遺影と語る日の増える
生きてるか心ホットになる電話

香芝市　山下純子

孫来れば気力財力全開に
孫らにはリビングの宿大人気
安全でクリーンな街子に繋ぐ
些事綴る平和な日々の日記帳
マスクして罪なき声ではしゃぐ子ら

奈良県　安福和夫

ゴルフコース神様宿る倭の心
マスターズ制覇支えた名キャディー
グリーン上感謝のお辞儀話題呼ぶ
由緒ある場所への畏敬胸を打つ
スポーツに国境超えた世界見る

奈良県　谷川憲

コロナ禍は日本の遅れあぶり出す
マスク越し分からぬままにご挨拶
コロナ禍に子らの元気な声嬉し
海綺麗になり過ぎたのか海苔不作
五七五を考え散歩伸びる距離

奈良県　中原比呂志

パンデミック令和エレジー籠の鳥
理不尽な世に現れぬ救世主
のど飴を舐めて居酒屋素通りす
自然体自由気儘な一軒家
コンパスを引けば二キロの輪で生きる

奈良県　中堀優

寝不足だ愛用枕猫が取る
城守る石の一つになる覚悟
帽子かぶる被らなくても喜寿は喜寿
犬に聞く咬まねばならぬ深い訳
きれいな花棘と毒とを忍ばせる

奈良県　長谷川崇明

エリートの走る舗装をされた道
八十年凸凹道をひた走る
白もまた華やかな色ハナミズキ
何気なく置いては探すことが増え
断捨離に心迷わす五割引き

和歌山市　上田紀子

約束を果たせば次の大仕事
沢山のお陰で無事に過ごす日々
糸口を掴んでからはよく弾む
焦点をずらせば私らしくなる
サポートをしたりされたり長期戦

和歌山市　柏原夕胡

紫陽花の今年はどんな色だろう
カラオケへ私も歌手になれそうだ
パトカーを追跡したくなってくる
人間に行き着いちゃった新コロナ
カルガモの健気見習いたい育児

和歌山市　古久保和子

エンピツはナイフで削る主義通す
賞味期限切れた噂に罪はない
アッチコッチソッチ私に道は開かないで
横書きの手紙に少し身構える
昼食は一人で済ますネコマンマ

和歌山市　松原寿子

新緑へ悔いなど捨ててひと回り
花畑の隅に笑顔の種を蒔く
初歩的な落度に腹が立ってくる
カラオケの力回転する頭脳
星空から夢降ってくる七回忌

岩出市　藤原ほのか

マスクつけ花粉症との逃避行
マスクして色々あるが隠される
自粛する延期と聞いてうつになる
一日を誰ともキャッチボールなし
ワクチンを打つ日予約し生き延びる

海南市　小谷小雪

お手軽な海外ツアーオンライン
絵手紙にざわつく心凪いでゆく
柏餅にすり足の亡母やって来る
むきエンドウ行方不明に二つ三つ
コロナ禍の渦ゆるくする友の声

紀の川市　山東日出男

外れてもお詫びはしない予報官
窓際で定年までの日を送る
ペットにも入園式がある時代
時刻表繰って日本の駅巡り
五輪旗の意味もしだいに褪せて来た

橋本市　石田隆彦

背伸びして飾れどまわり振り向かず
背伸びした影をライバルたちが踏む
慣れた頃もう新型の電子機器
順順に出せば映えない日本食
コロナ禍に疲れを抜かす場所がない

京都市　清水英旺

八十のテニスボーイの空元気
うしろ前着て思わず悪態ついている
気がつけば声に出してる独り言
四十九日亡き友との縁一区切り
人形のまなざし心のぞかれる

長岡京市　山田葉子

ワクチンが高齢者からって不思議
青もみじバスの中から見るばかり
言い返す言葉がすぐに出て来ない
ブランドバッグ重くて持てぬ歳になる
ノクターン弾いたら君に届くかな

大阪市　石田孝純

十六拍子五月の花のコンサート
物忘れ大義大義と鯉のぼり
葉桜が囁く華はこれからと
髭剃れば鐘馗アイドルかも知れぬ
雨上がりの新緑に活入れられる

大阪市　磯島福貴子

ワクチン頼み誌上句会に幕間近
補聴器眼鏡入れ歯の力借りる夫
入院の友見舞いの声も掛けられず
ルーキーの活躍楽しタイガース
百均でちょっと散財うさ晴らし

大阪市　井丸昌紀

打ち勝った証し打ち勝つ前に言う
行政のスタンドプレーに敵わない
コロナコロナ泣く子と府知事には勝てぬ
コロナ禍じゃ消毒足りぬ酒を持て
ひとりでこっそり飲んでたのに何か

大阪市　岩崎公誠

岐路に立ち遊ぶ方へと足向ける
盛り返す気持があって本気出す
偶然が生んだ出会いに花が咲き
透析の友は案外ゲンキ者
バースデー空いっぱいに星を撒く

大阪市　岩崎玲子

あれこれもコロナ明けたらしてみせる
気が滅入るせめて鮮やか服着よう
夢だけは持っていたいと空仰ぐ
のろのろのペースで生きる白寿まで
老いふたりサインちぐはぐ恙なし

大阪市　内田志津子

夫退院筑前煮グツグツ
一病があって陽気な月見草
復活の兆しタイ焼が美味しい
大ジョッキまたねまたねと自粛する
免許返納チャリンコ頼み春の野辺

大阪市　宇都満知子

累累と気付かぬままに鬱の淵
髪を切るのもマスクしたまま美容室
二ヶ月経って慣れました今の歳
一割の不安増殖する夜更け
保護猫のむぎちゃん孫は世話係

大阪市　江島谷勝弘

予定ではワクチン接種終わってる
あの笑顔ボクにだけだと思ってた
あと五千日明日をめざして生きようか
いつの間定着してる黒マスク
ジワリジワリ原発神話復活か

大阪市　榎本日の出

ご自慢の話その先知ってます
ぼやいてもその内馴れた消費税
決意して会えば友の目笑い出す
買物の足伸ばしたい上天気
6Bのタッチ見事な裸婦の線

大阪市　榎本舞夢

友が逝く未だショックを受けている
衣更え今年たっぷり時間かけ
カーネーション横目にはげむ五七五
連休明け銀行医者と忙しい
ポストまで廻り道して春を見る

大阪市　大川桃花

都会とは二軒隣の喪も知らず
蜜蜂の少子化ドローンで授粉
変異株コロナも必死に生きている
コロナ禍で日本の顔が暴かれる
平和呆けのしっぺ返しかコロナの禍

大阪市　奥村五月

発明をすればするほど泣く地球
コロナから話もできぬ遠い耳
家で酒親父の財布寝る論吉
残業は炊事洗濯自宅勤
ワクチンの終りが先か七夕か

大阪市　小野雅美

いくつもの嫉妬抱えて生き延びる
群れながら戸惑いながら後ずさり
疑いが晴れても染められるグレー
蒸し返しはしない美談にしておこう
原則で縛り摘み取られる個性

大阪市　笠嶋惠美

新築ホテル娘と食事若返る
髪カットすっきりしたらやる気出た
カットして素直になった我がこころ
日にひとつ特別味のチョコレート
チョコレートの出合い長生きしたくなり

大阪市　川端一歩

生前の笑顔を思う喪のハガキ
コロナ禍で人間少し荒れている
雑音も立場を変えて聞いてみる
女性のピーク人はいろいろ妻はいま
A面は川柳　B面は将棋

大阪市　古今堂蕉子

ああ祖母が母が歩いた同じ歳
コロナ禍に発狂もせず生きている
喋らない今日は半分溶けている
滑舌は悪いし舌はもつれるし
清め塩たんと撒く人ポッと撒く人

大阪市　近藤正

重症化生死はベッドの空き具合
赤木ファイルさえも改ざんしましたか
コロナ禍で死ぬかドン底で喘ぐか
危機察知先に逃げ出すのは私
医者代が倍になったらもう行かん

大阪市　坂裕之

寂しいが新酒届いて一人呑み
先ず形整えてから攻めに出る
要請を無視することは出来ないが
美味しいね家族そろってつつく鍋
何時になる句会みんなで話せる日

大阪市　髙杉力

さまざまな人間模様夜行バス
男手のひとりとなりて持つ棺
地玉子を土産にゴルフ帰り道
いいご主人と言われ違うなと思う
酒出せぬ居酒屋それは愚痴も出る

車椅子エレベーターは後ろ向き
認知症昔のことは鮮明に
認知症お手々つないで口ずさむ
マイナンバー数字に弱い九十五
百歳を目指した頃をなつかしむ

大阪市　高杉千歩

両陛下児童と交流ほほえまし
大谷君三刀流にほれぼれす
旬の味えんどう御飯たまらない
変異株医療崩壊どうなるの
阪神は一位キープで優勝を

大阪市　田中廣子

父の日を父は忘れているふりで
新茶汲む夫婦いつしか似てきたネ
やせ我慢せずに素直に老いゆかん
ふるさとが薫る草餅柏餅
沈黙が嫌で余計なことを言う

大阪市　田中ゆみ子

メロン奮発わたし独りの誕生日
ちょっぴりの梅酒に元気貰てます
粗衣粗食それで得心しています
畦道を歩けば其処に亡父の影
花菖蒲好きだったよね亡お母さん

大阪市　津村志華子

充電の途中で新茶一服を
残り火を掻き立て今夜踊らねば
五月晴れ自粛に遠い日の揺れる
シャワー強今日の私を流し切る
わだかまりふっ切れ今朝の空仰ぐ

大阪市　寺井弘子

顔を出すだけと称して三杯目
震度一我が家大きく揺れている
ワクチンの話になると凹む国
指切りをした手しっかり洗われる
ひっそりと隣も知らぬ家族葬

大阪市　寺本実

空の青ただ眺めてる無のわたし
息子から安否確認母の日に
泣き笑い手を取り合った介護録
静かなる今は極楽茶が香る
持て余す程ではないが今日も暇

大阪市　中井崩

皆帰り普段に戻りもう静か
たわい無く孫と話して元気でる
お返しは笑顔だけでは済まなそう
クロスワード今日を楽しく埋めてゆく
事実だけを話す母は強かった

大阪市　原田すみ子

緊急事態伸び伸びできぬ五月かな
孫たちとテレビ面会子供の日
孫の成長なるほど僕も年をとる
菖蒲湯で気分を若く子供の日
十万円ボーナス出ない子に回す

大阪市　平賀国和

小さい声で鳴く猫あれは愚痴だろか
転びました両手を上げて助け呼ぶ
母校には私の歌声聞こえます
賑やかな日は犬も負けずに吠えたてる
若いヘルパーに常識教える健常者

大阪市　宮崎シマ子

会いたいが家に来るなという辛さ
カレンダーコロナ人数書いている
懐かしい夫の声きき飛び起きた
ご先祖の夢を見た朝あったかい
笑顔っていいな鏡は正直だ

大阪市　山本加お里

緑濃く廃線跡の外来種
ディスタンス子離れさせてくれた日々
母の日は母が好んだ紅いバラ
終活の友が送ってきた古着
本物のビールがいいと父の日は

大阪市　横山里子

今日の始まり太陽浴びるスニーカー
たわいない日が幸せだった今気付く
空元気でも出せば背筋も伸びてくる
孫育て花丸もらい卒業す
ステイホームゴミの袋がまた増えた

堺市　今井万紗子

逃げまわるだけ退治できないコロナ
花も見ず飲みにも行けず梅雨模様
行くなと言うから行きたくなる旅行
コロナに見るインドとチャイナの違い
ケータイでひねもすゲーム肩が凝り

堺市　奥時雄

ミャンマーの竪琴の弦切れたのか
ビギナーズラックが罪な万馬券
面子捨てお世辞も武器の小商い
東京弁になった息子が他人めく
出演者だけが大笑ワイドショー

堺市　柿花和夫

帰阪したら東京よりも増えていた
ワクチン接種感染不安打つ不安
共働きで頑張った甲斐あり自活
出産に立ち会い育メンの覚悟
当世風ルビが要る曽孫の名前

堺市　源田八千代

堺市　齋藤　さくら

ああこれが今の日本頼りない
予定ではいそいそ句会開いてた
久し振り元気な顔に涙する
大阪が全国版で知れ渡り
コロナ禍で会わない孫が声変わり

堺市　坂上　淳司

食い縛りヤングケアラー達健気
黙黙とヤングケアラー親介護
後手後手の施策コロナの第四波
ワクチンの予約とまどう老いふたり
コロナ下に五輪強行する狂気

堺市　澤井　敏治

家籠り風流人になり切れず
半袖になり若返る聖五月
老人になったと思うこの二年
何波までやるつもりかいコロナ君
仏の座に嫉妬しているいぬふぐり

堺市　遠山　唯教

光りもの嫌い今でもない指輪
通過点と思っていたらもう米寿
掛流しの湯にストレスが溶けていく
検査後の喉に沁み込むミルクティー
救急の医者が担当する絆

堺市　内藤　憲彦

手を合わす医療従事の光る汗
妻に借りたんまりあって呆けられぬ
ほどほどに化けてこの世を泳ぎ切る
ワクチンを打ったら一歩踏み出せる
老いてなお輝きを増す好奇心

堺市　矢倉　五月

〆切日テレビと縁を切る勇気
明日からはあしたからはを繰り返す
四季の土耕す父母を知る学費
駅前のランチで嬉し老いの恋
生きてたら返信せよと来る保険

池田市　太田　省三

目覚ましは始発電車の走る音
ジョギングの用具揃ったころ飽きる
テレビほど見栄えよくない警察署
マスクより君と一緒が息苦しい
弁当の隙間がいつも埋められず

貝塚市　石田　ひろ子

労られやさしい風と丸く住む
見て見てとばらが自粛の鬱を剥ぐ
図書館のひっそりコロナ仁王立ち
ウォーキング脳に酸素を送り込む
単線のしばしコロナの消える旅

河内長野市　大島　ともこ

バッサリと切られ未練の余地も無し
暇つぶしのゲームアクセル踏んだまま
ツンデレのタマは我が家の女王様
沈みそうな心救った無邪気な目
真っ直ぐな瞳が射抜く下心

河内長野市　梶原　弘光

付き合いの濃淡判る自粛中
老いの身に覚悟を迫るトリアージ
不要不急解せぬ街角インタビュー
じいちゃんも路上飲みしたその昔
あほやなあと言われホンマやと思う

河内長野市　木見谷　孝代

老いも良し心折れない鈍感力
母の日を花と鰻で祝う膳
子は来ずとも子の優しさに包まれる
友のおかげワクチン予約とれました
日記からコロナの文字はいつ消える

河内長野市　黒岩　靖博

連れ添って持ちつ持たれつ何処迄も
古傷に触れて諍う夫婦仲
ワクチンを打ちたし後遺症不安
無精髭マスクで隠し手抜きする
知事自粛部下は送別会で無視

河内長野市　辻村　ヒロ

神棚でワクチン予約待っている
てきぱきと子に連れられた検診日
自粛にもすっかりなれたコロナ色
心こめて一行日記続いてる
恥じらいを忘れていない老いの坂

河内長野市　中島　一彌

身構えて非通知電話とってみる
コロナ禍をどう着地する病むヒト科
豹柄のエプロン着けて燥ぐ妻
スイッチオン熱い味噌汁白い飯
ノスタルジー端午に折った紙兜

河内長野市　藤塚　克三

言い返すも続く言葉が出てこない
選んだか選ばれたんか五十年
老いた今若さの価値を思い知る
座右の銘〝努力〟と書いて酒にする
コロナ禍に薄れゆきそな侘びと寂

河内長野市　村上　直樹

五月晴れ両の手広げ腕まくり
特大のマスクで隠す不精髭
お上手にうまく乗るのも老いの知恵
強敵は老いを知らない酒の虫
誰しもをまさかと絶句させコロリ

河内長野市　森田旅人

眠い目をこすりワクチン整理券
見舞いには行けぬ姉妹の糸電話
籠る日々言葉の森にいて楽し
ハミングのこぼれる雨の日の蚯蚓
旅立ちも涙も早い者勝ちだ

岸和田市　岩佐ダン吉

空気だけ褒め旅の人もう来ない
人間だ核のノーだけ譲れない
敗北にまさかはないね思い知る
マスクだけしてます隙がありますか
大阪弁どちらが勝ったのだろうか

岸和田市　宮野みつ江

コロナへの緊張と警戒十四ヵ月
「母の日」ありがとうの葉書娘から
K点を大きく超えている孤独
気持も体もいやいやをするコロナ
ぐしゃぐしゃの夜には明るすぎる月

岸和田市　雪本珠子

コロナ禍でメンタルヘルス予防する
思い出があの日あの時連れてくる
きらびやかな世界夢見るガラス玉
モノクロのアルバム昭和蘇える
川柳でぼやいています今の世を

吹田市　太田昭

人生の凸凹道を駆け抜ける
人間が好きで裸足で会いにゆく
噛み合わぬネジの角度を変えて老い
平凡という安定剤を飲んで老い
五色豆みんな仲間の顔になる

高槻市　片山かずお

お出かけの最初にチェックする財布
植えるなら花より食べられる野菜
食べたいと太るのイヤがせめぎあう
場の空気読まぬお方は呼びません
僕が悪いと分かっているが出ぬゴメン

高槻市　島田千鶴子

鎮守の森迎えてくれた若葉風
紅をさすこころが少し前を向く
ポケットに飴玉心には愛が
ビル裏の古い町並瓦屋根
早口のお笑い耳が追いつかず

高槻市　初代正彦

巣ごもりの今しかできぬことがある
悔いのない明日へ鍛えるふくらはぎ
ワクチンの予約するのもおおわらわ
あの店もテイクアウトで耐えたはる
翔平の笑顔ににじむ心意気

高槻市　富田保子

川柳を考えながら靴を履く
うららかを潰しに黄砂やって来る
古い恋風が散らして新芽出る
主婦の午後やさしい曲でティータイム
帰省子の力も借りて庭仕事

高槻市　原　洋志

読んでみるか老いに優しい歎異抄
不要不急自問自答の理容院
面会不可下着届ける窓口で
物忘れ試練重ねて生き延びる
コンビニですます赤飯内祝い

高槻市　松岡　篤

巣ごもりで積ん読少しずつ消化
階段でつまずく年になってたか
頂いた句集大事なコレクション
土産にはブレの少ないのが地酒
我慢強い方だが睡魔には勝てぬ

高槻市　安田忠子

プールにて歩く姿にマスクあり
団欒の鍋かこんでるコロナ禍で
家族みなメガネかけてる賢そう
補聴器をつけぬ私に孫どなり
あぁーしんど今日も明日もあぁーしんど

豊中市　池田純子

菖蒲湯にやんちゃな顔が並んでる
主婦である私はずっと夕刊派
ベランダの小さな春にある元気
花粉から解放されて布団干す
嬉しいなあ今年も新茶飲めること

豊中市　上出　修

脱炭素太陽光が胸を張る
老いらくの恋に細胞若返る
知事油断襲いかかった変異株
取りあえずなるほどなあと言っておく
決算書ちょっと飾って税務署へ

豊中市　きとう　こみつ

大人にも時に公文は役に立つ
ジャンプ台の様な大阪駅の屋根
ギリギリなのか手遅れなのか温暖化
世界一やさしい味である母乳
上皇様をそっと支える美智子様

豊中市　藤井則彦

素のままで生きて行くにもある誇り
丸文字の恋文呉れた人も喜寿
息子より孫の一言ちくり効く
密という字に染みてきたコロナの禍
危機一髪は渡世の糧となるチャンス

豊中市　松尾　美智代

教え子を花の名で呼ぶ師は卒寿
たんぽぽと言われたんぽぽ好きになる
雪割草言われた友は今花野
師は吾亦紅みんな集まる花の家
また自粛田舎の家に閉じ籠る

豊中市　水野　黒兎

野いちごの赤くきらめく里の初夏
ところてんあの頃母は若かった
ゆっくりに見えて着実カタツムリ
スマイルを売り物にして人気店
雨のち晴れそれまで待てず人動く

富田林市　片岡　智恵子

お望みとなれば画き足す笑い皺
本音だけ吐いて溺れること知らず
それなりの理由(わけ)あって疎遠になりし
窓開ける昨日の蝶の姿なし
清流に泳いだ鮎の自尊心

富田林市　中村　恵

目的をしっかり見据えてる瞳
でしゃばらずほど良く温い思いやり
なりゆきでその場に笑顔置いてくる
目隠しの指の隙間で見る世間
セピアのベールは昔を美しく

寝屋川市　伊達　郁夫

初恋とばったり会った夏帽子
唇を読んで介護の声を聞く
愛三分我慢七分で未だ夫婦
逆転の流れを変えた犠打ひとつ
恋をする度に私を見失う

寝屋川市　冨山　ルイ子

マスク手縫い二百作り終ります
待ち針に縫い針数かぞえ
ズボン出してウエスト調べ大丈夫
出かけるな言われ一人で行かれない
家族皆大丈夫です元気です

寝屋川市　平松　かすみ

一句一句重ね二千句抜けました（川柳ねやがわ）
追憶に浸る句報の高さかな
偲びます亜鈍放送局テープ
テープにはみんなお若い声ばかり
コロナ禍も種を探して指を折り

寝屋川市　森　茜

漱石のとりこになって家ごもり
花時計ぬらしていった通り雨
哀しみにぶつかる想い出の古城
泣き虫のピエロがやってくるジンタ
祖母がお世話になっていますと言うている

羽曳野市　磯本洋一

アスパラがハウスの中で背比べ
満天の星見上げれば母の顔
味噌汁の祖母の味付け星二つ
不用品家にはないね妻睨む
上トロを食って並鮨提げて帰路

羽曳野市　宇都宮ちづる

出張の楽しみ消えたテレワーク
ステイホームそれでも空は青が良い
巣籠りを充実させた味噌造り
心地よい風に花ビラ乗ってくる
大声で笑う娘はオンライン

羽曳野市　徳山みつこ

新緑がつつむ八十路の夢行脚
母の日に声半時間外地の子
○×でやっと八十路に辿りつく
スマートな彼に片思いが続く
夏帽子に任す髪の七変化

羽曳野市　藤原大子

巣ごもりに閃き消され嘆く脳
巣ごもりの何もしないで肩凝らす
あるあると人の句読んでほくそ笑む
老いてから見える物ある目の高さ
沈んでる心へ魔法はいチーズ

羽曳野市　三好専平

酒たばこやめて頭が狂い出し
酒飲んだ過去だけ語る断酒会
コロナ禍で生前葬をすませとく
コンビニのお菓子供えて供養する
クローバーの花がかくれて咲く小道

羽曳野市　吉村久仁雄

春の風しあわせ色にぼくを染め
国思うたびに乱れる心電図
好きは好きと嘘をつけない君が好き
故郷に泣きに来たけど海は凪
町工場やめても取れぬ油染み

東大阪市　北村賢子

コロナ禍の日日を普通に生きる幸
出かける度に鉢植え増える家ごもり
巣ごもりへ蝶やスズメが会いに来る
ベランダに出ては酸素を吸う自粛
生かされる今退屈なんて罰当たり

東大阪市　佐々木満作

コロナ禍のナースの奮闘にエール
女子アナのコラージュ解説の妙技
無言電話相手の意図が計れない
真夜中も十七音の指を折る
ご先祖に無事を拝んで床に就く

東大阪市　西村哲夫

白米おもちお茶明日も明後日も
黙食は行儀作法の基礎知識
仏飯は蓮のつぼみにして候
衣食住満たされ尽くし倦怠期
自粛道行者のままで日が暮れる

枚方市　谷英也

スマホ挑戦諦め切れぬ八十路です
番傘も蛇の目も遠い少年期
ネクタイを締めてひさびさ八十路会
コロナ禍でも恋は芽生える事もある
ワクチンの希望を託す昨日今日

枚方市　丹後屋肇

断捨離と聞いてドキッとする長寿
タワーマンが幅を利かせる河岸に建つ
亡妻が呼べばさっと撥ね起きる
意識朦朧そのまま死なせてくれますか
虎の優勝見て死にたいと言うてはる

枚方市　藤田武人

還暦の息子が照れてありがとう
写真立て掲げ笑顔のツーショット
バランスの中に隠している個性
蹄鉄も鞭も鎧も無い余生
誇り捨て黒子になった元王者

枚方市　藤村亜成

スマホが苦手で少くなる対話
マスクする顔みな感染者に見える
抜け殻にならない程度の夢を持つ
銃社会消えねば核の国消えず
祈るほか無し　わたしにできること

枚方市　山口弘委智

マスクして目と目にことばあふれだす
幸せの色を選んで四季画く
時間には穴があるのか記憶とぶ
失言を一歩手前で噛み殺す
大空に雲一つない子供の日

藤井寺市　太田扶美代

昨日持てた今日は持てない花の鉢
春爛熳外出自粛禁止令
わたくしを山好きにした山野草
気が遠くなるほど待っている便り
嫌ってた河内言葉に癒やされる

藤井寺市　鈴木いさお

終息したら行きたい所したい事
巣籠りをするには空が青すぎる
妻と住むここが私の着地点
人生劇場お酒と歌と川柳と
7月2日コロナワクチン接種の日

藤井寺市　髙田　美代子

郵便番号違わず書けたからセーフ
口紅はつけずマスクは汚さない
コロナコロコロ大阪は赤信号
政治家の発言誰が聞いている
雑草の元気誉めぬのに伸びる

藤井寺市　吉田　喜代子

近頃は知ってた字さえ辞書頼り
ああ悲し指先力入らない
座り過ぎ足の機能も忘れおり
連休明け主治医の顔を見た安堵
憎い人も可愛い人にならはった

箕面市　大浦　初音

背にふれる手から伝わる真心よ
ここだけの話はすぐに歩きだす
口下手で気のきいたこと言えません
手の平の上で踊るの許してる
マスクに慣れ素顔さらすの面映ゆい

箕面市　酒井　紀華

万緑のパイプオルガン鳴りやまぬ
まだ続くコロナが憎い不整脈
ジェネリック効き目がどうか分からない
思い出はエンドレスラブ　リアルです
お別れの科白リアルに思い出す

箕面市　出口　セツ子

出歩いていたのが自宅警備員
短時間遠慮しながら友と会う
巣ごもりで推理小説ばかり読む
我慢我慢コロナに春はまだ見えぬ
人間も明日も信じる五月晴れ

箕面市　広島　巴子

コロナ退治願って飾る武者人形
孫思いちまき菖蒲湯邪気払う
玉手箱開けて懐かし童歌
久久のお洒落ワクチン会場へ
バッジ付け頓珍漢な記者会見

八尾市　寺川　はじむ

やっとこさ戦士匂わす春のトラ
人類の行方を乱す新コロナ
決断も捨て場で揺れる汚染水
味気ない答弁よりも粋な野次
幸せ過ぎて抜けなくなって来た指輪

八尾市　村上　ミツ子

大好きな五月コロナあばれてはいても
ワクチン予約うまくできますように
しっかり自粛しているがゴミは出る
こきつかわれているからやっと生きられる
こどもの日亡夫と食べる柏もち

大阪府　米澤俶子

獅子唐の焼く匂いから夏が来る
六十余年しあわせでしたお線香
躓いて自分に帰る独り言
今年も届く不老長寿と言う新茶
幸せ思う大事であったひと想う

神戸市　上田和宏

逃げるが勝ち逃げるが勝ちよコロナから
あの時にああしてたらと夢芝居
言われたくないが凡人だと自覚
成り行きを楽しみましょうこの先は
午前0時やっとワクチン取れました

神戸市　奥澤洋次郎

その所為にしたくはないがコロナ自粛
半生は無駄であったか指を見る
眺めているそれだけでいい人だけど
止められぬ理由聖火が走っている
阿呆なことときっとみんながしているよ

神戸市　斎藤隆浩

巣ごもりに慣れて外出億劫に
禁煙はできても禁酒できません
投函後もっと良い句が閃いた
自販機におじぎしてから取るビール
リモートじゃ何だか酔った気がしない

神戸市　敏森廣光

下界の悩み吸い込むような五月晴れ
師の言葉私の腹で生きている
飲んで笑う仲間恋しい巣ごもり日
ステイホーム一番仲良しはスマホ
やさしさだけが僕の君への贈り物

神戸市　冨永恭子

母の日は母とたっぷり話する
控え目な妻を演じて薄化粧
「お茶にしよ」一番嬉し午後三時
来た道へ家族のさりげない讃歌
ハイセンスな君のおさがりなら嬉し

神戸市　能勢利子

紫陽花がみかんレモンの陣地取る
花よりもトマトにキュウリかぼちゃ茄子
買った方が安いうまいと言われても
諦めず電話の前で三時間
通じたら用件忘れひと呼吸

神戸市　松倉正美

USJ孫と約束してたのに
ティータイム妻の手作り柏餅
二次会は家に帰ってリモートで
リモート飲み此れ見よがしに高級酒
ワクチンの予約取れたと子にメール

神戸市　山口光久

八十で川柳始め輪の中へ
川柳が老化を防ぐ手立てかな
白髪を地味に着こなす淑やかさ
気晴らしに変身したい自粛中
さり気なく嫌みを言って笑っとこ

神戸市　山口美穂

笑顔の仮面被れるうちは生きられる
詰め込んで開かぬ引出し自己嫌悪
自粛ストレスひとり芝居で暮れました
コロナ終れば会いたい何度言ったら
宇宙からは地球は小さいのに揉める

神戸市　山崎武彦

胎教へモーツアルトの調べなど
妻の留守子猫が膝に来てくれる
古書店で高峰三枝子に出逢う幸
ふたりの秘密たっぷり聞いた運転手
花曇りリモートの夫側に居る

明石市　糀谷和郎

コロナ禍が呼ぶひとときの青い空
去り際の笑みが謎めき寝付かれぬ
気を許す君を信じていればこそ
ジャンプしてみるか目線を少し上げ
寂しくて繕う笑みがなお虚し

芦屋市　竹山千賀子

野焼きした土に期待の芽が育ち
春なのに通院日だけのカレンダー
ポロリポロリ酒が引き出す小さい罪
床の間に花一輪を挿すゆとり
桜散る今日のページは過去になる

尼崎市　近兼敦子

手のひらで踊っています気分よく
いい日だと思えばご飯美味しくて
大丈夫ブレないことで守られる
しっかりとしている母も演じます
優しさにスッと痛みは救われて

尼崎市　永田紀恵

歩きスマホおでこにも目が付いている
歩きスマホ蹴躓いても離さない
車窓からの景色は要らぬ目はスマホ
スマホ繰る指の指紋が消えている
ばあちゃんはスマホ私はガラケー派

尼崎市　羽奈和子

アマビエがまぎれていそう鯉のぼり
公園に涌いて出てくる子どもたち
練習だ居間にテントを張る夫
ベランダでキャンプしようと誘われる
エサ撒けばふわっと浮いてくるメダカ

尼崎市　藤井宏造

自粛自粛で染みついちゃった怠け癖
廃車まで使わなかったエアバッグ
なおみちゃん小鳥のような声を出す
両の手で握手する手は裏切れぬ
歳のせい動じていない振り出来る

尼崎市　藤田雪菜

八重桜に酔いふる里は走馬灯
春の陽気に軒先の花密になる
まだ着れる出してはしまう二十年
玄関の隅靴五足おく防犯に
姉妹強し男はみんな天国へ

尼崎市　山田厚江

真黒な瞳で僕を見る赤子
宇宙人みたいな双児とび出した
哺乳瓶二本持っての授乳です
娘の部屋番号忘れメールする
死ぬつもりで事に当たった事がない

加西市　山端なつみ

母の日の花とステーキ早や来たる
柔らかい肉は差し歯にも優し
昨年の鉄仙もまた花咲かす
母の日は母に供える柏餅
母の日は手軽か寿司がよく売れる

川西市　山口不動

散る桜見事見事でうらやまし
友消えて故郷に帰る甲斐も無し
端居して感染者数眺めてる
白魚の白い璃花子がゴールする
五月行くステイホームの窓の外

三田市　足立つな子

親ゆずりさらに励んで功をなす
人混みさけてチョウチョひらひら路地ぬける
ゆったりと湯浴みに浸る旅の宿
ドアノック診察室はフルネーム
日の出起きゆったり構え朝仕事

三田市　上田ひとみ

先の先そのまた先の佳い話
情報はエエとこ取りに致します
探し物見つけてくれるあなたなら
筍ご飯うす味で美味しいね
知り合った頃の木綿のハンカチーフ

三田市　大西重男

ワクチンの予約電話は超過密
好天気不要不急で日向ぼこ
デイサービス身体は病んで口病まず
くもの巣を全部払って虫助け
エレベーター行先ボタングウで押す

三田市　尾崎一子

肉体もこころも遮断するコロナ
疫病のルーツをたぐる知るや今
ナース不足こころが痛む血がさわぐ
人と人支え合うのは今でしょう
老いのガッツ喜楽に川柳今を生く

三田市　九村義徳

理屈より行動力が物を言う
愚痴聞いてくれた仏に手を合わす
我が儘も仏の顔になる白寿
しがらみを絶てば世間が広くなる
古稀越えて心まあるくなりました

三田市　多田雅尚

大関が最高位だと知る令和
酒許す掛り付け医を信じます
棒読みの方が気になるコマーシャル
プライドを傷つけぬ様する介護
携帯を持てば監視の目が届き

三田市　谷口修平

ウイルスに翻弄されている五輪
名言をパクッて書いた遺言書
鑑定に出して唖然とする家宝
はつらつと嫁が家風を変えてゆく
愛の無い体罰だから踏み外す

三田市　野口真桜子

手におえぬコロナが刻む自由律
女性軽視五輪の波がうねり出す
キャベツ畑で少女は蝶に羽化をする
影武者を先に行かせる冥土道
御褒美ですか生命線がまたのびる

三田市　福田好文

コロナ禍が酒ない花見せよと言う
坪農園あれもこれもと野菜苗
腰痛を知らぬ田植の音がする
残りビールで食後の薬飲んで寝る
検査入院すれば近所が癌にする

三田市　堀正和

八十路には似合いませんねグータッチ
連休も眠ったままの時刻表
貸農園ヤル気出してる耕運機
時時は株価欄見て呆け防止
コロナ禍も年金出るし元気やし

三田市　村田博

ワクチンの順はあみだくじで決める
突っ込みとボケ入れ替わる舞台裏
溜め息をボトルに詰めてまた明日
さりげなく本題記す備考欄
虎の尾をうっかり踏んだあかんたれ

高砂市　松尾柳右子

街路樹の緑コロナに立ち向かう
一日の長さ西陽と仲良しに
GW街ひっそりと老齢化
テレビから情報貰い独り住む
お互いにコロナ心配する電話

宝塚市　丸山孔一

休みたい心叱ってジムへ行く
冬炬燵夏は縁台昭和の日
流れ星宇宙のゴミもあるだろう
若者よ海外へ出る人を見よ
ルビ無けりゃ教師泣かせの生徒の名

丹波篠山市　北澤稠民

青空に夢を託して今日も生き
田の匂いやっぱりここが落ち着いて
汗流す鍬にも歳の波が寄せ
遺言に墓石に一句刻んでと
花が咲く優しくされたところから

丹波篠山市　酒井健二

ああコロナ悠々自適揺れている
回り道お陰で謎が解けました
七坂を越えても鬼が現れる
もう二度と直立不動やりません
浮かれるといつも誰かを傷つける

丹波篠山市　長谷川善輔

〝オオタニさーん〟君見るために番組予約
天気晴朗世はウイルスが大威張り
無観客相撲のテレビ響く拍子木
こんな春あったねと早くひとつの想い出に
マスクなしビクビク歩くご近所散歩

西宮市　緒方美津子

世知辛い世だといいつつ薬飲む
今チャンス夫に伝授かくし味
度のゆるいメガネの方が生きやすい
母の部屋ちょっと覗いて出かけます
3キロ減誰も気づいてくれません

西宮市　福島弘子

二十年の思い出浮かぶ猫の茶毘
ステイホーム用具ばかりが増え多趣味
初陶芸味わいあるを真に受ける
津波跡松原目指し育つ苗
幸せの形おいしい自家のパン

西宮市　福田正彦

ウイルスが地球の野蛮見て怒る
緊急下灯火管制ふと思う
生き甲斐の極意を探り生きている
ずれている人命経済天秤に
トキメキは若さを保つ常備薬

南あわじ市　萩原狸月

ばれる嘘地位を守るて悲しいね
空港で見送る顔が笑えない
石段の息整えてお賽銭
前向きに今日も書を読みウォーキング
平凡な一句を生んだ普通の日

岡山市　大石洋子

少女期がぼやけてくるぞ白黒写真
「おかん」と呼ばれ「おかん」なんだと自覚する
母の日に母と知らしむ花届く
お別れはちゃんとしたいねコロナ世も
よぼよぼがよぼよぼ生きるあとすこし

岡山市　工藤千代子

にっぽんを愉しみながら生きてます
茶柱が揺れる決心変わらない
天国をちょっと覗いただけの旅
そういえば忘れています泣く事を
元気かと亡父から一行のハガキ

岡山市　丹下凱夫

うどん好きみんな哲学持っている
日の丸を高々揚げるみどりの日
四十年間耳鳴りつづいている
深呼吸どこでもしたくなる五月
駅前広場にハナミズキの若葉

岡山市　前田恵美子

桜の木若葉に変わりはや五月
コロナワクチン準備片付け忙しい
食事会友と約束また延びた
初夏の味伽羅蕗炊いて友の家
寝る前に新聞読んでまた明日

笠岡市　藤井智史

脳内を大掃除する息吹です
パワーオブドリーム今を駆け抜ける
愛という無限ループに落とされる
怖いほど充実　幸せな日々だ
1＋1愛を融合する未来

岡山県　髙岡茂子

かかと刺し梅雨を知らせる大百足
人間の裏は見ないと言った人
無知な自分は博識に惑わされ
酔うほどに楽しいトーク惹かれてた
あの世での恋の続きを楽しみに

岡山県　田中恵

春うらら昼寝の夫は指を折る
目に青葉安定剤になる命
シャボン玉ふわり幼い風になる
真ん中の高たか指はよく威張る
ゴーヤ植え日除けと味噌の炒めもの

岡山県　藤澤照代

春雨も入れて帰ったエコバッグ
空き家とは知らぬ燕の里帰り
ステイホーム体重計を酷使する
マスクよしアイメイクよし朝を出る
年重ね種も仕掛けもない夫婦

広島市　岸本清

寝押ししてズボンをはいた二十代
見初めても直ぐに消え去る老いの恋
いつ何があっても恥じぬ身だしなみ
台風も中国恐れ向き変える
先読みのできぬ政治家いりません

三原市　鴨田昭紀

ひび割れた瓶の向こうでする戦
肩書きが付くと人相まで変わる
ジェラシーと愛が混在する濃霧
陽の当たる場所が苦手な裏表紙
葉桜になってもおとこ対おんな

三原市　笹重耕三

不安気に咲き不安気に散る桜
午後八時を破るとみんな吊し上げ
隙だらけの妻でそんな春が好き
好き嫌いがあって人間しています
スーパーの焼き芋野心などはない

岩国市　上村夢香

千波の絵に魅せられてまた美術館
親友と今ははがきがお気に入り
神宮で応援しましたつば九郎
聴き逃しサービスで聴く自分の名
真夜中の再放送はさだまさし

宇部市　平田実男

愛妻へ内緒の人が胸に住む
墓地の草取りがせめての恩返し
昭和一桁で断捨離など出来ず
ネクタイへからかわれてる老いの指
絵日記にしてヒマワリを喜ばせ

防府市　坂本加代

郵便の来ない日はさみしいポスト
花見頃同じ歩調で花粉症
警察犬臭い探知でロボに負け
慣れてきた自由検温出入口
細胞を洗ってくれる再起動

鳥取市　池澤大鯰

平穏無事ドラマは見るだけでいい
離婚劇別のドラマが待っている
有名になっては裏は見せられぬ
勢いで突っ走ってた青二才
他人に潔癖おのれに甘いルール持ち

鳥取市　奥田由美

せっかちな人と信号フライング
アジア系ドラマを真似て探る腹
減量を言わぬ主治医も甘党派
山萌えるほども燃えない体脂肪
大臣も鬼滅のマークつきマスク

鳥取市　加藤茶人

無器用でノロマそれでも君が好き
昭和史の裏にギブミーチョコレート
尿漏れに何か終わったやるせなさ
背を向けて逃げても良いよ風見鶏
良薬は医者から貰う「大丈夫」

鳥取市　岸本孝子

膝の骨使い過ぎたとなでてやる
叶えたい夢だけ追って生きてきた
若い日を無駄に生きたと今思う
それぞれの夢を叶えて孫巣立ち
野暮なこと言っては笑いあう夫婦

鳥取市　倉益一瑤

唐辛子混ぜて私を主張する
レントゲン写るは恋のかけらかも
ゆったりと余生はさざ波のように
噴火する手前で一度深呼吸
しがらみを秤にかけている日暮れ

鳥取市　田賀八千代

ラストダンス相手貴方に決めている
お喋りな雀に釘を刺しておく
愛の唄奏で育てた雛が飛ぶ
仕方ない笑い飛ばして風を待つ
変化球で貴方の心掴めない

鳥取市　棚田大

身軽さにこだわり過ぎてどんと痩せ
未来への決意語るも弱い声
えっ決意聞いただけでも引き締まる
わめく子もコロナ情報じっと見る
未解決コロナ禍所為に逃げている

鳥取市　谷口回春子

思い出が語りかけます亡母の部屋
キジバトが帰ってきたけど住処ない
ほほえみに厳しい躾腰砕け
あっぱれといった途端に元の鞘
頑固さが偶に顔出し活入れる

鳥取市　永原昌鼓

幸せの時短くて夜が明ける
他人には話せぬドラマ今日生きる
高血糖今日も我慢のお茶にする
最大のドラマ二人で生きた日々
おいしいね決め手は塩のひとつまみ

鳥取市　中村金祥

伝説になりたい奴が我を通す
観客が無くても命かかってる
ただの風邪ぐらいに思い油断すな
失礼が重なっているお葬式
たわいない会話平和な家が好き

鳥取市　副井ゆたか

がん告知医師のひとこと噛み締める
定年で捨てた仮面がなおも生き
県境を跨がぬように小さい旅
土日祝避けてお出かけ老い二人
密避けてテニスが出来る至福感

鳥取市　福西茶子

コロナコロナあなたの顔も忘れたよ
ダイヤ婚やっぱり夢の夢だった
ホッとして頭痛腰痛腑抜けにも
笑ったら消えた眉間の皺二本
断捨離の服で独りのファッションショー

鳥取市　前田楓花

入れ方がうまい夫のお茶どうぞ
美味しいと褒めて任せるナポリタン
穏やかな顔も光と影をもつ
花びらのひとつひとつにものがたり
亡くなったことだけ聞いたお葬式

鳥取市　山下凱柳

冗談も笑いも消えた老い二人
あってなきルール守って半世紀
雑草との戦い終えて後遺症
誰だっけ今挨拶をくれた人
人間の驕りにコロナ倍返し

鳥取市　吉田孔美子

夏も股引でもお節介はよそう
憧れは無いのか通学の足遅い
つやつやの柚子に憧れトゲに泣く
ユニークな夫婦にそれらしき病
宝物の石日光浴させる

鳥取市　吉田弘子

パン食に慣れアカ抜けたお婆さん
七月のコロナ気を揉む棒グラフ
家族みな戦争知らぬ世代なり
ありがとう一杯言って灯消す
まねき猫のマスク休業耐えている

倉吉市　猪川由美子

変異ウイルス強い敵振り回される
マイペース他人の視線気にしない
裸の王様老人なのを知らずいる
カタカナ語増えて学ぶに忙しい
コロナ貧困女子は生理が付いてくる

倉吉市　岡崎　美知江

美人より可愛い人がよくもてる
売られゆく牛かわいくて悲しくて
ふるさとの話にチャック冬の雲
手紙には修正液の涙跡
ほろほろと涙重なり強くなる

倉吉市　田中　紀美恵

ほどほどの愛の言葉に若返る
春風に吹かれきままな旅に出る
ほら吹きは心にぽかり穴があく
風船に私のうっぷん吹き飛ばす
母のがんうそでしたよと言っておくれ

倉吉市　牧野　芳光

人間も花も変ったのが目立つ
草刈りをして腰痛を追い払う
届かないとこで咲いてるヤマホウシ
人類皆兄弟コロナ禍と対峙
コロナコロナと大事な時が過ぎていく

米子市　池田　美穂

寅さんの後は浜ちゃんちゃっかりと
草だけはうちを忘れず来てくれる
歌舞伎役者のごとコロナ七変化
日本をドームにしたい黄砂の日
飼い犬もマスク欲しいと吠えている

米子市　伊塚　美枝子

古稀の坂越えてロマンが遠くなる
コロナが消した金婚旅行ハワイ行き
まだいける夢追いかける気力ある
いらぬ事ばかり出てきて名前出ぬ
収集癖が終活整理邪魔をする

米子市　後藤　宏之

肩の次腰の痛さとまた勝負
形見分け涙しながら手をのばす
ご機嫌の波を予知してかわす術
予備ですとメガネもキーも二つ三つ
うっかりの自覚もなしで高齢者

米子市　後藤　美恵子

童心に戻って里の野に遊ぶ
コロナ禍にお～いお茶だと集まれぬ
血圧が自粛のお蔭安定す
望んでた人と添い遂げ果報者
一周忌姉の遺した花立てる

米子市　竹村　紀の治

ひとり飯サンマ鮭鯖水煮缶
ステイホーム孤食独酌ひとり言
新聞もテレビも僕もコロナ漬
幸せなときは何とも思わない
横綱もお客も居ない大相撲

米子市　中原章子

不揃いの新鮮野菜売り切れる
珍しいうちに筍賞味する
コロナ禍にかたちばかりの式挙げる
ご機嫌を伺う電話かけてみる
燃え尽きぬようにゆっくり燃えている

米子市　成田雨奇

覗かれていると思うと元気出る
腕相撲だけは妻にも勝てそうだ
神様になれない奇跡足りなくて
気まぐれな選者がいてもいいのにな
酒がうまけりゃ肴にはこだわらぬ

米子市　野川宣子

お宝もなくて仲良し三姉妹
目標はひ孫抱く日が来るまでは
抱きついて来るのは犬と猫ばかり
笑顔には不思議な力元気湧く
星五つ弁当箱はいつも空

米子市　吉田陽子

帆を下ろす心の曇り消えるまで
マスクをかさに女を捨てておりません
花のことならば私も輪に溶ける
進化した脚です正座ままならぬ
微笑返しして下さったお月さま

鳥取県　門村幸子

早五月ミニ鯉のぼりぶら下がる
さわやかな朝の目覚めを取り戻す
ケーキ屋のケーキでハート丸くする
コロナ禍の嬉しい誤算読書欲
お出かけにチェックマスクとさわやか度

鳥取県　斉尾くにこ

ふるさとの海と国道九号線
独りじゃない独りじゃないと一人いる
努力感見せないようによもぎもち
メンタルは豆腐くらいの柔らかさ
自分から光らぬ月はおだやかに

鳥取県　竹信照彦

空っぽの頭でひねり出す答
体温計イエスもノーも君しだい
焦らずにつないでラストチャンス待つ
負け試合それでもやんや老い二人
孫や子と共に数えて年を追う

鳥取県　細田裕花

コロナコロナ窒息しそうです自粛
連休は脇目も振らず草むしり
絶妙の距離感杉の美林です
五月の仕合わせ豆ごはんが美味い
ワクチンはまだ変異株忍び寄る

鳥取県　山下節子

本当の内緒は胸に秘めておく
いい音だ狸の皮の大太鼓
初恋はフォークダンスではじまった
子等巣立ち身軽にとべるのにコロナ
八十路きて身軽になれぬ主婦である

松江市　藤井寿代

手のひらに降ってきそうな里の星
春から夏の音符に変わる聖五月
夏の入口で読み返すファーブル
なぐさめる形で咲いたカーネーション
精一杯今をぼんやり生きている

松江市　松本知恵子

外出はしないが飛んで行くマネー
マスク取り緑の風と山歩き
師の家も静かで空家多い町
コロナ禍の悲喜こもごもの聖火リレー
山鳩が鳴く母はどうしているのだろう

出雲市　伊藤玲峰

メダカすいすい蝶々ひらひら
山脈がはっきりしない窓閉める
コロナ感染落着きみせずまだ自粛
プロ野球テレビ観戦しかないね
孫も曽孫も婆ちゃんも躍起の応援

出雲市　岸桂子

夕映えに過去の記憶を濾過される
追い越して見たくはないか影法師
心機一転答をくれた茜雲
赤ちゃんの足がこれから立つ地球
逢えばまた燃える火種を抱いている

雲南市　菅田かつ子

負け上手になって長生きしています
その日からぽつんと一人のコーヒーカップ
お茶ですよ思わず呼んだ亡夫の名
何くその気力へ躾ついてこぬ
ステイホーム窓に雀が顔を見せ

予告

10月2日（土）に開催予定の第27回川柳塔まつりは新型コロナウイルス感染症拡大のため誌上大会に変更となりました。詳細は8月号に掲載致します。

川柳塔の川柳讃歌 ⑲⑦

上方芸能評論家　木津川　計

一年に6B2本使い切る

江島谷　勝　弘

朱夏編集長は「薄い鉛筆で書きなさんな」と同人を叱りつける。私も怒られまいとして4Bを5Bに変えた。専業作家は万年筆で原稿を書き、ホワイトも使わず修正するから原稿が汚い。私が若い頃から鉛筆書きだったのは汚いのが嫌で消しゴムで消し、綺麗に書き上げたかったからだ。その5Bを私も一年にほぼ2本使う。勝弘さんの原稿はスカーッとして綺麗な筈だ。しかも6Bだから濃いのだ。朱夏編集長の覚えはめでたい筈です。

ひらがなに感謝漢字がでてこない

田　中　ゆみ子

漢字を忘れるようになった。数年前、講演中、板書して書く漢字に詰まった。慌ててひらがなでその場をにごして「ひらがなに感謝」した。いささかは書きものをする日常、字引を手放せなくなったのも漢字を忘れたからだ。漢字には効用がある。「お礼」は略式だから「御礼」と書く。「御禮」は重々し過ぎて敬遠する。しかし「うつ」では軽過ぎるから「鬱」に納得するが「鬱という字を考えた人の鬱」に同情する。ゆみ子さん、漢字に親しもう。

連休が怖いもうすることがない

池　田　美　穂

現役は連休がうれしい。だが定年後はその連休が「怖い」。「することがない」のだ。私は連休どころでなく三六五連休である。恐怖におののき続けていないのは「すること」があるからだ。といっても「川柳塔讃歌」の他にいまは短文をいくつか。原稿用紙一枚に数日を費やすこともある。割の合わないことおびただしいと思わないのはよろこんで向き合っているからだ。美穂さん、好きなことがいろいろある筈です。それを楽しむことです。

くじ運が良くて町会長外れ

金　子　美千代

くじ運が良くて町会長になったのではなく、外れたのである。それほどなり手がないのだ。

わが家の裏の塀越しに大きな食品スーパーが進出するとあって隣組は驚愕した。住宅街が雑踏街になる、交通事故が多発する…。私の妻が反対の旗を振って進出反対の交渉を重ねたが敵もさる者、一歩もさがらず膠着したところへ出てきたのが町会長だった。たちまちのうちに両者を分け、納得させたのだからさすがだった。美千代さん、挑戦してみて下さい。

信号もなくコンビニに徒歩二キロ

奥　田　由　美

「鶯の自由自在に鳴く里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里」のような田舎ではいくら自然擁護派でも住むのをためらうだろう。ちょっと酒を飲もうと思って三里、味噌汁に豆腐をと買いに出て二里の先。私はとてもではない、住めない。右に書いた通り、真裏に食品スーパーができて、なんと便利になったことか。くるっと裏へ回れば酒も豆腐もだから有難い。由美さん、コンビニまで徒歩二キロは遠いが、運動と思えば丁度のコース、健康のためです。

級友のほとんど遠い星にいる

岸　本　宏　章

死亡適齢期がある。男は80から85までを享年とする。近年逝った有名人を振り返る。小沢昭一85、永六輔84、大橋巨泉83、愛川欣也82、蜷川幸雄81、藤本義一79、やはりここら辺りに塊まる。偉い人だけではない。私の級友も「ほとんど遠い星」になったり施設のご厄介になっている。「お前も早よ来い」と遠い星から呼ぶ。そうはいかん、「川柳塔讃歌」があるからと答える。宏章さん、頑張ろう。

西尾栞句集『水鶏笛（くいなぶえ）』

土肥温泉

明日乗る気船をみている宿の窓
香具山を指さす先を蝶が舞い
草の名でもめて吟行面白し
籐椅子のおく位置があり海が見え
団参の赤いリボンも春のもの
壺焼へ指さす島の春霞
城趾から指さす馬場の花吹雪
三階の宿の手欄に富士が晴れ
一匹の蝿と夜汽車の旅にあり
一、二、駅過ぎて落ちつく旅心
二人降り一人乗った雪の駅
バスツアーガイドは唄い客ねむり
大仏さん今日はズーズー辯で見上げられ
温泉や座り羅漢に寝る羅漢

新婚旅行にて

城崎の雪を相合傘で出る
溢れ出る温泉へ母　南無阿弥陀　南無阿弥陀
電灯の暗さ温泉効きそうな
湯の街のシンボルという橋一つ
山の湯の夜風をほめる窓をあけ

白骨温泉

上求菩堤下化衆生ここだ虫の声
介山碑の上音なしの秋の雲
白骨の湯の香湯の色夢うつつ
宿浴衣橋で会いバーで遇い
湯の宿の三階建は渓に沿い
孝行のしおさめという温泉（ゆ）につかり
湯の宿の廊下スリッパ二つずつ二つずつ
露天風呂一葉浮かべているぬるさ
湯の宿の湯番入墨して無口
一年をこつこつ貯めて温泉につかり

自選集

家を建てると妻には言っているらしい
雲梯の肉刺三歳が見せに来る
あねいもと負けず嫌いを良しとする
くらげ館ふわりと一日が過ぎた
欲張りにならねば長生きは出来ぬ

小島蘭幸

ご先祖と父母が居たから僕が居る
生きるだけ生きて津軽の土になる
大木に成れずに枯れている雑木
酒は好い五臓六腑が元気出す
おやすみと独り言して電気消す

福士慕情

豆をつまんでリハビリしています
付け加えるならばやっぱりありがとう
蝶々が居ない　一杯花が咲いたのに
毎日を繰りかえしてる無駄ばかり
令和の波もゆっくりと遠ざかる

松本文子

惑星の一つのコロナ騒動記
世界大戦ですヒト科対コロナ
正に怪物ヒトの弱点知るコロナ
巣ごもりに歓迎友の長電話
軟と硬合わせ一日テレビ漬け

三浦強一

最初から許すつもりで子を叱る
そう言えば地球も星の一つなり
先輩の肩書だけは覚えてる
泣かされて泣かしてからの無二の友
自慢した時から値打ち下げている

三宅保州

持病爆弾抱えコロナに耐えている
飲み会は自粛ランチに大ジョッキ
飲み干して終りにします午後八時
医療逼迫ついに始まるトリアージ
巣ごもりの中で発想広がらず

村上玄也

偽善とは断言出来ずリトマス紙
寸鉄はどこにマシュマロ柔らかい
日常化してゆく恐さ非日常
職責のため太らない五寸釘
針になり旗にもなって来た莚

森山盛桜

洗う

恥ずかしいものも洗ってくれている
乾いたものをたたむ洗濯まだできぬ
必要以上に小さくたたむのも自虐
そのたびに礼を言うなという家族
洗いたいのです　すべてをザブザブと

八木千代

還暦の子に母の日祝われる
つつましく歩く余生の細い道
七夕の短冊ポックリ死願う
転ばぬようにゆるりと坂を下りてゆく
コロナ恐るべしネオン街は暗し

山本希久子

ねんねこで弟背負い蜻蛉つり
ねんねこが箪笥に吊ってある亡母よ
玄米が一升壜で白米に
咲けば散ることを教えてくれた母
あなたが好きで命のはなしばかりする

板尾岳人

両岸で覗き合ってる深い河
墓を去る明日は萎れる花残し
鹿の目の中に逢いたい人が居た
赤い服着てる傷つきやすい人
晴れた日はツツジ曇りの日は躑躅

居谷真理子

母の骨カラカラと地に還る
両親へ元気ですかと墓参り
指切りのない約束が宙に舞う
不意の雨私に何か用ですか
腹開き背開きしてもまだこの世

川上大輪

丁度良い傾斜で凭れ合う夫婦
どんな日も明日の絵を書くのが夫婦
貧乏な頃の二級酒旨かった
贈る数頂く数とほぼ同じ
自分史がつい自慢史になりかかる

北野哲男

もう若くないわと花の香に嘘せる
うしろから肩を叩いて消えた影
ひらひらと去りゆく若き日の影よ
にやにやと向こうから来る老いの影
呼びかわす小鳥　わたしはここにいる

木本朱夏

マーケットうろうろしばしオフタイム
酪農のおかげ牛乳ヨーグルト
内臓の信号だろう背が痒い
マゴノテに痒み止め塗り背中掻く
基礎疾患は川柳熱中症

新家完司

7色じゃ描ききれない海の色
哲学といえばどうともなる歩幅
青春賛歌外れ馬券の紙吹雪
1日1句そんなノルマもこなせない
シニア万歳１１００円の映画館

高瀬霜石

自分だけ破るおきてを良しとする
偉人かも知れぬ悪人らしき人
古里の空気は匂いまで違う
コロナ禍の中にも巡る季に出会う
僕の過去何を言っても緑之助

竹治ちかし

海老根蘭ニョキニョキ過去が疼きだす
ワクチンに心の準備強いられる
昭和の日右も左も家ごもり
善意の輪谷間彩る鯉のぼり
偶然に満月愛でている自粛

津守柳伸

老いるとや自分に甘くなってゆく
だしぬけに図星を指されりるれろ
クラス会孫の自慢と嫁の愚痴
憎まれ役買って出るのも孫のため
ハッシュタグつけて気取ってみたつもり

西出楓楽

今日もいい空らしい見えないが
夕焼けが隣のビルに反射する
お誕生会馳走にケーキ眼を剥いた
食事制限おつゆに炊き込みごはん消えた
府知事がタレントよりも出るテレビ

都倉求芽

校則に手抜きがあると知っていた
手抜きありそんな品あり永田町
あの時の手抜きの味がポケットに
手抜きしたつもりはなくて共白髪
憲法に手抜きいや勉強不足です

仁部四郎

麻生路郎語録

ある寺の魚板に

無常迅速　時不待人

と書いてあるのを思い出した。菜根譚には

天地有万古　此身再不得

とある。私は三十年前に「一句を遺せ」と書いたが、もうその一句が出来たであろうか。

（「川柳雑誌」NO・319より）

句集の森

『同人句集川柳塔』

大坂形水

少年時代を憶う（一句）

谷町は丁稚車にきつい坂
空いている方の寿司屋を通り越す
句会からとんぼりを抜け三津寺町
北浜にくすぼったまま男老け
妙な色流行り玄人戸惑わせ
アルファがあることにして折れておく
この辺を歩きたいのに見送られ
秋　壁に蚊のしみ残ってる
会ってみたいひと居る駅へ下りてみる
これはこれは奥さんにスリッパ揃えられ
かに食いに来いと米子の得意先
回答に重みを持たす引き延ばし
大阪の穴場　博多で聞いてくる
退っぴきならぬ出番へ袴はく
京阪で顔見世行きと乗り合せ

（昭和四十九年七月七日　発行）

温故知新

田中正坊川柳句文集『ペンシル』から

起死回生　点滴の露キラキラと
その時にキラリ光った耳飾り
切符から静かに流れ出すボレロ
雨やんで一電車待つ迎え傘
どのペンにかえてもやっぱり僕の文字
ヒーローになった気で出る映画館
五万発の核抱いている平和
悪筆にまた泣かされる編集者
天皇の髭黒かった日の神話
清貧もよし良心に生きた過去
たっぷりと遊んだ孫のいい寝顔
自画像のバックはセピア色にする
一本の藁からサクセスストーリー
略奪のルーツたどれば桃太郎
戦没の仲間を祀る菊日和
夢のない年金で買うジャンボくじ

西出楓楽選

神戸市　青山　ひろし

生命線少し延ばしに接種場へ
流行らせてワクチン売るというお国
四捨五入思いは四の方にある
廃校の椅子に私の削りあと
亡妻の砥石カーブのままに研ぐ
言葉はしつなげば奴の本音かも

三田市　稲角　優子

母の日は街にやさしく風も吹く
よい目覚め今日は楽しみひとつある
笑顔には心をほぐす鍵がある
ワクチンの恵み恋人待つように
すりガラス少しずるいが生きやすい
震度六　春まだ遠く友想う

東大阪市　秀爷

ああコロナ野戦病院以下の都市
励ましのメールの来ない入院日
親友に賞味期限があったとは
ＬＩＮＥでは案件だけよ触れ合わず
ドンファンよ金で買えないものもある
ひきこもりぼくの時代がやってきた

寝屋川市　岡本　勲

夕立のような女房のお説教
マンネリの暮しささえる連れがいる
妻の愚痴伸びたウドンが聞いている
頼りないが味方はなってくれる妻
税金さえなけりゃ行けたのに家計
一つおぼえ二つ忘れていく老後

沖縄県　宮　すみれ

まったりとあきない庭の二十四時
寝そべって暇の理由を雲に問う
三度読みわからないまま本閉じる
ラッシュして今日もおいぬけ遅刻生
しゃべまくりでこぼこマスク金魚口
墓なでる孫合格に酒を注ぐ

鳥取県　本庄　汪

草を刈るいたちごっこに負けられぬ
迷っても迷わなくても今がある
ドロドロの真夏のチョコはごめんです
吠えなくてうちの番犬ほめられた
覚めないでやっと出会えた夢の中
火に油注いだ人は知らぬ顔

宮崎県　惠利菊江

雑草と格闘してる汗の顔
喘ぐ息草の力に負けている
草の上寝転ぶ顔が寛がす
軍手濡れ草のいのちを哀れがる
雑草に根性鍛えられる日々
刈り終えた草に充実してる顔

丹波篠山市　横溝安子

電話から逢いたいねえと友の声
湯につかり浮かんだよい句すぐ忘れ
通販で買ったブラウス着ないまま
密さけてテレビにおやつ太りぎみ
三密も二密もうつる新コロナ
まとめ買い期限切れてる食べいそぐ

名古屋市　冨田末男

しなやかを学んでみたくなる仕草
ユーモアを溜めてチャンスを待っている
幸せの後ろに持っている孤独
切り岸に立つと答に出る強さ
執念を持つと動きに活を入れ
新聞にヒント貰っている暮らし

鳥取市　上山一平

一円玉袋満たした助け合い
釣り銭で貯まって困る十円玉
百円で釣り銭貰う鯛焼屋
五百円硬貨小銭に隠れ出てこない
飲み代に二千円札丁度いい
窓口は一円不足でも徹夜

和歌山市　まつもと　もとこ

二回目のワクチン打ってホッとする
地球にも二回ワクチン打たないと
野良に名をつけて遊んだ猫じゃらし
人生の下五で悩むこと忘れ
人間の負けず嫌いが成す平和
ひょうひょうと踊る夕焼け赤トンボ

大阪市　阪井恵子

ああ暑いただそれだけの誕生日
お多福の生きる道笑うてなんぼ
何色に染まれば愛されるカラス
幸せと今は思える無駄話
真ん中がいいな写真も豚カツも
見えぬもの見えるだろうか万華鏡

鼻先に日本銀行券ベタリ
哀れみをくれと言われて消すテレビ
度を超えたプラス思考と言われても
友情の線香花火ぽつと落ち
立ち読みの列に覚悟のない背中

佐賀県　真島　久美子

開墾へ労した祖父に手を合わす
行き場なき心深夜のバイク音
栄転も左遷もあって現在地
主夫という辞令の下りる定年後
朗報も悲報も知っている電話

宮崎県　黒木　栄子

早すぎた花を遅れた霜が刺す
頂点につながる綱は放さない
接種終え白寿めざして再起動
みちのくの匂いの消えた上野駅
農業は俺で終わりと逝った父

白河市　鈴木　たけし

自粛中道路混雑人だらけ
リモートで大学2年過ぎ去って
コロナ禍で触れる自然に癒される
2回目のマスクが辛い夏が来る
食洗機私の代わりありがとう

東京都　髙岡　弥生

女坂越える本番待つ八十路
ギアチェンジスローで生きる宗旨替え
歳時記を追ってゆったり遊ぶ風
デジタルの食わず嫌いを改める
ケータイをスマホに替える一歩かな

横浜市　加藤　佳子

妻のアゴ思うがままに指図され
ずーと耐え生きて来ました夫の座
長かった主夫の座ずーとダンゴ虫
金婚式夫婦共々よっこらしょ
老夫婦忍一筋で生きていく

石川県　堀本　のりひろ

遅れずに来るバス恨む別れの日
謝罪した靴が石ける帰り道
夕焼けを使い果たした泥の靴
思春期のぶっきら棒が譲る席
善人の形でくぐる仁王門

岐阜県　喜多村　正儀

箸転ぶだけで笑った日の記憶
箸袋のメールアドレス女文字
渡されたバトン渡せぬままひとり
折り合いがつかず珈琲さめたまま
踏まれても雑草の意地花咲かす

大阪市　岡田　恵子

人の手をつなげば世界まるくなる
やんわりの風だ五月の散歩道
どん底で去来するもの何だろう
おやすみは明日を元気にする言葉
ワクチンで安心の世が戻るよう

大阪市　阪本秀子

鈍ってきた脳だ体当たりで進む
絵文字メール脳活動にもってこい
自粛中食欲だけは衰えず
老母のいる限り梅漬けいただける
糟糠の匂なつかし母の里

大阪市　柴本ばっは

一捻り錆びた脳では知恵が出ず
ストレスが少なからずの過食気味
老母からの途絶えた手紙胸騒ぎ
くちコミのパン屋に並ぶ客は密
身の丈を知りつつ孫に甘くなる

大阪市　中村民子

巣籠りでわが家の狭さひしひしと
わが部屋を不用なものが占拠する
ステイホーム部屋の汚れに気がついた
タワマンの風に煽られこけかけた
わが家には猫とテレビが待っている

大阪市　中村峰子

減らしたら余計に密になる電車
七歳も大爆笑をするドリフ
なぜだろう路上タバコは規制なし
家族から帰省するなと念押され
洗たくの少なさに見る親の老い

大阪市　降幡弘美

桜餅の次のたのしみ柏餅
阪神のダッシュ夏迄たのんます
米作り昔八十八の手間
思いつきすぐにメモする五七五
紙とペンいつも近くでスタンバイ

大阪市　松田聰

るんるんで苦労を知らぬ春の蝶
風に乗り白馬が駆ける桜花賞
冷笑ニヤリ 敵も然る者
コロナ禍に無名白衣が盾になる
あの聖地ビルマはどこへ行ったやら

大阪市　森廣子

不愉快なことは聞こえぬ老いの耳
二人の子育てた妻という大樹
年金も医療もしかと揺れるなよ
ハイキング熟睡させるいい薬
凭れあう約束破り逝った妻

池田市　上山堅坊

泉大津市　助川和美

つけもの石子が愛用の鉄アレイ
子に繋ぐつもりで建てた家なのに
うしろ手でびしゃりと閉めるふくれ面
ひやかしの客にも開く自動ドア
ヤレヤレはあの世に着いて吐く台詞

茨木市　細田マキコ

スターチス一輪挿してステイホーム
尻押され登る山道風青し
目がかすむ加齢か黄砂か考える
菜の花の蝶と化してや黄泉の国
負けないぞ真上に伸びる飛行雲

交野市　山野双葉

父の日も忘れないでと子にLINE
鞘剥けばずらり仲良く豆並び
会いたくて猫の真似して鳴いてみる
ネモフィラの青を吸い込み深呼吸
母であり子であり妻で女です

門真市　坂本星雨

巣籠りがいっそう辛い五月晴れ
あかんもんはあかんとまっ白なマスク
川柳のおかげ自粛に花が咲く
近詠に会えない友を思い遣る
今だけを見つめる野良猫の瞳

高槻市　鳥居宏

コロナ知らぬ山は静かに緑満つ
帽子にマスクしばし見合ってやあと言う
小3の孫と言い合う妻若い
国産のワクチンのない痛恨事
医療逼迫五輪ほんまにやれるかな

豊中市　齋藤奈津子

豹柄が三人寄れば姦しい
健診前体のメンテ手が掛かる
休刊日朝刊待って待ちぼうけ
地方紙に巻いた大根お裾分け
ウーバーで手軽に済ます晩ごはん

羽曳野市　黒木ひとみ

薫風受け川面に映る鯉のぼり
満開のつつじに酔わす花の寺
石垣のすき間に根付くすみれ草
春雷が響き窓打つ宵の雨
紫陽花の小さな花も夢で映え

寝屋川市　川本信子

輪が好きで喋る相手に事欠かず
八十歳「しもた」と悄気る日が続く
愚図る腰に呪文をかけるドッコイショ
自粛中嬉しい知らせ初曾孫
来年の今頃きっと笑ってる

一歩退くだけで周りがなごやかに
アナログのセンスなら若者に負けぬ
腹われば さっぱりして毒舌家
サングラス外した方がこわい顔
本心を突いたみたいだムキになる

大阪府　奥野　健一郎

ころころとコロナは変える攻撃法
体調と相談しながら生きてゆく
加齢苦は未経験です若い医師
兼題に心動かぬもどかしさ
ヤボ用があればあったで煩わし

神戸市　石川　克美

手の荒れに消毒液の効果みる
テレワーク気を遣います風鈴も
今日の予定無理やり探す日が続く
変わりないか姉にも長い文を書く
しつけ糸解き跳んでゆく子を祝う

神戸市　米田　利惠子

接種する自己の為より人のため
おしゃべりの妻に辛かろ黙食は
過疎の里群れてみたいが人不足
春うらら句作りせずに舟をこぐ
弓取りに声がかからぬ国技館

神戸市　近藤　勝正

落とし穴作ったボクが落ちる羽目
矢面に立てば周りは皆そっぽ
舞い上がる天狗にはない着地点
全没は運と選者のせいにする
峰打ちだ殺してならぬ好敵手

明石市　瀬島　流れ星

介護など要らんと卒寿背伸びする
JAの地産地消へ買って出る
すっぴんに産毛眉毛がよく伸びる
人目を引くプリンセス・ミチコ名乗る薔薇
何じゃもんじゃが武者震いする雨上がり

尼崎市　清水　久美子

思いっきりマスクを取って呵々大笑
珊瑚礁魚も優雅にお洒落して
美容室月に一度の至福時
足腰は弱ってきたが口達者
老いて尚キッチン仕事は休みなし

三田市　住吉　美和子

だんまりでグイグイ妻が攻めてくる
ほとぼりを冷ますためにはプチ家出
年齢を見て勝利感計報欄
若者よスマン年金ちゃんと出る
ワクチンをよこせと靡くむしろ旗

宝塚市　岸田　万彩

宝塚市　太田　としお

コロナでも朝は静かにやってくる
子や孫にバトンタッチをする歳に
目覚めたら老後の資金気にかかる
あの世ってよっぽど広いとこらしい
老い進み感謝感謝が口に出る

丹波篠山市　藤井　美智子

句作りへ今日の思いを打ち明ける
利子がつく佳き日暮らした昭和人
うっかりも息ぬきの内許し乞う
ひとり居の悩みを自問自答する
もう歳は棚に八十路を謳歌する

豊中市　貝塚　正子

自撮りして夜中一人で肝だめし
人間の都合でオムツの犬散歩
二人なら残りの坂も頑張れる
マスク見て誰も風邪とは思わない
長い自粛自分磨いてピッカピカ

和歌山市　北原　昭枝

青葉風酸っぱい思いあるレモン
耳もとの甘いささやき夢現
引き出しの奥で眠っている手紙
懸命に生きて精だす蝸牛
凡人の暮し明日の米を研ぐ

和歌山市　佐藤　まき

薫風の愛鳥週間うらうらら
大都会の人工干潟ビルの屋根
鳥達の渡り迎えるビオトープ
生存の厳しさ時に空中戦
我儘は止めてワクチン予約する

和歌山市　西川　千鶴

涙腺の緩み花粉の所為にする
満たされぬ欲がとぐろを巻いている
リスペクトされて益益伸びる鼻
月光が足許照らす通夜帰り
普通人何が基準となってるの

和歌山市　福島　一雄

年金とカラオケあれば生きられる
仲間とは会えばいつでも縄暖簾
楽しみな父の日またもやって来る
この頃は鏡見るのが恐くなる
戦争を丸く治める核抑止

岩出市　村中　悦男

お互いに卒寿すぎての思いやり
婚活の孫の二人は留守ばかり
社説もしかと熟読をする自粛中
もういいかい芽を出す前に根に尋ね
いずこも同じ中止理由にするコロナ

土埃り舞い上がらせて通り雨
スマホする指の速さに見惚れてる
温度差に過敏のくしゃみ五六回
痛むとこ庇い肩まで凝ってくる
ウォーキング杖に助っ人してもらう

倉吉市　大羽雄大

来し方を語り尽くせぬ我がドラマ
笑い上戸みんなの中で花になる
買いもせぬ店先の服値踏みする
山の緑今朝は霞んで黄砂降る
きりぎりすの葬列蟻が取り仕切る

倉吉市　宮田風露

コロナ禍で黙って食べる食事会
絵手紙の筆で咲かせる四季の花
八十路坂越えた先には亡夫待つ
道の駅土の匂いのする野菜
家族にも言えぬ秘密が二つ三つ

倉吉市　若松由紀子

ありがとう九十五まで生きてきた
ありがとう五臓六腑はまだ無傷
ありがとう安心できる預金残
ありがとう孫が家業継いでくれ
ありがとう嫁から届くお惣菜

鳥取県　田中重忠

いつの日も自分を責める癖がある
日常のマスク暮しが耐えがたい
約束の時間に捜すマスク顔
行きたいに東京五輪コロナ攻め
プライドをなくしてからは下り坂

鳥取県　橋谷静江

傘寿過ぎ寝てばかりいる万歩計
銀行が本音を出した手数料
肝臓をアッと言わせる休肝日
家出用に大風呂敷を取っておく
酒二合ついつい秘密喋り出す

松江市　中筋弘充

野も山も丸みをおびて柔らかい
ワクチンで希望の光見えてほし
母の日に届いた椅子の心地良さ
お返しは赤飯炊いてありがとう
病む友に筆のすすまぬ便り書く

松江市　山根邦代

からからと苦労知らずの風ぐるま
最果ての街でひろった人情味
見つめれば山がだんだん近くなる
こころ弾む日グラデーションの山笑う
視点を変えると風の動きが見えてくる

山口市　中前幸子

瀬戸内市　宮宅比佐恵

プラゴミの中を泳いだ秋刀魚買う
コロナ禍も花それぞれに春告げる
ボウボウと草が守りする空家ふえ
令和の児マスクはずせば泣きじゃくる
現実とは転んだ石にまた転ぶ

尾道市　小川道子

小窓から夢が広がる大宇宙
大袈裟な話半分聞いておく
にんげんの犯した罪の深さ問う
悲喜劇の中で奏でるセレナーデ
生い茂る草の根性伊達じゃない

尾道市　小畑宣之

人も花も色々ありてこそ楽し
水の地球汚さぬように無駄をせず
ミステリー好きの始まり「点と線」
命懸け鳥も魚も子を守る
校歌にも小節が入る演歌好き

尾道市　村上和子

さざ波を立て七十路の恋ごころ
朗らかでお喋り好きで淋しがり
揺れる心を大きな愛で包み込む
鉛筆で綴るこころの色模様
優しい嘘を置いてゆく見舞客

府中市　岸田武

歳ですから少し遅れて衣替え
こみ入った話にマスク邪魔になる
怒り心頭笑いのテレビでも見よう
突然のことでお辞儀ばかりする
夕立へ妻と一つの日傘さす

山口市　兼崎徳子

前髪を分けるしぐさに恋をする
夜明け前入院中の母想う
息継ぎを見せずに泳ぐ出世魚
齢重ね見えない事が解りだす
ローン終え我が家に春がやって来た

松山市　郷田みや

母の日に届くピンクの包装紙
歩いても走ってもまだ続く道
天辺でシナリオ変えた観覧車
迷路から抜け出したくて草を引く
手の温み忘れそうですオンライン

大洲市　花岡順子

輪の中で光っていたい頑張り屋
傷跡が苦いビールを呑んでいる
二人きり手を絡ませて歩く道
カラフルなマスクで若くなる齢
新型のコロナ前触れなく大挙

福岡県　本田　さくら

階段のぼりやっと八十路にもう一歩
太陽と何を語るかほとけのざ
もしも魚に声がでたなら何とする
「アンパンマンが好き」とやさしい子になあれ

唐津市　前田　廣幸

悩んでも嬉し過ぎても眠れない
人生百年成人式がもう一度
額縁に入れると只の絵が喋る
世界中ネットで網羅かごの鳥

沖縄県　禱　モモト

隣席に隙間風吹く淋しさよ
ポイントはネイルとマスクファッションに
自粛して大志を抱く子供の日
青空に夢乗せ泳ぐ鯉幟

黒石市　石澤　はる子

腹の虫今日は定位置定まらぬ
アンテナの感度良好風の噂
都合のいいことだけを記憶する
弁解はしないと決めた脛の傷

黒石市　北山　まみどり

満開の歓声だけは届けたい
負けん気が強いね八重の鮮やかさ
だまされてみようか枝垂桜なら
何をどう話そう葉桜の下で

青森県　月波　与生

スケジュールは白有給消化中
マスクした顔ならぶ母の日の絵は
ごじゅうきゅうさい遠足前夜の味
さみしい人に肩たたき券届く

富士見市　中島　通則

君が代の節を回してうがいする
風評は希釈出来ない汚染水
春は駆け足モクレンサクラハナミズキ
店先にマスクが積んである安堵

横浜市　巌田　かず枝

口すべり後の祭りのエトセトラ
祖父祖母も大好きだった大相撲
元気でね前頭葉よ寿命まで
カレンダー皆の記念日書いておく

静岡市　渡辺　芳子

忘れっぽい笑うしかない年を生き
シャクヤクの花を頂く幸せを
朝日浴びやさしい風にゆれる花
花と生き一人ではない幸せを

浜松市　中田　尚

書く方が早いメールに指ふるえ
スマホ持ちトリセツが厚すぎる
回わすだけでつながる電話良かったな
ロボットが明日の天気をしゃべり出す

もう少し夕日を背負い畑仕事
頼られる存在感が宝物
喉元で内緒話がもがいてる
核心に触れずに先を思いやる

江南市　脇田雅美

メダカ見て遊ばないかと雨ガエル
好奇心カメラ片手に散歩道
うつ向いた花秘めている美しさ
好きなもの夫は魚妻は肉

豊橋市　小松くみ子

ふだん着になって私を取り戻す
帰郷するたび増えている墓じまい
高齢の詐欺被害者の胸の内
孫が来て笑えるだけで感謝の日

豊橋市　西郷紀美代

イカロスのように飛び立つこの余生
この余生好きな川柳詠んでいく
人妻を好きになるからややこしい
生まれて良かったと言える日本に

伊勢市　奥田悦生

立ち話座ると時間無制限
亡き友の声が聞こえてへんろ旅
あっかんべマスクの中で舌を出す
思いやりとお節介が同居する

八幡市　武田悦寛

五万石出石のそばの腰の良さ
太閤園売りに出されて泣いている
ワクチンで存在感の無い日本
春叙勲やっと明るいニュース出る

京都府　北野クニオ

半額の弁当ふたつ喰う息子
返杯のワンカップ買い墓参り
窓開けて金魚のように空気吸う
燕の子監視カメラに守られる

大阪市　東敏郎

引き算は七が嫌いになっていく
心配はみんなですればこわくない
一人旅行きたい方へ風が押す
人間とトーンが違う神の声

大阪市　今村和男

捨て猫が私のぼやきうなずいた
神様はきっと昼寝に入ってる
ボリュームをしぼってひとり夜のジャズ
雨の音ひとりぼっちも慣れてきた

大阪市　大沢のり子

マスクして初めましてと言われても
怠った医療の結果おろおろし
ワクチンは嫌だがしないのも恐い
家で飲むビールの泡の泣き笑い

大阪市　尾崎文子

最近は皿洗う夫家ごもり
寂しさの意味を味わう午前四時
ふと窓に映る姿に背を伸ばし
うたた寝の少女のうなじ風薫る

大阪市　近藤風羅

ハレルヤ響く青年の声駅ピアノ
やっとこさバブル時の服処分した
笑顔でいれば目の下たるみ少し消え
自粛でも歯科耳鼻科はずせない

大阪市　宮本千恵子

消毒で老いた手の平かさかさに
艶やかな若葉終日見ていたい
批判する口調は母とよく似てる
父の忌にかつての苦労偲んでる

大阪市　樋口眞

健康サプリ種類が増えて胃が悲鳴
怪獣にもオスメスがありほほえまし
記憶にない賢い官吏下手な嘘
たまには買うか夢でもみよう宝くじ

池田市　倉本一弥

巣籠りの心の隙間菓子で埋め
足裏の魚の目までも亡母親似
六十九まだまだ若手老人会
直球で受けた言葉に深い傷

泉佐野市　樫葉良子

日本中何処に住んでも大阪弁
それも良し買いかぶられてそのまんま
喋ること何にも無いが一つ屋根
孫が来て無口な夫が良くしゃべる

河内長野市　穂口正子

言うたやろぬくい言葉に気いつけや
酒とおしゃべり不老長寿の薬なり
その一言魔が差したとは言わせない
涼しい顔我関せずと遠い耳

堺市　楠井輝子

テレビからなつメロ流れホッとする
コロナ種もあれこれ増えてなお厳し
ボケたとは自覚はないが家族言う
球の数少なく打って二億円

堺市　古川光雄

スポーツの後の痛みに歳覚え
梅雨明けは世も晴れ行けと期待して
窓開けて背筋伸ばして深呼吸
紫の花の鉢植え母好み

吹田市　岩口のぞみ

お天気が嘘をつかなくなりました
巣ごもりの我慢比べに飽きが来る
自粛無視暢気とエゴが顔利かす
宇宙からご帰還コロナ居ましたか

吹田市　西沢司郎

高槻市　三谷白黒

アベマスク全く見なくなりました
機械文字冷たく見える便りです
我慢しろコロナ対策これだけだ
嫁さんが観音様に見えだした

豊中市　荒木郁子

早朝のコロナ忘れるウォーキング
友と歩く健康維持にお喋りも
巣ごもりは暗いイメージ押しつける
髪と爪コロナにめげず成長を

豊中市　松田蟻日路

何やら遺産ボクらの場所にヒト寄せる
熱が出た予約電話をかけ疲れ
女医さんに袈裟斬りされた背のおでき
人類は可笑しからずや主義正義

寝屋川市　坂本ミヨノ

料理酒五臓六腑が痛みだす
恋猫が我が家の猫を呼び困る
絵手紙の返信困り川柳を
そら豆を酒あて夫と笑顔飲み

寝屋川市　廣田和織

日の目見ぬ夢に雑草生い茂る
じゃんけんぽん勝った方から先に逝く
紺碧の空が寂しい独りの日
夜遊びの好きな男と春の猫

八尾市　田邊浩三

凶悪犯コロナのおかげマスクする
酒呑むな愚痴はこぼすな歳はとれ
髭ぐらい自分で剃れとコロナ言う
鯉のぼり密は守るがマスクせず

大阪府　大浦福子

コロナ禍に青息吐息わが地球
もうひと息ワクチン注射目の前に
深呼吸若葉の海で青染まる
ため息に別れの近さ知りました

大阪府　高木道子

コロナの目躱し木の芽は拳突く
老夫婦のマスク越しなる頓珍漢
こぴりつくまだ勿体ないを袖にする
喧しいテレビの口は同じ顔

神戸市　青木公輔

鉛筆を握るそれなりの覚悟
踏み込まぬ一本の線恋の味
#がひとつ多いレモンの香
目に涙一杯溜めて探し物

神戸市　輿水弘

気まま八十路やっぱりお金支えてる
元気確認立ったらみんな杖頼り
強面になってみたいな羊顔
悪友も逝けばいい奴言うてます

ドック入り数値まあまあホッとする　神戸市　櫻井崇史

青サギが跳ねる小魚キャッチする
ああ残念昭和のニオイ店じまい
無観客テレビの前で大騒ぎ　神戸市　田本古鈴

一瞬の泡沫だった初恋よ
好きですと言えば良かったあの頃に
どこからもお呼びかからぬ皆自粛
七回忌百合の香りとああ亡母よ　芦屋市　新阜義明

ええ話赤信号に決めている
日々同じ床に就くよう逝けたらな
マイレージ新幹線に何故つかぬ
出せる物全て出し切るオレの朝　尼崎市　宗和夫

コロナ禍に路上暮らしの人もあり
夫婦して我慢くらべの巣ごもりに
コロナでしょ仕方ないでしょ濡れ落葉
ウォーキング浮かんだ名句汗に溶け　伊丹市　延寿庵野鶴

身構えてごめんといって蚊を叩き
ルリ色の地球にいらぬ汚染水
三円を貯金してますエコバッグ
折れそうな胸に染み込む歎異抄

細やかな満足感に苺パフェ
転んでも小石ひとつは掴んでる
天の声地の声聞いて花は咲く
軸足を変えてしっかり明日を見る　伊丹市　岡村風琴

失敗を気にせず次の夢を追う
連休で時間余るが金足らん
諦めと未練が混ざる本音どこ
何事も句にする癖で文字数え　伊丹市　平井富夫

白寿まで生きる未来の絵が書けぬ
ころころと吹く向き変える妻の風
孫が泣くマスク外したババの顔
おしゃべりがあって美味しくなるランチ　小野市　田中辰夫

晩ごはんネット予約で決める朝
友の愚痴暇な私の耳を貸す
おはようとデイに行く母弾む声
込み入った話し盛ってる開かずの間　三田市　生田えい子

広告紙本紙読むより時間取る
ベランダで満月真上春の月
押し花の手漉きのハガキ春込めて
彼岸だんご婆の味にはほど遠い　三田市　幸田厚子

朝食後今日の予定をテレビ欄
待機中エンゲル係数アップ気味
体調は天候不順に惑わされ
雰囲気の良い喫茶店長居して

三田市　辻　開子

目障りな雑草だけど花可憐
死ぬ程の幸せならば死にません
夢で会う夫の笑顔に声がない
どの雲を口に入れよか歯科の窓

三田市　中山昭美

わけあって家のこときいてもらって嘲笑っても
大切な跡つぎ男と可愛がり
一も二もなく頼れない唯のボンボン
役員会農業会すべて解らぬボン

三田市　東内美智子

潔く風にまかせる花筏
満月に亡夫の星を問うてみる
検査するいやな予感が的中す
ワクチンに期待を寄せる米寿です

三田市　馬場貴美江

子ら夫婦仲良きことが親孝行
幼子とビデオ通話で食事会
重たくて小銭ばかりの貯金箱
朝刊バイクご苦労さまと朝三時

三田市　森　玲子

鯉のぼり百均竿でも風に乗り
おくどさんコトコトパッパのひと昔
赤信号急ぐ時だけよく目立ち
上機嫌心も身体もパラダイス

丹波篠山市　澤　良子

輪になって話楽しむ人を見る
夏来たら文化祭には歌えるの
合唱に合わせるピアノいつ聞ける
積んで来た戻れぬ我が日風になる

西宮市　高瀬照枝

ゴミ出しを忘れてしまう休み明け
折角の子供の日には雨が降り
子が巣立ち五月人形出し忘れ
カーテンの隙間から陽に起こされる

西宮市　高橋千賀子

筍も蕗も好物忙しい
薔薇咲いた心にぽっと灯が点る
新緑の森はやさしく柔らかい
焦るまい収束信じ前を向く

三木市　山口ヨシヱ

万歩計ステイホームで役立たず
配る程幸せ持って暮らしたい
飲んだ後茶漬でしめるここちよさ
独り言亡夫だけに愚痴こぼす

兵庫県　藤原みよし

心がけひとつ人生紙一重
巣ごもりで三歳ぐらい老けた顔
おばちゃんは「聞いた話」で盛り上がる
ウイルスが津波のように打ち寄せる

奈良市　東　定生

ああ言えばこう言う人と長話
ワクチンの予約もとれぬこれ日本
よもぎ見て作りたくなる草餅よ
雨の日は私も猫もねむくなり

奈良市　尾畑なを江

昭和演歌知ってる歌はみんな好い
ベタベタと切り抜き貼って偶に読む
家事手伝い気持はあるが傍観者
コロナワクチンやっと予約落着いた

奈良市　仲西賛郎

後ろからせっついてくる電子音
ビッグバン宇宙の果ての始発駅
大地尽き大海原へ舟を出す
近未来沖の彼方をノアの舟

生駒市　饗庭風鈴

コロナ禍が西高東低冬型に
お付き合いこんなに長い新コロナ
緑着て気分一新緑の日
手も足も出さず過した五連休

生駒市　児玉規雄

偏屈も個性的だと言う世相
我が子より手塩にかけて菊花展
偏向と左右が騒ぐＮＨＫ
日々散歩免疫アップ自己防御

奈良県　室田行久

咀嚼して頑張っている腹八分
好きな人挨拶もなく逝ったきり
これからをどう生きようか八十五
日の短か動きが鈍くなったのか

和歌山市　倉橋悦子

ネモフィラの見事な青も無観客
いい調子目指せてっぺんタイガース
コロナ禍をめげず一輪ボタン咲く
外は雨本の世界へおじゃまする

和歌山市　鍋嶋澄子

山蕗の薫りで春をひとりじめ
マスク付け目で語る日日口侘し
自立した息子へ父の背が丸い
天命と悔いは残さず花散らす

和歌山市　三枝眞智子

今日は特別いつものコーヒ美味しい日
「味の素」もう長いこと使ってない
祖母の世を思えば今の仕合せ度
用心しているのにいつもかぶるドロ

和歌山県　森下よりこ

鳥取市　吾郷天遊

サックスの音色哀しみ深くする
身を守るバラの刺にも一理ある
平和ボケデモも労働歌も消えた
幸せは山のかなたでなく手前

鳥取市　大前安子

れんげ田で編む首飾り友と笑む
ことばって軽くて重く酒の味
帰る場所あって帰れぬ子の安否
春歩く夏の力へ向かうため

鳥取市　山野すみれ

高齢者のくくりですか六十五
週刊誌濁る話を載せたがり
家以外誰とも会話無く過ごす
山菜採り一人のんびり山歩き

倉吉市　伊藤嘉昭

天の川亡母への手紙届くかな
マスク顔どの娘も美女に見える今
縄のれんコロナの陰を見て通る
戦争は一部コロナは全世界

倉吉市　堀かずこ

ひろしまの赤い行列球場へ
いちご狩り何個食べたかへたの山
列車旅遠くに見える景色飛ぶ
外は雨心もぬれる寂しいよ

境港市　中井虎尾

皇室家暴走愛にゆれにゆれ
メモはなしないしょナイショがなぜばれた
コソコソの聖火リレーにゃ意味がなし
マスクして鯉をながめりゃ口アケル

境港市　藤原久直

身の丈に合った幸せ噛み締める
提灯を書斎に吊し一人酒
うーん旨い妻のカレーは星二つ
楽な道歩き過ぎたかよくこける

米子市　川本美津子

おしどりに聞いてみたいな夫婦仲
喜寿の年春と一緒にやって来た
たんぽぽも庭の賑わい色添える
思い出は断捨離出来ぬ胸の中

鳥取県　下田茂登子

中卒と言うレッテル張って生きて来た
天国に川柳教室ありますか
離婚という悲しい道を知っている
毎日がコロナ話題で日が暮れる

松江市　相見柳歩

よろこびの波紋をもらいバトンパス
実線になるまで旅を続けます
叶っても謙虚な方はそのままで
祈るほど感謝の量が増してくる

出雲市　黒目　ひでお

左脳癒え見える景色が変わり出す
守りたい読書を重ね明日の幸
脱炭素世界平和の足がかり
連休もテレビに読書余念ない

雲南市　永見　安子

一雨をもらって大樹生き生きと
陽だまりにそっと咲いてる芝桜
暗い世に感謝しつつもぐちが出て
ふたたびの趣味に元気をとりもどし

安来市　原　徳利

昭和の歌で回顧する昭和の日
風流な春雨降らぬ温暖化
本流を外れ支流でする政治
敗戦を忘れ憲法変えたがる

津山市　高橋　由紀女

雑念を省きさっぱりした五感
わたくしは私のままで振り向かぬ
湧水の様に出て来ぬ５７５
マスクして口の体操やってみる

広島市　田桑　恵子

うぐいすが誘う新緑山歩き
額にピッいつまで続くこの関所
散歩道人見かけたらすぐマスク
正念場霞がかかる五輪の灯

広島市　常國　喜好

またひとつ嘘を重ねて生きている
ありったけ咲いてはかない鉢の中
ＡＩに望む心のこまやかさ
忖度にすがって顔がくもり出す

広島市　松尾　信彦

座右の銘小さく縮む余命表
日々学ぶことあるごとに豆知識
新聞が脳の萎縮の耕運機
たわいないジョークを挟む潤滑油

竹原市　土井　輝恵

皆老い墓は末っ子だけ詣る
ホッホッホ目が笑ってる盗み酒
毒舌が盛り上げている視聴率
二周り自粛の中の母の日よ

阿南市　小畑　定弘

もう少し待てとあの世の妻に言う
まだボクにこんなにえぐい灰汁が出る
済まないが息子に託す負の遺産
この人の優しさだろう軽い嘘

松山市　大内　せつ子

右利きだから僕はあなたの左側
今日の見栄ひとつ夜空へ返します
ハンカチを四つ折りにしてから勝負
湿ると嘘はつけないのってサンカヨウ

英語 de Senryu⑮

麻生路郎句集 『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

不平も云わぬ妻だ長生きするならん

my wife
never complains
she'll live a long life

振り向けば　やつぱりついて来る妻よ

I turn around
and know it!
my wife is following me

---

never 決して～ない　*complain* 不平を言う　*live* 生きる　*a long life* 長寿
turn around 振り返る　*know* 判る　*follow* ついて来る

～リバーウィローのため息～世界の詩歌㊺ 万延元年世界周航俳句：加藤素毛

日本英学史学会の地域研究の一環として、飛騨国益田郡金山町出身の加藤素毛の海外俳句に出会いました。（拙著『日本初の外遊俳句作者―加藤素毛の見た亜米利加と周海』関西英学史研究第2号2006, *Kato Somo, the first Japanese haikuist who visited the United States in 1860: IASA 2007 World Congress University of Lisbon*）。加藤素毛 (1825 ～ 1879) は万延元年遣米使節団の賄い方として使節団に加わりました。一行はアメリカの軍艦ポーハタン号でハワイ、サンフランシスコ、パナマ地峡を蒸気機関車で渡り、軍艦ロアノーク号に乗り換え、ワシントンに到着。日米修好通商条約批准書の交換を行い、帰路は南アフリカの喜望峰を廻り、インド洋、ジャワ、香港を経て品川に帰着の9か月の長旅でした。彼は周航中や各地の異国の風物を俳句で詠みました。アメリカの宴会の食べ物メニューや、当時の合衆国の国旗や大統領の写真など多くの異国土産を持ち帰るほど好奇心旺盛な人物でした。（拙著『アメリカで味わった初めての西洋料理』東日本英学史研究第8号2009）最近、出身地の下呂市が素毛の旅を題材にユニークな漫画本『幕末に世界一周やってみた』（下呂市 *2021www.city.gero.lg.jp 0576-32-2201*）を出しました。

異国の世見に翌日乃首途可那　*To enlarge my experience/I sail for a foreign country/tomorrow morning*　裂る程車の音も暑サ哉　*Hot steam/the bursting sound of locomotive/like thunder*　月ならて風船高し夕間暮　*Not the moon/a hot-air balloon rising up/at twilight*　訪ふ友に異国はなしや冬ごも里　*Friends visit/I enjoy talking about my travels/my winter days*

127 お酒いろいろ（5）

これまでに「日本酒」「ビール」「焼酎」そして「ワイン」を取り上げてきました。予定ではその4つだけでしたが、まだシャンパンや梅酒やウィスキーなどを詠った句が残っていましたので、今回は少しずつですがそれぞれを追加して、あとは飲兵衛の好きな「縄のれん」と「居酒屋」を取り上げてこの項を終えたいと思います。

シャンパンはシャワーの味に星の味　星井ごろう
シャンパンの似合う老後を目指します　藤田　武人
梅酒なら飲めますどうぞお誘いを　笠嶋　惠美
自家製の旨い梅酒で二日酔い　小松くみ子
ストレートで飲もう高価なウイスキー　上山　堅坊
本性を暴く魔法のウイスキー　冨樫　正義
バーボンのダブルで酔えぬ全没日　山端なつみ
テキーラで薄める黄昏のビギン　藤井　寿代

ちょっとお洒落なパーティーなどで「ポン！」と景気の良い音で開けられるシャンパン。焼酎より上品な感じがするのは使用するグラスの形も影響しているのでしょう。

梅酒は手軽に作れて美味しいのですが、原料は25度以上の焼酎ですので飲み過ぎると悪酔いするのは他の酒と同じです。

酒類の中でもアルコール度が高いのがウイスキーで日本以外では40度以下はウイスキーと呼べないようです。またテキーラは竜舌蘭を原料とする蒸留酒で40度前後です。

鰯雲誘う早目の縄のれん　永田　紀惠
アフターファイブ亀裂を埋める縄のれん　片岡　加代
夏に負け冬にも負けて縄のれん　菊池　良雄
話題求めアンテナ立てて縄のれん　脇田　雅美
固い殻割って私も縄のれん　若本　安代
人間が好きだから行く縄のれん　中筋　弘充
今宵また胃も踊りだす縄のれん　楠井　輝子

飲兵衛が会社帰りにちょっと立ち寄るのが縄のれんを下げた居酒屋。椅子席でゆっくりできる店もありますが立ち飲み屋もあります。ゆっくりできる店では仲間との語らいが楽しく様々な情報を得ることもできます。立ち飲み屋は軽く飲みたいときにピッタリで一人でフラリと入っても平気。立ち飲みで知り合って飲み仲間になることもあるでしょう。

居酒屋にごろごろといる哲学者　川上　大輪
居酒屋に仕事の憂さが吹き溜まる　松浦　英夫
居酒屋のほかには吠える場所がない　三宅　保州
居酒屋で酒の肴にする総理　永田ふき子
居酒屋でマスクを外す肝試し　坂本　蜂朗
居酒屋も間仕切りされた籠の鳥　多田　雅尚
居酒屋のメザシが臭う停留所　中山　春代

居酒屋では難しい話は止めて「愉快に談笑」がベストなのですが、中には哲学者のように考え込んでいる人がいます。また、上司や総理の棚卸しも居酒屋でしかできませんので、ここぞとばかりに日頃の憂さを晴らしている人もいます。

しかし、コロナ禍の昨今、「居酒屋でマスクを外してちょいと一杯」にはかなりの勇気が要りそうです。

誹風柳多留一三篇研究 11

小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男・高野範雄
山田昭夫
清　博美

83　**釣道具おろして桑の木へのぼり**

小栗　謡曲『羽衣』の句。ワキの「白竜と申す漁夫」が三保の松原で松の木にかかった美しい衣を発見する。謡曲では「いかさま取りて帰り古き人にも見せ、家の宝となさばやと存じ候」とあっさりと手にするのだが、そこは川柳で、白竜さんは手にした釣り道具を浜辺に置いて、松の木へよじ登るのである。

はくりやうハ駿河細工のびくをもち　　笈四6

清　賛。

84　**天がい屋笑ッた人につきあハず**

小栗　天蓋屋は、仏具の天蓋を製造・販売する家。また、その人。多く、葬儀に用いる上輿や道具類を製造または賃貸しする輿屋を兼ねる（『日』）。

天蓋屋の語釈は前述の如くであるが、川柳では、亡くなった娘さんの振袖を天蓋に作る業としてお馴染みで、仕事上付き合うのは悲しみに泣いている人ばかり、笑う人には付き合わないというのである。

笑てハちそうにならぬてんかいや　　天五梅1

清　賛。

85　**身ン代イかなをるると嫁が目立なり**

小栗　持参嫁を詠んだ類句多数の一。持参金目当てに醜女を嫁にもらい、お陰で身代（財産の状態）は立ち直ったが、さてそうなってみると、嫁の不器量が目立つという案配。

身ン上ハたて直ッたがけちなよめ　一二2

清　賛。

86　**男にもふり袖を着た御てうあい**

小栗　不明句。

まず言葉の続き具合がわからない。「男であるけれども振袖を着た人を御寵愛になる」という意なのか。とすると男色の感じがするが、「御寵愛」の語は天皇・貴族・大名など身分の高い人に使われることを勘案すると、高級女中の陰間遊びの句であろうか。あるいは大名とお小姓の男色（例えば織田信長と森蘭丸）も連想されるが、小姓といえども武士だから振袖を着ていたわけでもなかろう。ご教授よろしく。

男のふり袖もよせぬ御大イひやう　一九8

伊吹　大名とお小姓の男色一般句に賛。

山田　芳町の陰間は女形で振袖を着ますから「高級女中の陰間遊びの句」でしょう。

御てんもの女のやうなものをかひ　　安八礼11

清　小生も芳町説。

87　**こわめしとだんごをふかすにきやかさ**

小栗　深川八幡宮の祭礼が八月十五日なので、氏子はお祭り用の強飯と月見用の団子と両方蒸かすという句のようである。『東都歳事記』八月十五日の項を見るとあちこちの八幡宮でお祭りがあるようだが、江戸で八幡宮と言えば無論深川八幡宮（富賀岡八幡宮）で、主題句も深川としていいだろう。

こわめしの跡トてたんごをふかすなり　安六宮3

清　賛。

88　**とうれいと黒ン坊の出る十三日**

小栗　どうれいは、どうれ。訪問者が案内を請うた時、家人がそれに答えることば（「日」）。

十二月十三日煤掃きの句。訪問者が来ると煤で真っ黒になった顔で応対に出る。

取次に出る陣の無ィす、はらひ　初4

清　賛。

89　**入リ王に成ルとさかなや助言ンする**

小栗　入王は、将棋で王将が敵地の三段目に入り込むこと。またその王将。入王なれば攻めにくく勝負が長びく（「江」）。

入王になると勝負が長引くので、早く魚を売って帰りたい肴屋が傍で助言をして勝負の決着を早める光景と読めないこともないのだが、鮮度を重視する肴屋が将棋の見物をしているとは思えないし、長引きそうならその場を去ればいいだけのことであるから、どうも腑に落ちない。

そこで「入王」「肴屋」「助言」の句を拾い出すと、

肴屋が助言入リ王勝チになり　四一2
入王の難義肴や助言する　六一32
肴屋が助言ン入リ王負ケにせず　一四一27

などの句があり、どうやら只の写生句ではなさそうである。さらに「入王」の文字はないが、

肴やの助言とふ〳〵呉に勝せ　九一4

の句を勘案すると、これは「范蠡の魚腹の手紙」の句ではないかと思われる。『太平記』（巻第四備後三郎高徳が事付けたり呉・越軍の事）によれば、越王勾践が呉との戦いに敗れて姑蘇城に囚えられた際、臣の范蠡が肴屋に姿をやつして機会を窺い、魚の腹に手紙を収めて獄中に投げ入れた。これに力を得た勾践は、呉王夫差の石淋を舐めた功で越に帰される事になる。

主題句および類句は、入牢した勾践を「入王」、范蠡の魚腹の手紙を「肴屋の助言」として、一般句のように見せかけて作った句と思われる。

細井　類句（九一4）で決まりです。

山田　賛。御明解と思います。

清　賛。

90　**しばらくハ顔をたすける綿ほうし**

小栗　よくわからない句。

第一に「顔を助ける」が分からない。綿帽子との関連で連想すると、「顔を見られないで済む」の意か。とするとこの綿帽子は婚礼の「丸綿」のことで、それを被っているしばらくの間は、顔を見られないで済むということであろうか。色直しまでのことなのではあるが。

丸綿をきせぬと顔がやき切れる　傍一8

細井　賛。はずかしいから―これから起こることを想像されるので。

高野　賛。不器量もかくす。

清　礎稿賛。細井説や高野説のようなことではない。

愛染帖

新家　完司　選

（投句283名）

紙コップ仲間になれと渡される　寝屋川市　伊達　郁夫

（評）渡された紙コップで「カンパ～イ！」するともう仲間。紙のように軽い間柄ではあるが、78億人の中で巡り合った仲間だ。

社交性ないから猫は楽なんだ　米子市　池田　美穂

（評）人間に対して忖度も斟酌もなく、社交性など「私には不必要」で、すべてマイペース。真似ができたらラクチンなのだが…。

過去を脱ぎ明日を羽織る衣更え　大阪市　石田　孝純

（評）季節の変わり目ごとの衣更え。言われてみれば「過去と未来」の切り替えでもある。これからはそのような心構えで向かおう。

トイレ掃除ロボットさんに頼みたい　海南市　小谷　小雪

（評）頑張って動き回るルンバ君もせいぜいトイレの床ぐらいまで。便器の中まで掃除してくれるのが発売されたら売れるだろう。

下駄箱に百歳までの靴がある　寝屋川市　川本　信子

（評）革靴やウォーキングシューズなど、まだ傷んでいないのがゴロゴロ。流行を気にしなければ20年や30年は買わなくてもいい。

どうすればいいの竜巻注意報　大阪市　江島谷勝弘

（評）温暖化の影響か猛烈になってきた自然災害。突然の竜巻には「頑丈な建物に避難」だが、駆け足一分でそのような物件は？

ふたりの子土産くれる子てぶらの子　大阪市　大沢のり子

（評）同じ血を受け継いでいながら性格の違う二人。勿論どちらも可愛いが「てぶらの子」は上手く世渡りできるのかちょっと心配。

一日をハシビロコウのように生き　寝屋川市　廣田　和織

（評）餌を獲るとき以外はジッと佇んだままのハシビロコウ。自粛中の誰もが似たようなものだが、たまには気晴らしに出歩こう。

脳味噌の濁り具合が気に掛かる　鳥取市　山野すみれ

（評）集中力が続かず雑念が沸くのは脳味噌が濁っている証。自粛鬱や梅雨空の所為だろう。これを乗り超えればまたスッキリだ！

自由吟コロナの句しか浮かばない　神戸市　近藤　勝正

（評）何を詠ってもよい自由吟だが、昨今は「自粛」とか「マスク」とか、コロナ関連しか浮かんでこない。困ったものである。

死に方に苦労している百寿前　大阪市　宮崎シマ子

A面もB面もすり切れました卒寿坂　京都市　都倉　求芽

ブルジョアに手招きをする豪華船　大阪市　津守　柳伸

礼服を着ず一年が経過した　宝塚市　岸田　万彩

衣更え冬を引きずる下半身　東京都　川本真理子

クシャクシャの札が出てきた衣替え　尼崎市　藤田　雪菜

神様が空で見ていた逮捕状　南あわじ市　萩原　狸月

ため息をいっぱい詰めてシャボン玉　大阪市　折田　昭子

井の中を覗けば若い僕がいる　唐津市　坂本　蜂朗

他人から見れば私も毒がある　米子市　吉田　陽子

靴底は減らずにひとつ齢が増え　河内長野市　梶原　弘光

ロミオにもそろそろ飽きたジュリエット　大阪市　平井美智子

カレンダーくすり飲んだらマル印　尼崎市　山田　耕治

藤井寺市　鈴木いさお
うどんには七味焼鳥には一味

明石市　糀谷　和郎
目玉焼き醤油派ソース派でもめる

西予市　黒田　茂代
食べる事几帳面です日に三度

津山市　高橋由紀女
命日に捧ぐほかほか柏餅

大阪市　谷口　義
唐揚げを考えたのは誰だろう

奈良県　渡辺　富子
昔ばなし弾んでうまいよもぎ餅

自粛など知らぬ雑草よく伸びる

神戸市　興水　弘
やっぱり殻があなたの卵かけご飯

自分なりに生きるしかない靴の底

香芝市　大内　朝子
自転車へ赤い服着る事故防止

心身がのっぺらぼうになる自粛

青森県　月波　与生
金はない自粛をしてもしなくても

禁酒禁煙して少年に戻る

鳥取県　斉尾くにこ
汚れてはいない手を何度も洗う

コロナ禍も変わらず届く川柳誌

笠岡市　藤井　智史
銀シャリになれぬ　チャーハンにはなれる

賽銭の分はしっかり祈ります

唐津市　前田　廣幸
ウォーキング土産は上衣ひと抱え

鳥取市　福西　茶子
待て　まて　待て　外はマムシの捕獲戦

佐賀県　真島久美子
除菌して帰っていったかぐや姫

鳥取県　本庄　汪
追いつけぬ君の背中が遠くなる

明石市　瀬島流れ星
あの人になんで惚れたと嗤う月

芦屋市　竹山千賀子
愛されたニックネームを戒名に

丈夫な骨作る料理に骨おれる

高槻市　原　洋志
約款に触れず保険屋庭をほめ

納豆の賞味期限は気にしない

大阪市　島田　明美
大阪に行きたくないと言われ　初夏

「花は咲く」無音でうたう眠れぬ夜

防府市　坂本　加代
雑学の博士になれるユーチューブ

卓球で動体視力磨かれる

松江市　石橋　芳山
立ち位置は高野豆腐か冷奴

雑草のように男が群れている

松山市　大内せつ子
元素記号が増えたようですまたひとつ

不協和音ものの見事にひびき合う

富田林市　中村　恵
夏がくる茄子と胡瓜が笑い合う

切れ端を拾い集めた五目飯

生駒市　饗庭　風鈴
るりはこべ名も知らぬまま恋に落ち

アフロディーテ何か始まる予感する

河内長野市　森田　旅人
漏れていたらしい涙はもう出ない

ためになる話たいてい聞き漏らす

男鹿市　伊藤のぶよし
かけ流し温泉平和ながれてる

岡山県　田中　恵
若葉風軽い財布も背伸びする

鳥取市　上山　一平
鍬を打つ畝も真っ直ぐ気持いい

丹波篠山市　澤　良子
また来たねツバメのお宿無料です

川西市　山口　不動
葉桜を銀輪2台疾走す

交野市　山野　双葉
五月晴れ飛行機雲もシュッとして

弘前市　高瀬　霜石
離婚した理由聞いてはいけません

熊本県　岩切　康子
震災地刻刻進む四車線

堺市　奥　時雄
羨ましくもない紀州のドンファン

初採りの緑しあわせ豆ごはん　大阪府　米澤　俶子

何かある度に娘は母を呼ぶ　高槻市　片山かずお

最上の眠りを誘うブリタニカ　枚方市　栃尾　奏子

墓参り終の住処の石磨く　三田市　大西　重男

暇同士しゃべるインコも絶好調　沖縄県　宮　すみれ

山菜もハウス育ちで灰汁が無い　三田市　谷口　修平

アンケートいつもその他のパーセント　岡山市　大石　洋子

永遠の愛が傾く三年目　三原市　鴨田　昭紀

一枚二枚三枚もです猫かぶり　黒石市　石澤はる子

雲ありて知る夕焼けの映え具合　熊本市　杉野　羅天

宴席の肴に手柄話聞く　鳥取県　山下　節子

それでそれでと言ったばかりに長電話　大阪市　小野　雅美

褒め言葉軸受までも軽くなる　広島市　松尾　信彦

霧吹きを掛けてやりたい人がいる　黒石市　北山まみどり

自販機が「まいどおおきに」言うてはる　羽曳野市　吉村久仁雄

自販機は品切れサンプル白々し　大阪市　高杉　千歩

うぐいすの声と一緒に朝歩き　豊中市　松尾美智代

踵から降り爪先を蹴る散歩　羽曳野市　宇都宮ちづる

日に五回犬が嫌がる夜の散歩　池田市　太田　省三

ヤル気出る近くのポストまで歩く　松山市　郷田　みや

ケータイの電波が僕を追尾する　鳥取市　岸本　宏章

左手の財布探している右手　大阪市　大川　桃花

セルフレジ行列つくる高齢者　三田市　堀　正和

イケメンにすぐ心臓がリアクション　八王子市　川名　洋子

ベッピンさん囲にしてる同期会　奈良県　中堀　優

愛なんてスマホで送るハートほど　大阪市　横山　里子

思い残すことはもうない恋の数　豊中市　きとうこみつ

全自動やりすぎでしょうトイレまで　犬山市　金子美千代

病室のシーツに残る苦悩あと　小野市　田中　辰夫

寝返りを何度打ったかもつれ髪　大阪市　森　廣子

コルセット診療費外三万円　奈良県　室田　行久

順調に白髪も皺も増えていく　河内長野市　山岡冨美子

老人と思ったことは無い八十路　尼崎市　永田　紀惠

立ったままパンツ穿くのも一苦労　松山市　栗田　忠士

モヤモヤは半径五メートル以内　和歌山市　古久保和子

我が人生ほぼ4打数1安打　八幡市　武田　悦寛

日に晒す少し凹んだ土性骨　鳥取県　門村　幸子

見回しても転けた理由がわからない　奈良市　大久保真澄

妻入院しっかりせよと言う主治医　松江市　中筋　弘充

習ったが使ったりせぬ背負い投げ　堺　市　矢倉　五月

テレビ漬けの雨の日でした農休日　和歌山県　森下よりこ

どの局も同じ話題のワイドショー　堺　市　村上　玄也

三田市　北野　哲男
川柳をサプリメントにして卒寿

大阪市　平賀　国和
現代の一茶を目指す五七五

岡山市　丹下　凱夫
目が覚めた途端一句ができ上がる

神戸市　冨永　恭子
閃かぬ私を救う野菜畑

堺　市　内藤　憲彦
休まずに投句会です悪しからず

奈良市　米田　恭昌
小刻みに本音吐き出す梯子酒

土佐清水市　辻内　次根
焼酎を枇杷酒で割って酔い二倍

札幌市　三浦　強一
パンのみにて生きるに非ず飲むワイン

三田市　上田ひとみ
大丈夫からだにいいの赤ワイン

高槻市　松岡　篤
嬉しいと酒が進むという雛儀

富士見市　中島　通則
コップ酒ふわっと空けて雲に乗る

大阪市　岡田　恵子
ブーハーで憂さ吹き飛ばす大ジョッキ

沖縄県　禱　モモト
居酒屋の時短路上の昼飲みに

堺　市　楠井　輝子
愚痴聞いて貧乏くさい酒に酔う

枚方市　藤田　武人
手料理の味でラガーへ発泡酒

桜井市　安土　理恵
おひとり様の夢を肴に差し向かい

朝霞市　前田　洋子
気分転換週二はビール本物よ

米子市　竹村紀の治
食べて寝て起きてはテレビ夜は酒

大阪市　津村志華子
饅頭より酒がよいぞと仏さま

三原市　笹重　耕三
困ったら一升瓶を横に置く

堺　市　澤井　敏治
黙食に一升瓶が相手する

大阪市　東　敏郎
喪が明けて一人重ねる酒の味

三木市　山口ヨシエ
もう少し酒も飲みたい遊びたい

府中市　岸田　武
連休は家に居まして二日酔い

大阪市　今村　和男
それなりに余韻楽しむ千鳥足

尾道市　村上　和子
医者なのに酒を控えろとは言わぬ

箕面市　中山　春代
樹木葬のお参りですと飲んでいる

鳥取市　前田　楓花
断酒した夫を見ると可哀想

尾崎市　清水久美子
コロナ禍で住みたい島根鳥取県

倉吉市　牧野　芳光
晴れた日にもったいなくも閉じ籠もる

東大阪市　佐々木満作
巣ごもりは自分見つめるいい機会

貝塚市　石田ひろ子
自粛にも馴れオンラインショッピング

吹田市　西沢　司郎
コロナ禍で諭吉財布で居候

鳥取市　副井ゆたか
ステイホーム家計費浮いて買うルンバ

三田市　尾崎　一子
コロナ禍のズボラを諭す血糖値

香芝市　山下　純子
コロナ警戒隙をつかれてヘルペスに

大阪市　宇都満知子
ため息もいっしょに換気しています

尾崎市　宗　和夫
ムズ痒いマスクの下の無精ヒゲ

岡山県　高岡　茂子
マスク外して深呼吸する田圃道

大阪市　田中ゆみ子
いつかいつかマスクの夏を語り草

香南市　桑名　孝雄
大戦も耐えたコロナも耐えようよ

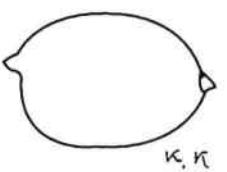
東大阪市　北村　賢子
その内にきっとのびのび生きられる

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句356名）



「微　妙」　石橋芳山選

ほめ殺しの言葉に微笑みを返す　今治市　永井　松柏
経年変化微妙にずれる私たち　石川県　堀本のりひろ
それとなく核心外す温い舌　富田林市　山野　寿之
カツラでしょ髪の分け目がちょい微妙　大阪市　横山　里子
別れると決めて女が皿洗う　堺　市　遠山　唯教
天候が微妙に作用する機嫌　神戸市　奥澤洋次郎
考えが微妙にずれていく息子　羽曳野市　徳山みつこ
タメ口で微妙な空気変えてみる　神戸市　槇田　次郎
考えが微妙に違うのは男女　名古屋市　冨田　末男
微妙です　ポチとダンナの違いって　松江市　藤井　寿代
ヘソクリを隠した位置がずれている　尼崎市　永田　紀惠
微妙とは玉虫色の仲間です　米子市　成田　雨奇
じわじわと微妙な点に触れて来る　大阪市　樋口　眞
ファスナーは上るが腕があがらない　東大阪市　北村　賢子

「微　妙」　古今堂蕉子選

パトカーを微妙な距離で追いかける　松江市　中筋　弘充
不倫会見微妙な返事して話題　羽曳野市　宇都宮ちづる
天候が微妙に作用する機嫌　神戸市　奥澤洋次郎
縁日の指輪をもらう誕生日　黒岩市　北山まみどり
隙きあらばと覗くコロナの微妙な目　大阪府　髙木　道子
名優の演技に見える微妙な間　奈良県　安福　和夫
濃淡の墨絵微妙な筆捌き　津山市　髙橋由紀女
友情に微妙にからむ恋心　池田市　上山　堅坊
判定へリプレイ検証恋意入らず　神戸市　山口　光久
琴線に触れずに説得する言葉　枚方市　藤村　亜成
分け入ればみどり黄みどり深みどり　大阪市　島田　明美
指で触れ微妙な血管（くだ）にプロの技　熊本県　岩切　康子
ユニークな方と微妙に言い換える　大阪市　寺本　実
口げんかちょっと濃い目のお味噌汁　豊中市　松田蟻目路

笑おうか笑わまいかと迷うオチ　河内長野市　大島ともこ
柔軟に包むデリケートなハート　三原市　鴨田　昭紀
セクハラにならぬ程度に体寄せ　丹波篠山市　北澤　稠民
笑うツボ微妙にずれている家族　青森県　月波　与生
結婚はしたが入籍しないまま　宮崎県　黒木　栄子
鼻の差の悔しさ乗せて飛ぶ馬券　橋本市　石田　隆彦
美人とは微妙に違う目鼻立ち　鳥取市　太田　睦子
この世でもあの世でもない酔い心地　橿原市　居谷真理子
判定が覆ってもなお不満　吹田市　西沢　司郎
贅沢の幅が皆とはずれている　丹波篠山市　酒井　健二
私には薔薇ライバルには胡蝶蘭　鳥取市　前田　楓花
ナノレベルなのか微妙という単位　唐津市　前田　廣幸
口角がぴくり怒りかほほえみか　奈良市　大久保眞澄
デリケート用と薬のコマーシャル　香南市　桑名　孝雄
国境が海の上にも引いてある　明石市　糀谷　和郎
一食を抜いて体重測定日　鳥取市　奥田　由美
ニュアンスが微妙に違う笑っとく　大阪市　高杉　千歩
微妙ですカサブランカを贈られて　三田市　野口真桜子
たんじょう日おめでたいのかもう微妙　米子市　池田　美穂
侘び寂の違い説明難しい　西予市　黒田　茂代
微妙さを常に求めるやじろべえ　豊中市　きとうみつこ
友達以上恋人未満観覧車　大阪市　高杉　力

切り札はまだ使わない使えない　広島市　有田　澄子
鼻の差の悔しさ乗せて飛ぶ馬券　橋本市　石田　隆彦
母と妻温もり違う思いやり　西宮市　高橋千賀子
微妙です馬鹿か間抜けか天才か　宝塚市　太田としお
堅物も微妙に揺れる札の束　奈良市　米田　恭昌
答弁の言質与えぬ言いまわし　南あわじ市　萩原　狸月
運不運微妙な誤差の中で生き　福山市　新庄　芳春
みんな逝くのさ順番は微妙　札幌市　三浦　強一
くすぐると微妙に動き出す虚栄　札幌市　小沢　淳
白桃の恋よ触れば傷がつく　尼崎市　藤田　雪菜
米中の間で手綱持たされる　和歌山市　柏原　夕胡
五輪微妙中止開催再延期　富士見市　中島　通則
美味しいと聞くと微妙という夫　神戸市　能勢　利子
褒めているのか貶してるのかその言葉　西予市　黒田　茂代
国境が海の上にも引いてある　明石市　糀谷　和郎
それ以上進めば野暮に老いの恋　和歌山県　森下よりこ
微妙です　ポチとダンナの違いって　松江市　藤井　寿代
俺と婿妻のあしらい微妙に差　神戸市　松倉　正美
葉桜のそよぎか楠のざわめきか　岡山市　丹下　凱夫
言い分けが微妙に違うバラと菊　豊中市　松尾美智代
食レポはヤバイとビミョー使い分け　羽曳野市　梶原　弘光
微妙とは玉虫色の仲間です　米子市　成田　雨奇

看護師の微妙に違う注射針　岡山県　田中　恵
賢くもないしアホでもないらしい　大阪市　平井美智子
半分は浸かっていそう認知症　横浜市　川島　良子
見渡して多い方へと手を挙げる　大阪市　小野　雅美
セカンドオピニオン話を聞いて又迷う　奈良市　仲西　賛郎
縁日の指輪をもらう誕生日　黒石市　北山まみどり
一ミクロン単位をさぐる指の先　倉吉市　牧野　芳光
恋人か夫婦か不倫兄妹か　奈良県　室田　行久
白ですか黒ですかグレーなんです　松山市　柳田かおる
泣いてない怒っていますおかめです　岡山市　工藤千代子
バランスがやっぱり微妙アメとムチ　奈良県　長谷川崇明
返納か更新するかヤジロベエ　倉吉市　大羽　雄大
陰口よりも気軽に言えるのが噂　松江市　中筋　弘充
友情に微妙にからむ恋心　池田市　上山　堅坊
雨時々晴れ弁当作りどうしよう　鳥取市　中村　金祥
頑丈な手足ですねとほめられる　芦屋市　竹山千賀子
X・Yどちらにもあるボクの性　枚方市　藤村　亜成
さらさらと流れる音に疼くもの　三木市　山口ヨシエ
白桃の恋よ触れば傷がつく　尼崎市　藤田　雪菜
やりますと言わずにほかすお役人　豊中市　藤井　則彦
音程が微妙にズレるパートナー　塩竈市　木田比呂朗
今はどこ生命線をたどる指　大阪市　阪井　恵子

守り札も散乱してた事故現場　神戸市　米田利惠子
ハイビスカス黄とオレンジの闘ぎ合い　熊本市　杉野　羅天
ナノレベルなのか微妙という単位　唐津市　前田　廣幸
看護師の微妙に違う注射針　岡山県　田中　恵
腹の内微妙な問いで探られる　神戸市　上田　和宏
瞑想か微笑か観世音菩薩　松山市　栗田　忠士
秒針が五秒右へ傾いた　神戸市　青木　公輔
怪しげな話は遠い耳で聞く　寝屋川市　岡本　勲
八十五歳まだともうとの中にいる　大阪市　川端　一歩
モノマネがうまいと響かない個性　和歌山市　まつもともとこ
七度五分もしやコロナやないやろか　大阪市　近藤　正
また今日も休みですかと作句帳　堺　市　矢倉　五月
友達以上恋人未満震度3　大山市　金子美千代
金太郎飴微妙に違う顔ならぶ　大阪市　岡田　恵子
ポイントが微妙にずれる時代の差　芦屋市　竹山千賀子
燗酒の温度で違う酔い加減　安来市　原　徳利
半分は浸っていそう認知症　横浜市　川島　良子
出だしから微妙な差ならありました　上尾市　中村　伸子
返答は軽く笑ってそれっきり　和歌山市　古久保和子
微妙な差が大差になっていく怖さ　大阪市　平賀　国和
セクハラにならぬ程度に体寄せ　丹波篠山市　北澤　稠民
電話口微妙に会話ずれる父　尼崎市　近兼　敦子

倦怠期なのか微妙な空気感　鳥取市　山下　凱柳
微妙なとこ覆っています触れないで　海南市　小谷　小雪
セピアだが微妙にピンク抱いている　鳥取市　大前　安子
戦車より救助たのもし自衛隊　広島市　松尾　信彦
合鍵に微妙な仲を見抜かれる　高槻市　原　洋志
電話口微妙な影をキャッチする　香芝市　山下　純子
イエスともノーとも取れる首の位置　和歌山市　古久保和子
長生きもどの辺りならちょうど良い　鳥取市　山野すみれ
くすぐると微妙に動きだす虚栄　札幌市　小沢　淳
血まみれの人が救急車を拒絶　岡山市　永見　心咲
ランドルト環見える見えない三段目　大阪市　森　廣子
鼻の位置少しずらせば女優にも　越谷市　久保田千代
照れないで好きなら好きとおっしゃって　大阪府　大浦　福子
燗酒の温度で違う酔い加減　安来市　原　徳利
どちらかと言えばやっぱり好きかなあ　三田市　上田ひとみ
よく伸びるスリムパンツは超微妙　吹田市　岩口のぞみ
突っ走る愛は微妙にうすっぺら　三田市　足立つな子
ここからは老人のことは何処だ　鳥取県　斉尾くにこ
抱き合って不能と無能よく眠る　佐賀県　真島久美子

秀　句

六度八分とき時七度たまに咳　神戸市　山崎　武彦
一センチ的をはずしたウォシュレット　宝塚市　岸田　万彩
分け入ればみどり黄みどり深みどり　大阪市　島田　明美

口で拒否目は許してる母がいた　羽曳野市　吉村久仁雄
発酵で微妙に変わる藍の色　寝屋川市　川本　信子
それとなく核心外す温い舌　富田林市　山野　寿之
戦車より救助たのもし自衛隊　広島市　松尾　信彦
違和感が安全牌を握らせる　横浜市　加藤　佳子
愛は焼き飯だ　微妙な焦げ具合　笠岡市　藤井　智史
美人かと言われ微妙な妻の顔　宇部市　平田　実男
結構です諾否微妙な受け応え　豊中市　水野　黒兎
微妙な差「富岳」緻密に見逃さず　寝屋川市　森　茜
食い違う微妙にドンの意趣返し　大阪市　津守　柳伸
経年変化微妙にずれる私たち　石川県　堀本のりひろ
僕だけに微笑みくれた気がするが　堺　市　奥　時雄
おみくじは凶茶柱が立った朝　奈良市　大久保貞澄
コピーには出ない原画の色使い　豊中市　池田　純子
譲られた席だが幅に無理がある　大阪市　近藤　風羅
審判の右手が泳ぐ変化球　米子市　竹村紀の治
ランドルト環見える見えない三段目　大阪市　森　廣子
とりあえずひっそり走っている聖火　西宮市　亀岡　哲子
残り物並んだカラフルな弁当　弘前市　髙瀬　霜石

秀　句

一括り出来ぬ関西各府県　大阪市　原田すみ子
百歳時代是非は微妙に揺れ動く　河内長野市　村上　直樹
この世でもあの世でもない酔い心地　橿原市　居谷真理子

「かたち」

（投句　２４８名）

岸本宏章選

体形の幸せそうな八ヶ月　貝塚市　石田ひろ子
老いて知る亡母に似てきた顔形　堺市　今井万紗子
家族のかたちになるままごと遊び　海南市　小谷　小雪
苦労性手のかたちまで母に似る　和歌山市　北原　昭枝
コロナ禍に結婚式は形だけ　可児市　板山まみ子
改憲論日本のかたち変えないで　東大阪市　佐々木満作
日溜まりの中より添う二人ほほえまし　東大阪市　北村　賢子
手つかずの亡夫の部屋にあるカタチ　河内長野市　木見谷孝代
縄張りを犯すかたちに囮鮎　富田林市　山野　寿之
ため息のかたちが残る午後のカフェ　堺市　澤井　敏治
形から入ってやがてオリジナル　横浜市　加藤　佳子
羊水の小さな命見て安堵　寝屋川市　川本　信子
踏ん張った足がだんだん細くなる　八王子市　川名　洋子
塊で雑魚は大魚に立ち向かう　大阪府　米澤　俶子
まずかたち真似て修業の第一歩　松山市　宮尾みのり
隅っこに形ばかりの謝罪記事　富士見市　中島　通則
草臥れたかたちで吊ってあるスーツ　堺市　村上　玄也
コロナニュース祈るかたちで聞いている　神戸市　上田　和宏
かたちから入りかたちに縛られる　倉吉市　牧野　芳光
子を守るかたちで母が痩せてゆく　大阪市　小野　雅美

三角も丸も俵も母の味　三田市　村田　博
ＣＴに映らぬ心療のカルテ　松山市　栗田　忠士
かたちから入る嬉しさランドセル　東京都　川本真理子
不揃いの目玉焼きから朝になる　和歌山市　上田　紀子
ときめきのかたち真っ赤なさくらんぼ　豊中市　松尾美智代
そっくりと言われて孫が拗ねている　三田市　北野　哲男
ワッショイのかたちでなんじゃもんじゃ咲く　今治市　永井　松柏
天辺がまだ見えなくて迷い道　岩国市　上村　夢香
口下手な夫がくれた2カラット　尼崎市　清水久美子
貧しても崩さぬにんげんのかたち　三原市　鴨田　昭紀
自分史が少しいびつに出来上がる　塩竈市　木田比呂朗
深呼吸１００回出口見えてくる　弘前市　髙瀬　霜石

佳　句

おんな独り流線型で生きている　尾道市　村上　和子
がんばらぬかたち茄子には茄子の花　大阪市　平井美智子
一抹のさみしさもある家族葬　犬山市　金子美千代
雲っていいなかたち自由に気まま旅　米子市　伊塚美枝子
合掌の形が常となる老後　鳥取市　福西　茶子

人

お気持をかたちに代えてのし袋　香南市　桑名　孝雄

地

たこ焼きをクルクル幸せのかたち　大阪市　髙杉　力

天

魂を入れて粘土が人になる　豊中市　水野　黒兎

軸

元のかたちに神も仏も戻せない

「骨」

（投句　249名）

木見谷　孝代　選

老骨を労わるべきか鞭うつか　鳥取市　山下　凱柳
骨のある奴と見込んで扱かれる　鳥取市　岸本　宏章
タッチパネルを嫌う骨太の指　塩竈市　木田比呂朗
じわじわと背骨を降りてくる恐怖　橋本市　石田　隆彦
骨のある男だノーと独り言う　三田市　堀　正和
骨休めと思うことにする自粛　八王子市　川名　洋子
牛乳と雑魚で私の骨密度　豊中市　松尾美智代
反核を骨に刻んで広島忌　西予市　黒田　茂代
古民家の骨組み使う憩いの場　津山市　高橋由紀女
弔辞では気骨の人と敬われ　唐津市　仁部　四郎
貧乏が骨身に沁みて出世する　宝塚市　太田としお
骨惜しみのつけを知ってる体重計　西宮市　福島　弘子
骨まで愛してと妻とハモってる　堺　市　坂上　淳司
連れ合いはぼくの肋で出来ていた　土佐清水市　辻内　次根
骨休めのコツを覚えたテレワーク　豊中市　藤井　則彦
土と生きた武骨な指は無口なり　河内長野市　落葉　ふみ
缶詰は見事骨まで食べさせる　神戸市　冨永　恭子
骨少しずれてるだけでこの痛み　大阪市　笠嶋　惠美
望郷の迎え待つ骨ニューギニア　寝屋川市　川本　信子
骨太の予算のどこが太いのか　藤井寺市　鈴木いさお

老いたなとやがて悟っていく背骨　高槻市　島田千鶴子
骨密度レモン齧って上げてます　河内長野市　梶原　弘光
言い過ぎた喉の小骨に寝つかれず　堺　市　奥　時雄
骨がないタコは隙間に入り込む　海南市　小谷　小雪
骸骨の模型に泣いた子が医者に　加西市　山端なつみ
オレオレが骨までしゃぶる特殊詐欺　横浜市　加藤　佳子
ほめられたお骨悲しみ倍加する　越谷市　久保田千代
骨惜しみせなんだ亡母の小さい背　鳥取県　門村　幸子
煩悩を解かれた骨は地に返る　西宮市　緒方美津子
わたくしを骨抜きにした誉め言葉　箕面市　酒井　紀華
咀嚼不能骨の髄まで頑固者　大阪市　古今堂蕉子
ムダ骨が積もり人間らしくなる　高槻市　富田　保子

佳　句

ワクチンに国の背骨の弱さ知る　池田市　上山　堅坊
散骨の父満天の星になる　貝塚市　石田ひろ子
この骨で母は十人子を育て　松山市　栗田　忠士
骨抜きにしないで平和憲法を　羽曳野市　徳山みつこ
戦争の小骨が喉の奥に棲む　弘前市　髙瀬　霜石

人

骨惜しみせずに介護の日が暮れる　和歌山市　北原　昭枝

地

埃まみれの骨董品になった　奈良市　大久保眞澄

天

失くしたのは反骨という骨ひとつ　富田林市　中村　惠

軸

散骨へ夫の愛した郷の海

初心者教室

題 ― 半 分

高瀬霜石

これを書いているのが、大阪では3度目の緊急事態宣言が出た4月の下旬。これが活字になる7月には、ワクチンは普及しているだろうが、オリンピックは？　中止してるよね。

①いつものように、上と下を入れ替えてみる。

（▼は原句。▽は参考句）

▼親子でも電話料金半分に　ミヨノ

ここは、あえて上が重くなっても、

▽電話料金半分にする親子でも

▼デート中焼き芋買って半分こ　睦子

▽焼き芋を半分ごっこするデート

▼左党の手交互に受けるコップ酒　一平

▽コップ酒交互に受ける左党の手

▼母送る涙半分安堵半分　双葉

読者に、なるほどと思わせるにはこの下五。

▽涙半分安堵半分母送る

▼山登りまだ半分と励まされ　紀美代

▽まだ半分もう半分の山登り

▼トイレの戸急ぐ気持ちが閉めきれず　開子

お気持ちよーく分かります。だからこそ、ここは、ドドーンとたたみかけましょう。

▽急いて急いて閉める間もないトイレの戸

▼半値札上手に使う妻の腕　(村)和子

と、上手に一応まとめましたがね。これって、実は。和子さん自身のことなんでしょ。

▽ここ一番上手に使う半値札

▼5年前髪は半分あったのよ　不二夫

▽半分は髪あったのよ5年前

▼君と僕足りないところ分かちあお　一弥

とてもいい関係。青春万歳。せっかくだから、もっとざっくばらんにしたいもの

▽足らないところ分かちあおうぜ君と僕

▼下手な嘘半分あきれて聞いてやる　(貝)正子

これはこれで悪くはないが、ただね、中八でリズムが悪い。となると…

▽半分はあきれて聞いた下手な嘘

▼幸せは独り占めせず半分こ　風露

▽独り占めせずに幸せ半分こ

▼半分ずつ親の遺伝子こんな息子に　(瞿)良子

▽遺伝子は半分なのにこんな子に

②もっと適切な表現はないか。あえて大袈裟にし、ドラマチックに仕立て変えたり、抽象的な言葉をカットし、具体的な言葉を持ってきたりして、読者の視覚効果を高める。

▼夕飯を半分減らしてデザートを　弥生

「半分」を使えば、「減らす」は、無用。

▽夕飯は半分デザートはたっぷり　とか

▼好物を母の墓前で半分こ　智恵子

▽草団子母の墓前で半分こ　とか

▼ハーフでも日本の心根に宿る　義明

▽なおみ・塁日本のこころ根に宿る　とか

▼五時からの半額セール待つおかず　通則

▽五時からに半額セール待つお寿司　とか

▼半分は本音後はケセラセラ　眞智子

しょっちゅうおすすめはしないが、ここはあえてリフレイン。

▽半分は本音半分ケセラセラ　とか

▼半分は悔いとあきらめ涙色　弘

ここも同様。リズムがぐっとよくなる。

▽悔い五十あきらめ五十涙色　とか

▼窓を半分開けて待つ青い鳥　千賀子

▽窓半分開けて待ってる青い鳥
▼セールスに話半分受け流す　行久
▽セールスの話半分受け流す
▼喜寿もすぎ半分切った友の数　えい子
エッ？　えい子さん、友達までも断捨離したの？　と、ビックリしたが、そうじゃない。数が半分を切った、つまり半減してしまったってことですよね。なので、平凡になるけれども、誤読されないためにも。
▽喜寿過ぎて半分になる友の数
▼一千万二分の一で済ます喜寿　厚子
厚子さんも、喜寿をお迎えですか。この句、分からんでもないが、これからの老後の生活には、年金の外に二千万円（またはそれ以上）必要という試算にみんなビックリしたはず。だから、ここは分かりやすく、
▽二千万円二分の一で済ます喜寿　とか
▼半ドンのうれしさ奪う週5日　勝正
僕も、昔（50年前）サラリーマンをしていた。土曜日が半ドンになり飛び上がったこと、今でも覚えている。しかし、勝正さん、いくらなんでも半ドンはもう死語でしょ。
▽週休2日半ドンはもう過去のもの
▼幸せの半分誰かくれたもの　次郎
これはこれでOKなのだけれど、どうも漠然としすぎ。次郎さん、面と向かって言うわけじゃないから。川柳だから。ここは照れずに、はっきり言い切りましょうよ。
▽幸せの半分妻がくれたもの
▼ターニングポイント神の気まぐれ生と死は　風鈴
長さもさることながら、これは言い過ぎ。
▽ターニングポイント神は気まぐれだ　とか
▽ターニングポイント生と死の狭間　とか
▼いつも半ズボン昭和の男の子　閑
▽半ズボンでした昭和の男の子

（○は佳句、◎優秀句）
○善くももったとなかば呆れるダイヤ婚　ゆき
呆れると言いつつも、実は照れてるゆきさん。ダイヤモンド婚（60年）に拍手。
○半分に割って蜜入り確かめる　道子
青森のリンゴは、たっぷり蜜入り。青森リンゴは日本一。つまり、世界一でんがな。
○半分こ知らずに育つひとりっ子　裕子
ウチもそう。ひとり息子。会社は大阪。住まいは京都。結婚したから、ま、いいか。
○半分こに憧れていた恋心　くみ子
◎半分になっても笑うお月様　(森)廣子
◎青空の半分分けて子の自立　(澤)良子
◎半分に切って結局二個食べる　のぞみ
今月の卒業生は、かつてない？　3人。まずは、寝屋川市の川本信子さん。まとめ方がとても上手。字もきれい（つまり、読みやすいってこと。これって結構大事）。
○妻の愚痴半分以上聞き流す　(川)信子
この句、リズムはチト悪くなるが「半分以上聞き流す妻の愚痴」でも面白い。信子さんのこれからの課題は、時には「冒険」か。「暴走」じゃないよ。念のため。
○リモートで居間の半分仕事場に　(川)信子
○半分は褒めて育てる子の個性　(川)信子
次の卒業生は、宮崎市の押川あぐらさん。文句なしの実力派。柳名もユニークで、楽しい。今後の活躍に期待。
◎半分に分けた向こうが気にかかる　あぐら
○「半分こ」できぬ大人になりました　あぐら
○気が急いて話半分聞き流す　あぐら
「話半分」と「半分話」どっちがいい？
3人目は、大阪市の風羅さん。風羅さんは、人生を達観している我々の大先輩だろと、句を読めばすぐに分かります。
◎足して二で割れば納まる世ではなし　風羅
○割り勘と言いつつなぜか四捨五入　風羅
○もう半分まだ半分と注ぎ注がれ　風羅

路郎忌に寄せる

暗合と類句

麻生路郎

(1) 暗　合

句会で披講の際に、一つの句に対して二人の句主が表れることがある。その時には句主の一人に句箋を示し、筆蹟によって真の句主を決めることにしている。不幸にして選者の手に残らなかった方の句主の句は没となる。同じ句でありながら、一方が抜けて、一方が落ちると云うのはいかにも片手落ちな感じがするが、こんな場合に没になった方の句主はアッサリ引下るのを常とする。よく調べて見ると一字や二字違っていることもあり、一字違っても、充分没になるだけの優劣のつく句もあるのであるから、句主が二人表われたからと云っても、あながち選者の手落ちとばかりも云えないのである。一字も違わない句に句主が二人以上表われることは句会の場合に限らない。新聞柳壇の選句や雑誌の応募句の選などをしていると、たびたびぶッつかる問題である。そうした同一の句を指して、暗合句と称しているが、一般の新聞や雑誌の場合には暗合でなくて、他人の句を剽窃して投句して来る場合もある。しかし永年選をしていると暗合と剽窃との区別はたやすく見分けることが出来るものである。古本屋が、自分の本を売りに来たのか、万引きした本を売りに来たのか、すぐ見分けがつくのと一寸似ている。専門の柳誌になると剽窃句などはないが時に暗合することはある。暗合は雑誌にくらべると題詠の方に多いようである。多いと云っても、無闇矢鱈に暗合するものではない。

大正六年四月一日の句会で「人」という題詠に三人の句主があらわれたそうである。どんな句かと云えば、

太陽は無駄に光れり無人島

と云うのである。大した句ではないが、想像力が生んだ句が期せずして合致したのである。句主は郁男、三太郎、紅太郎の三人で剣花坊派の錚々たる連中である。

又、

真スグに歩けば人に突き当り

と云う句は十千棒、剣珍棒の二人の句主が表われている。一つの句会で、こんなにも暗合することは珍しいことである。これは「人」という題が出れば斯う云う句をと云う碁や将棋の定石のようなものが、いつとはなしに句主の頭に出来ているからであろう。それが証拠には、それ等の句主が何れも当時の猛者連であることである。あまりに安易に句を作ること、所謂定石的な句を作るから斯うした結果をまねいたのである。しかし原因はそればかりではない。川柳それ自体が、僅に十七音字の短詩型であること、句主の頭のレベルが、近似していると云うことが大きな原因なのである。川柳の十七音字中心に当分動きがないものとすれば、句主は思想の隔絶によって、表現技術の妙味によって、そうした暗合から回避するより外に手はないであろう。

こしらえて後から食べて片附けて　　演算子

こしらえてあとからたべてかたづけて

竹　荘

の二句が、漢字交りと仮名ばかりとの相違はあるが暗合しているそうである。これはまだ事実を発表誌によってたしかめてはいないが、事実とすれば前者の句は昭和十五年の作であり、後者の句は昭和二十二年の作であるから後者は潔く取消すべきである。暗合は句会での暗合のように、同時に同一の場所で作句されることもあるが、時と所を異にして作句されることもある。時には古句とも暗合することがある。しかし暗合に似て暗合でない場合のあることも知らなければならない。それは先輩や柳友の佳吟をあまり熱心に読んだために、他日自己の作品の中に、そのままの句があらわれて来ることがある。これは作家としては余程注意しなければならないことである。そんなことがあると、その人の品性を疑われ痛くない腹を探られるからである。何れにしても自分の句が暗合した場合には作句した実際の時日は別として後日に発表した句主は潔く自己の句帳から抹殺すると同時に、他に対しては適当な方法で取消しておくことである。

(2) 類　句

暗合というものは内容も形式も全く同一のものとなった場合のことであるが、類句というのは、内容の類似、形式の類似、内容形式共に類似した場合の謂いであるから形式が非常に近似していても、内容が全く別箇のものを表わしていて二句とも生かして差支えのない場合もある。その意味から、選者によっては類句として取扱い、二句の中の少しでも佳吟だと思う方を一句生かす場合と二句とも捨ててしまう場合があるが、選者によっては類句として取扱わないで佳吟だと思えば二句とも生かす場合もある。従ってそんな句に接した時には選者は余程慎重な態度で、それ等の句を選しなければ、類句でもないものを類句とし、類句を類句でないものとする誤りを侵すことになるのである。

句会での作品のように、同時に作られたものでなくても、同時に選をする場合の類句の発見は、それほど困難ではない。しかし、それらの作品と、時を隔てて作られた作品とが類句であるかないかを発見することはなかなかに難事である。選者として古句は云うまでもなく、近い過去の作品をある程度眼を通していなければならないからである。殊に川柳に限らず、短歌や俳句のような他の短詩型に対しても、有名な作品は一応眼を通していないととんだ失敗をするものである。

作家としては類句を惧れていては全く手も足も出ない訳であるから、類句と知らずに、かなり多くの類句を作るものである。そしてそれ等の類句をいかにさばいて行くかが選者に与えられた仕事の一つなのである。選者としては、それ等の類句中から、佳吟一句だけを残す場合もあろうし、類句全部を捨ててしもう場合もある。類句と知っても、一句でも採る場合は、その作家が全く初心者であり、これを育てて行かなければならぬ場合に限られる。初心者が多く集まっている会で、レベルを落として選句をすれば、その多くの作品は過去の作品の類句であることはまぬがれ難いのである。しかし、いつまでもそうした選をしていれば作家はそれでいいのだと思って、駄作を繰返し、類句を繰返しして遂には救うことの出来ない結果を招くことになるから、選者としての苦汁を嘗めなければならない。

では、どのような句が類句であるかを例

示することにしよう。

こうなされませと死人の掌を合せ　荷十

いいとこへ参りなさいと手を組ませ　湧三

用いた語彙はかなり違っているが、ねらいどころは殆ど同じだと云わねばならない。しかし、この程度の句を発見した時に、一々これを取消していては煩瑣に堪えぬものがある。そこは世の中はうまく出来ているもので、幾ら類句が詠出されても、その中での佳吟しか人の頭には残らぬものである。人口に膾炙している句でも、幾十幾百の類句が生まれては死に、生まれては死んで、その句が只一句だけ生き残ったのであるかも知れない。そうでないとは誰も保証することが出来ないのである。

花、花、花、人世の表　七ッ丸

死、死、死、世界は無い　剣花坊

この種の類句的な表現も一種の類句だと云えないこともない。しかも格言類似の句であって本来の川柳から遠く離れた句である。しかし、斯うした類句が生まれる点から考えてもマンネリズムから遁れようとして新しいマンネリズムに陥っていた剣花坊派の当時の句風が想像出来るであろう。「花、花、花」の句と「死、死、死」の二句を比較して見るのに、同一の文字は一字もないが、しかも類型的な句として両立させることを躊躇するのであるが、次の二句

白粉の下は光陰矢の如し　史城

風呂嫌いげに光陰は矢の如し　紋太

の如きは同じく類型的であり、一句中の半ば以上が同意義、同語彙でありながら、句の内容を検討すると、前者は白粉を通じて人生の無常迅速を詠い、後者は単に一市井人の生活を詠って、それぞれ異なったものを描出しているので、確然と両立させることが出来るので類句だとは云えない。

句会の句にしても、柳誌への投句にしても、出句数の約九〇パーセントは没と見ることが出来るが、それ等の九〇パーセントの没の中で、技巧の拙劣さや内容の陳腐さ等々で捨てられる句よりも、類句としてキャンセルされる句の方が遥に高率を示す場合もあるのである。類句おそるべしと云いたい。要するに、作家の行くべき道は絶えず類句を踏み越えて、作家独自の世界へ進出するのでなければ一家をなすのに甚だ遠いと云わなければならない。

（麻生路郎著『川柳とは何か』昭和30年11月至文堂発行）

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』

麻生路郎
読本

「川柳雑誌」「川柳塔」
通巻一〇〇〇号記念出版

A5版
514頁
頒価　三〇〇〇円
（郵送料共）

路郎忌に寄せる

大輪のバラとミニトマト3個

水野黒兎

地方の大学とは言え法学部を優秀な成績で卒業した彼は、若気の至りでちょっとばかり上から目線の発言をしたりして周りの者に煙たがられたり、お高くとまっているなんて陰口を言われていることを薄々感じていた。しかし基本的には母親の厳しい躾で、人を誹ったりおごり高ぶったりはしない性格であった。名家の育ちとして行く末は安泰であり安穏とした暮しであった。しかし運命は厳しい。ある日、隣家の火事で家の工場が類焼してしまい、それを契機にさしもの名家も傾いてしまった。

仕方なく隣町の温泉街の老舗旅館に拾ってもらった。それ見たことかとうろんな目で見られることもあったが、彼は懸命に働いてやがて、旅館にとって無くてはならぬ人物となった。

人の下駄そろへる事にいつか馴れ　路郎

もう春だというのに、町のあらゆる場所で人はマスク付けしている。マスクの生活にすっかり慣れてしまい、若者たちの中にはマスクをしないのは自分のすべてをさらけ出すようで恥ずかしい気持になるとまで言うようになった。

一向に収束しないコロナ騒動でついに勤めていたホテルが閉鎖されることになり、無職になってしまった。ホテル経営者の苦渋の決断を咎めることもできない。日頃から慣れ親しんだ真っ白なワイシャツにきりっとネクタイを付け客との対応も上々のホテルマンになっていたがこれからのことを考えると暗い気持になる。

田舎生活に飽き飽きして家出同然に里を出て早くも十年、里では両親が細々と野菜農家として家を守っている。いまさらどの面下げて里に帰ることが出来よう。そんなことをくよくよ思い悩んでいたところ母から力仕事はだんだん辛くなったから帰って来ぬかと言ってきた。嘘も方便、子の苦しい状況を知った親の計らいであると察した。折角の親の気持に感謝して帰ることを決断した。ひょっとしたらあのミヨちゃんが未だ待っているかもしれない。

ワイシャツの汗も悲しい馘首だった　路郎

学習塾にも通わず、親の仕事を手伝いながらの浪人生活という十代最後の二、三年は楽しいものではなかった。高校の同級生たちは、それぞれの学校に入り学生生活を謳歌していた。自分はと言えば古い教科書や参考書で、微分積分や、世界史や、徒然草と格闘する日日であった。

そんなある日、中学時代の恩師が家に呼んでくれた。教師をしながら、小さな菜園で野菜を育てていた。そんな恩師もあと数年で定年を迎えるとのことであった。そんな先生がひそかに私の事を心配して、私の今後のことについて何かとアドヴァイスをくれたのだった。中学生当時は特に厳しい先生だと感じていたが、その優しい言葉に驚きながら感動して聞き入ったのだった。

大根には青首とか白首とかいろいろな種類があるように、ほうれん草には、春蒔きとか秋蒔きとかの種類があってね、秋蒔きの収穫は寒い時期になるが寒さに耐えようと甘みが増すのだよなどと説明された。雪の白さの中に青々としたほうれん草が元気よく伸びているのが見えた。先生は雪に覆われた畑を指さして何かつぶやかれた。

君見たまへ菠稜草が伸びてゐる　路郎

川柳塔鑑賞

同人吟　水野黒兎

―6月号から

明日から歩こうと毎日思う
谷口　義

百歳までは生きたくないという百一歳
能勢利子

この堂々としたとぼけ具合が絶妙で、老人力万歳である。見習いたい境地。

古里は眼裏にあり梨の花
牧野芳光

梨の花、杏の花、柿の花など果物の花にはなぜだか郷愁を誘う雰囲気がある。幼い頃育った里にはそれぞれ土地特有の果樹があり、子供は秋の実りを楽しみに果物と一緒に育った。

空港でハグもしないでやあと子が
成田雨奇

欧米のハグの習慣とは大いに異なり、日本では数年ぶりに会ってもハグなんかなしに「やあ」の一言で片付けてしまう。しかし若い世代では徐々にハグの仕方も様になってきたように思える。

私の時計狂うし止まる隠れはる
古今堂蕉子

時計も眼鏡も時として三文判もかくれんぼが上手で困ったことである。大阪弁の「隠れはる」がうまいなあ。

当たり前だった時計が狂いだす
柳田かおる

この句の時計は世の中の生活自体を、また自分の生活習慣を意味しているのでしょう。コロナ禍で如何に生きるかを模索している句。

阿蘇野焼きついでにコロナ焼くという
杉野羅天

そうか、こんな野焼きなら阿蘇だけでなく全国で火の手を上げてほしいですね。

学芸会僕は立木のその三で
稲見則彦

孫の世代の学芸会では浦島太郎も乙姫さまも三人が共演するとか。そんな時代に孫もヒラメのその三だったらしい。

巣ごもりにエールをくれるねこやなぎ
川名洋子

薫風先生の句に「猫柳　亡き人ばかり思わるる」があります。魂の沈潜する思いの句ですが、洋子さんのねこやなぎは暗い世の中にキラキラと輝いて春ですよとエールを送ってくれている。

早ばやと出掛けワラビの秘密場所
関本かつ子

マツタケもアケビもそしてヤマユリの咲く場所もみんな秘密の場所である。都会生活では味わえぬ醍醐味。季節季節の楽しみに満ちた秘密。

この頃は夫の母になっている
齋藤さくら

ほらほら餅はもっと小さくしてよーく噛まなきゃダメですよ。お酒は一合だけと言ったでしょ、なんべん言ったら分かるの、あ～あ世話がやける。

レゾンデートル語る一句を詠いたい
澤井敏治

自分の存在理由、存在価値を立証するような一句を残したい。何百何千の句の中に一句でもいいからそんな句を残したい。すべての川柳人の悲願である。

神さまの配慮休みを下さった

松　尾　美智代

この句を含め掲載5句、何らかの痛手か心配事に立ち向かっている句ばかりである。一陽来復、また元気を取り戻すことができますように。神は配慮を忘れない。

○○○マスクで翳む視力表

中　山　春　代

視力検査のランドルト環を取り入れた川柳を初めて読んだ。マスクで視力が影響されるというのもユニークな視点ですね。

満開の桜バスから観ておわり

山　田　葉　子

買い物かいつもの医院への道筋か、ともあれ花見とは言えぬまでも今年の桜を見届けることが出来ただけでも可とする。自然の織りなす季節の風景に感謝。

ホットラインのように柳誌が届けられ

吉　田　陽　子

在宅編集編集長はスゴすぎる

大久保　眞　澄

同感である。編集部や、配送部、句会部など関連の役員のご奮闘に感謝あるのみ。全国の誌友、同人の皆様のご無事を祈るとともに早期収束を願うばかりです。

リフレイン巴里が私を呼んでいる

きとう　こみつ

仏蘭西が好き、巴里が好き、オーシャンゼリゼ、サクレクール、ムーランルージュ、ノートルダム…ああキリが無い。折角だからリフレインではなく、アンコールユンヌフォアとでもすればもっと巴里が近づく。

口中に春をひろげる木の芽あえ

山　口　美　穂

いただいた寿命と歩く春帽子

岸　桂　子

「口中に春を広げる」とか「寿命と歩く」など素敵な表現に春の喜びと元気をいただくことができました。

賞味期限など気にしない戦中派

永　田　紀　恵

戦時中に青春期を過ごした人が戦中派。物不足の時代に鍛えられた人にとって多少の期限切れよりも勿体ないの感覚の方がずっと強いのです。

巣立つ子の荷に針箱を入れておく

後　藤　美恵子

昭和の母の思いやり。針、はさみ、指ぬき、チャコ、数種類の糸などを入れている映画の手元のクローズアップ。

学校の桜見るため遠回り

山　田　耕　治

毎年咲いてくれる桜、あの桜の今年の咲きぶりが気にかかる。ちょっと遠回りだけど見に行く。ああ今年も無事咲いてくれたと愛しい気持になるのです。

役所から封書さくらは満開に

森　茜

役所から通知が届いた。市民税の通知か、それともワクチン注射の案内か。ああ今年も桜の四月になったのかの感慨。

ヤバイなあ食べてるだけの自粛です

江島谷　勝　弘

川柳が自粛の鬱を掬い取る

石　田　ひろ子

数独とスマホが自粛リードする

大　島　ともこ

外出自粛ネットサーフィン上手くなる

片　山　かずお

アニマルとお笑い番組見る自粛

北　村　賢　子

巣ごもりで小遣いタンス貯金する

佐々木　満　作

未曾有の時節柄いかに自粛の時間を活用するか、参考にさせていただきます。

水煙抄鑑賞

—6月号から

福西茶子

この句よりオレの句いいと愚痴る没

瀬島流れ星

全くそのとおり。この句を抜かないなんて選者のセンスを疑うと、思ってあきらめましょう。

私には読めぬ筆だが美しい

花岡順子

流れるような筆の文字。芸術の域であればえるほど読めません。でも美しい。

人間を脱皮してます座禅堂

延寿庵野鷺

物音一つしない座禅堂。雑念を捨てて心を無にする。無心になることは難しい。

ややこしい事は言わずにハイとだけ

郷田みや

にこにこと返事だけして従わず…どなたかの川柳がありました。ハイは丸く収める最上のテクニックですね。

当分は目力だけで話します

大沢のり子

マスクしていてはチャームポイントの口が見えません。目力があれば自分の心も相手の心も通じ合えるかも…

老害と気付かず椅子を恋しがる

室田行久

立っているのも正座するのもつらい。ついつい椅子を探してしまう。なるほどこれが老害ですか。

ワクチンを打てば自由になれるかな

加藤佳子

コロナで世界中の人の生活が一変してしまいました。旅行にもカラオケにも行けない。金と時間は余っているのに…

テレワークもう一部屋が欲しいです

尾崎文子

毎朝の通勤がなくなって楽になったのはいいけど、自宅はオフィスに早変わり。この際に一部屋増築しますか。

コロナかとヒヤリ一夜で熱は引く

鳥居宏

ついに来たか！イヤ臭いも味覚もある。この時期に熱が出るとやっぱり怖い。慌てずに様子を見られてよかったですね。

それ以上言うなお酒が不味くなる

上山堅坊

私はお酒が飲めませんが、仲間で盛り上がっているときに、水を差すような話題はやっぱりノーサンキュウですね。

体重計片足上げて息止めて

大浦福子

診察室で「体重計りましょう」と言われたら「しまった！風船持ってくればよかった」と思います。同感です。

夫には強い母親ついてます

東敏郎

親は子供のためなら、蛇にも蛇にもなれると言いますが、結婚してからもこの威力を発揮されるのは考えものですね。

生かされているのに愚痴をたらたらと

坂本星雨

コロナ禍であっと言う間に命を奪われた人がたくさんいます。今ある命に感謝感謝です。

仲間ゆえだから貸したくないお金

定松宏枝

お金を貸すときは、神様みたいに思われるけど、催促したとたん鬼に…

エッセイ

さくらのこえ

古今堂　蕉　子

朝日新聞に詩集『さくらのこえ』の紹介が載っていた。詩を書いたのは寝たきりで喋ることのできない堀江菜穂子さん。英語に翻訳したのは生後半年で筋肉低下の病気になり、現在は車椅子で人工呼吸器を付けておられる神崎優花さん。神崎さんは東京女子大英文科を首席で出られIBMで翻訳のお仕事をされている。

一部ご紹介したい。

「こえなきひとたちのうた」

くちがきけず　いしのそつうの　で
きない人たち
その人たちのうたを　きいてほしい
みみでなく　心のおくで　きいてほ
しい
みんなしっかり　うたってる
こえがなくても　うたってる
そのうたは　おとではなく　くうき
のしんどう
きっとあなたの心も　ふるえるから

「ひびいつもつみかさねていくこと」

わたしたちのまいにち
ひびいつもいのちが　へっている
ひび、いちにちづつ
かくじつにいのちは　みじかくなっ
ている
そのかわりにひびつみかさなってい
るものもある
それはわたしのいきたあかし
いきたあかしはひとつではない
かぞくとのきずな　そしてたくさん
のし
このあかしがふえるということは
いのちがみじかくなることいじょう
に
じゅうようなこと

「あたりまえ」

あたりまえのことを
あたりまえにすることは
けっこうむずかしい

人によって
あたりまえがちがうから

あなたにとってあたりまえでも
わたしにとってはきせきのようなで
きごと

だから
あたりまえとかんたんにきめないで

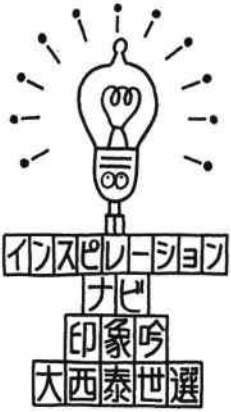
菜穂子さんの詩に優花さんの英語の翻訳がついているが、これらの詩に感動した着物工房の鈴木冨佐江さんが発刊されたものである。

詩の数々を読みながら心が震えた。思えば私は何不自由ない環境に育ちながら、加齢による難聴、足腰の痛み、目のかすみなど、今まで出来たことが、ひとつづつ奪われていくことを嘆いていた。

詩集『さくらのこえ』を読んで心が洗われ、今あるものに感謝し、今出来ることを喜んで、日々を過ごさねばと、つくづく自分の不遜さに恥じ入った。

堀江菜穂子さん、神崎優花さんの純粋な人生に対する真摯な姿勢、お気持ちを皆さまにもお伝えしたくて書かせて頂いた。もっとお読みになりたい方は左記までご連絡ください。

税込み一冊500円　送料100円
問合せ先　090—3691—0055
さくら着物工房



（投句２０８名）

梅雨の中休み、暑いでーす。年々暑さが堪えます。

ワクチン接種された方もいらっしゃると思いますが、私の住んでいる大阪はまだまだで、テレビで見る大型接種会場なんてどこの話や、みたいな感じ。

打ち間違いのトラブルなんかを耳にすればオソロシイですが、それでも状況が改善されて、皆様に会える句会、大会が再開されることを願うばかりです。

では、ナビを。

弘前市　高瀬　霜石

熱血漢ですな出世は無理ですな

（評）正義ばかりを振りかざす青いヤツは出世できまへン。なんて言わせる世の中なんか大キライ！

米子市　吉田　陽子

正解がたくさんあって迷い出す

（評）色んな意見があってそれぞれが間違いではない。それが人生だなんて言われても、ねえ。

河内長野市　中島　一彌

ジグソーの最後のピース嵌らない

（評）完璧にやり遂げたつもりでも最後にうまくいかない、これって誰がいけないのよオ。

藤井寺市　鴨谷瑠美子

すれすれのところで善人を保つ

（評）これって身につまされる人、多いと思うワ。ふとしたことで線を跨がないとはかぎらないから。

神戸市　冨永　恭子

点線の通りに折ったはずなのに

（評）自分では指示通りと思っても、どこかが微妙にずれてくる。反対にだから人生面白いとも言えます。

丹波篠山市　酒井　健二

軸足がどっちだったかふと迷う

（評）重きを置かなかった方が知らないうちに主体になっていたりする、気付いてからが新しい世界の始まりかも。

枚方市　栃尾　奏子

誠実な方とお見受けする折り目

（評）誠実なお方は折り目をはみ出したりは致しません。また、面白いお方とも限りません。

東京都　川本真理子

知らないふり騙されたふり泣いたふり

（評）ふり、ふり、ふりはオンナの得意分野でござります。でも、殿方はきちんと騙されてくれはります。

藤井寺市　鈴木いさお

居眠りをしている内に潮が引き

（評）居眠りから覚めると視界が一変、視界だけならいいんですが、あらら、立ち位置までもが一変、エライこっちゃ。

池田市　上山　堅坊

きしむ音大きすぎるぞ日本丸

（評）コロナにワクチン、強行突破が濃厚のオリパラ、あれやらこれやら、もうぐちゃぐちゃやでぇ。

橿原市　居谷真理子

大人には読めない宝島の地図　豊中市　水野　黒兎

平泳ぎはじめて出来た遠い夏　弘前市　福士　慕情

折り紙の舟が運んで来たジョーク　土佐清水市　辻内　次根

目を閉じた方がはっきり見えるもの　大阪市　石田　孝純

「たこ焼き」と「鯛焼き」だった合言葉　米子市　八木　千代

手品師も残り時間に気がついた　鳥取市　前田　楓花

船頭が二人行き先決まらない　河内長野市　梶原　弘光

ジャイアンにのび太スネ夫が居て平和　箕面市　出口セツ子

宇宙行く日迄長生きする予定

海を見に行きたし渚走りたし　大阪市　田中ゆみ子

もう一度確かめたいの展開図　松山市　郷田　みや

進むべき道見つからずまだ徒食　可児市　板山まみ子

点と線マークは赤に決めましょう　沖縄県　宮　すみれ

リーダーが居ないまんまで走り出す　大阪市　坂　裕之

辞書でみつからないどう読もうこの字　豊中市　松田蟻日路

紙の舟乗って人生身が軽い　熊本市　杉野　羅天

バツイチだが出雲大社へ行こうかな　大阪市　江島谷勝弘

騙されぬ自信が仇となりました　香芝市　大内　朝子

酒売れず仕込み半分減らします　三田市　村田　博

君の待つ港へ着けと風を待つ　堺　市　矢倉　五月

騙される側に座っている男　佐賀県　真島久美子

往復の切符は売らぬ騙し船　唐津市　仁部　四郎

手弁当にしたら友だちが増えた　青森県　月波　与生

凪だから体いたわる良いチャンス　防府市　坂本　加代

船上の母はおさげの女学生　寝屋川市　平松かすみ

どうしよう鶴が折れなくなっている　松山市　柳田かおる

何をする為に生まれてきたのかな　神戸市　奥澤洋次郎

キリトリ線決断せまる夜の海　箕面市　酒井　紀華

折り紙の途中で気付く片想い　鳥取市　副井ゆたか

責任は対角線に居るあなた　津山市　高橋由紀女

男手も孫の手も欲しステイホーム　西宮市　福島　弘子

大波も小波も越えて息が合う　尼崎市　藤田　雪菜

海までの道を探している途中　大阪市　平井美智子

指先を使うと脳にいいらしい　犬山市　金子美千代

特売場先に握ったのはわたし　河内長野市　森田　旅人

困ったら白紙に戻るわたし流　堺　市　内藤　憲彦

知らぬふりとてもお上手なんですね　尼崎市　近兼　敦子

バックパッカー折紙もしのばせて　大阪市　石橋　直子

我こそはラジオ体操金メダル　池田市　太田　省三

薄っぺらなままで大人になったんや　松江市　石橋　芳山

さあ船出コロナの居ないあの国へ　大阪市　柴本ばっは

騙された顔で五月の風に乗り　三木市　山口ヨシエ

なんちゃってなるようにしかなりません　松山市　栗田　忠士

尖んがっています笑っておりません　鳥取市　福西　茶子

寝起きの頭三面記事で助走させ　奈良市　高橋　敬子

問題が多くて仏にはなれぬ　笠岡市　藤井　智史

停船の合間を縫ってクイズショー　鳥取県　本庄　汪

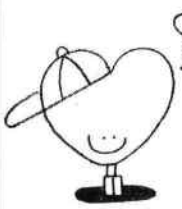
鯉幟黄砂を避けて海に居た　尼崎市　清水久美子

筋書の通り運んで行くドラマ　大阪市　高杉　力

だまされず済んだやれやれひとり言　西宮市　緒方美津子

9月号発表

(7月15日締切)



(平本　霧石人　画)

柳箋に2句

二〇二一年（令和三年）

五月本社誌上句会

投句者245人

兼題「覗く」

川本　真理子　選

笑い声が聞こえるほうへ散歩する　大阪　立蔵　信子
覗いたら春を写した水溜まり　大阪　森　廣子
覗きたい大きな笑い声の窓　大阪　片山かずお
覗き見る隣の芝は今日も青　兵庫　近藤　勝正
病室の朝のカーテン瀬戸の海　兵庫　稲角　優子
レントゲン覗くお医者の目を覗く　大阪　伊達　郁夫
胃カメラに覗かれました戦跡　兵庫　敏森　廣光
人間に尊厳は無い内視鏡　奈良　板垣　孝志
読めないのに横目で覗く医者カルテ　大阪　齋藤奈津子
覗いてもカルテの文字はパピプペポ　大阪　原　洋志
穴あれば覗きたくなるＤＮＡ　兵庫　永田　紀恵
怖いけど覗いてみたい穴がある　大阪　山野　双葉
覗いたらもう後戻りできません　大阪　廣田　和織
見られたいポーズで待っているあなた　大阪　栃尾　奏子
ちょっとだけあの世覗きに行ってくる　愛媛　黒田　茂代
誰からとスマホのメール覗かれる　奈良　木嶋　盛隆
二要素認証を解いて覗く愛　岡山　藤井　智史
ライバルに含み笑いで覗かれる　大阪　酒井　紀華
覗き込む二枚舌の喉の奥　兵庫　みぎわはな
初恋のむかしを妻に覗かれる　岡山　大杉　敏夫
覗くなと貼り紙がある子供部屋　兵庫　山田　耕治
孫の部屋覗くと宇宙人がいた　大阪　石田ひろ子
大事ない亡母が覗いてくれた朝　兵庫　吉村めぐみ
手鏡を覗けばいつも亡母が居る　和歌山　木本　朱夏
疲れた時覗く鏡に母が居る　東京　島村　青窓
覗いてみたい合わせ鏡の裏の裏　兵庫　中岡千代美
足りるかなちょくちょく覗き見る財布　大阪　鈴木　栄子
それとなく援助してやる娘の暮らし　兵庫　谷口　修平
ペンギンの姿勢のままで父覗く　大阪　くんじろう
ゆるキャラにボクがじっくり覗かれる　大阪　上山　堅坊
お月さんなら許せます露天風呂　和歌山　三宅　保州

冬の虹人恋う老いを覗いたか　徳島　小畑　定弘
来たからは杖を頼りに股覗き　大阪　吉村久仁雄
居酒屋を覗くだーれもいない椅子　鳥取　大羽　雄大
引きずった影から淋しさが覗く　広島　田辺与志魚
私を覗くと深い深い沼　大阪　中村　恵
鍵穴を覗くとボクの幼き日　広島　小川　道子
俯いた眼を覗いてはなりません　大阪　太田扶美代
覗いてはならぬピエロの舞台裏　大阪　髙杉　力
独り言の中で本音を覗かせる　大阪　村上　玄也
言葉尻上げて心を覗かれる　大阪　西出　楓楽
失言は心の中にある本音　大阪　片岡智恵子
交差点で横のスマホを覗く癖　兵庫　上野多恵子
若者の世界をテレビから覗く　鳥取　新家　完司
日に三度郵便受けを覗く役　兵庫　堀　正和
通帳を覗いて明日を確かめる　大阪　平井美智子
ベロ出して覗き続けていた銀河　静岡　中前　棋人
老骨に鞭打ちＡＩの世を覗く　大阪　山本希久子
仕舞ブロ覗きこんでる月明かり　大阪　富田　保子
鼻歌を止めたら風呂を覗かれた　大阪　太田　省三

未来から覗けば今がチャンスかも　大阪　藤村　亜成
覗くのはよそう堂堂ノックする　島根　岸　桂子

佳

おばあさんを覗いてくれるおばあさん　大阪　谷口　義
節穴が何故かわたしの目の高さ　大阪　髙田美代子
三人になると本音が覗き出す　奈良　加藤江里子
死角から人差し指が覗いてる　兵庫　生田　頼夫
黒山を覗くキリンの好奇心　大阪　初代　正彦

人

顔色で心覗いてくれた母　奈良　大内　朝子

地

火吹竹覗いて子等の小宇宙　大阪　津守　柳伸

天

人間のロマン覗いた花筏　鳥取　大前　安子

軸

潜望鏡同士目が合う凪の海

兼題「腕」

山田　耕治　選

政治家の様にならない腕タッチ　奈良　宇賀　史郎

腕力を試されている瓶の蓋　青森　福士　慕情

生半可腕を試して見たく成る　大阪　森　廣子

エアーハグ君の温みを腕が知る　大阪　吉村久仁雄

若き日に道頓堀で組んだ腕　埼玉　前田　洋子

餌台巣箱と腕上げていく少年　大阪　徳山みつこ

道聞くと腕いっぱいのみかん呉れ　大阪　増原　文子

じいちゃんが本気になった腕相撲　兵庫　羽奈　和子

腕相撲孫がじいじに手加減を　奈良　飛永ふりこ

料理するひとり暮しで上げた腕　宮崎　惠利　菊江

皿洗いかなり手早く成って来た　兵庫　櫻井　崇史

ステイホーム次第に上がる家事の腕　兵庫　松倉　正美

両腕で包むかけがえない家族　兵庫　冨永　恭子

両腕を広げて母は待っている　大阪　伊達　郁夫

腕まくりそっと下ろして今日終う　兵庫　上田ひとみ

気合いだけ見せておこうと腕捲り　大阪　藤田　武人

お好み焼き作る父さん腕まくり　大阪　宇都満知子

父さんも若い頃はと力こぶ　大阪　高杉　力

幸せを汗で生みだす父の腕　兵庫　稲角　優子

父の腕借りてくるりと逆上がり　兵庫　生田　頼夫

腕くんで歩き介護とまちがわれ　大阪　大浦　初音

腕を組む夫婦にさせたフルムーン　徳島　小畑　定弘

旅に出て腕を組むのも久しぶり　兵庫　吉村めぐみ

腕前はともかくやる気買ってやる　大阪　片山かずお

時刻む夫の形見の腕時計　大阪　齋藤奈津子

世界中の腕がワクチン待っている　大阪　北村　賢子

ワクチンの針を待ってる皺の腕　北海道　三浦　強一

腕立て伏せコロナ終息する日待つ　大阪　藤原　大子

吊り皮にだらりと休暇明けの腕　大阪　藤井　則彦

吊り皮を握り仕事の鬼でした　青森　高瀬　霜石

ロボットも師匠の腕にまだまだや　大阪　奥村　五月

ロボットがベテランの腕もぎ取った　大阪　柿花　和夫

職人は口より腕に喋らせる　大阪　西出　楓楽

雑用をさばく腕ならほしくなる　大阪　立蔵　信子

仕方無く腕を組んでいる弱視　大阪　平松かすみ

介護十年左の腕が太くなり　兵庫　緒方美津子

子の帰省腕をふるって親子丼　奈良　山下　純子

腕に縒り久方ぶりの子の帰省　愛媛　黒田　茂代

たぷたぷの腕半袖はもうやめる　兵庫　中岡千代美

力コブ僕の人生詰まってる　石川　堀本のりひろ
母譲り腕に覚えの煮転がし　和歌山　木本　朱夏
抱く腕を信じ切ってる老母の息　兵庫　みぎわはな
介護する腕に食い込む母の爪　大阪　澤井　敏治
両腕で包めば母が壊れそう　大阪　今井万紗子
腕組みをするだけ所詮傍観者　奈良　安福　和夫
昭和史の母腕っぷし強かった　大阪　米澤　俶子
双子抱くママに大きな力コブ　兵庫　野口真桜子
細腕で夫支えた妻の自負　大阪　川本　信子
腕力も強くなります老介護　広島　元吉　慶子
腕の中まだ騙されていたいのだ　大阪　栃尾　奏子
腕力の弱いわたしにペンがある　岡山　古山はつ子
涙ぐむ父と腕組むウエディング　大阪　石田ひろ子

佳

ロボットを二代目にする定食屋　静岡　中田　尚
ＩＴ化役に立たない力瘤　愛媛　柳田かおる
無茶するな腕を掴んでくれた友　大阪　小野　雅美
腕まくりしただけの一日だった　大阪　谷口　義
躓いたわたしにさっとのびた腕　奈良　安土　理恵

人

抱きしめて抱きしめられて泣きました　大阪　島田　明美

地

財産はないが昭和の力瘤　鳥取　竹村紀の治

天

組んだ腕無口な父の答え待つ　奈良　加藤江里子

軸

腕あげた夫片手で卵割る

兼題「軽い」　木田　比呂朗　選

いつやるの今でしょなんて軽く言う　和歌山　三枝眞智子
軽い咳ひとつで凍るバスの中　鳥取　竹村紀の治
軽いはずのマスクが重く口ふさぐ　岡山　大石　洋子
ノホホンとコロナの空気吸うている　京都　山田　葉子
軽口を叩いて空気重くする　大阪　西出　楓楽
軽口を叩き合ってるうちが華　京都　清水　英旺
厳重な処分官舎で三日寝る　奈良　板垣　孝志
スマホから軽いジョークや軽い嘘　大阪　山野　寿之
隣り組軽いジョークも難しい　奈良　小西　貞子

ジョークだよそのひとことで片づける　兵庫　上田ひとみ
サギ電話を軽く躱したのが自慢　大阪　柿花　和夫
孝行のはしくれ軽い布団買う　兵庫　山田　耕治
すぐズレる高いホテルの羽布団　大阪　くんじろう
軽く飲むつもりがいつもはしご酒　兵庫　永田　紀惠
駅裏の蕎麦屋に軽い義理がある　大阪　原　洋志
自粛中我慢できずに夜の街　兵庫　斎藤　隆浩
軽やかな味だがお酒ですよこれ　奈良　居谷真理子
陽が落ちてネオンへ向かう軽い足　青森　福士　慕情
紙一枚されど名刺は軽くない　大阪　松岡　篤
紙一枚ハンコ一つの重さ知る　大阪　増原　文子
青春の軽いサイフに詰めた夢　大阪　水野　黒兎
軽くても苦楽見てきた古財布　岡山　岡本　余光
親分肌財布はいつもからっぽだ　大阪　柴本ばっは
軽い恋わたしのサプリメントです　大阪　山岡冨美子
軽率な恋がSNSで来る　兵庫　谷口　修平
責任を果たしてほっと軽い肩　奈良　大内　朝子
巣立たせて凝りがほぐれた親の肩　兵庫　萩原　狸月
飛ぶのなら今だと軽く言う他人　大阪　小野　雅美

お気楽な質で何でも軽いノリ　大阪　片山かずお
同窓会生きとったかと軽いジャブ　大阪　中島　一彌
ほなさいなら軽い別れが重さ増す　大阪　吉村久仁雄
あっさりと水で薄めている言葉　大阪　中村　惠
僕の脳どこ叩いても軽い音　大阪　岩崎　公誠
軽い腰妻に重宝されている　鳥取　夏目　一粋
紐が要る吹けば飛ぶよな俺だから　兵庫　宗　和夫
安請け合い夫は先の先読まぬ　大阪　佐々木満作
すいませんで何でも熟す徳な人　兵庫　太田としお
合格し軽く素通り天神社　奈良　長谷川崇明
軽症と告げてる医者の重い口　大阪　藤井　則彦
お調子者ノリで周りを慌てさせ　大阪　大島ともこ
ふわふわと妻と綿毛が今日も飛ぶ　岡山　工藤千代子
弱点を晒すと軽くなる呼吸　大阪　村上　玄也
成るがまま余生気軽に生きている　和歌山　佐藤　まき
遺言を書いて心が軽くなる　兵庫　近藤　勝正
空気より軽い男に騙される　大阪　伊達　郁夫
やさしさに触れると石だって浮くの　愛媛　柳田かおる
やわらかいゲンコで効き目無さそうだ　兵庫　冨永　恭子

ウインクの絵文字で愛を告げてみる　兵庫　岸田　万彩
タンポポの綿毛になって逢いに行く　大阪　島田　明美
フェイスブックいいねいいねの花が咲く　大阪　髙杉　力
軽いのりで入りどっぷりはまる趣味　大阪　大浦　初音
百歳が増えて百歳軽くなる　岡山　古山はつ子

佳

軽トラの迎えいやがる変声期　岡山　藤澤　照代
この話あいつにだけは止めとこう　大阪　内藤　憲彦
プラゴミと同じレベルの議員たち　青森　髙瀬　霜石
断捨離したら羽生えました私　大阪　山本希久子
潤滑油差せばこの戸もこの通り　青森　稲見　則彦

人

肩書きが取れた名刺の自然体　広島　笹重　耕三

地

さらさらと茶漬けで済ます旅帰り　和歌山　木本　朱夏

天

駅一つ歩いて今日も身が軽い　和歌山　石田　隆彦

軸

ご自分にガースーなんて薄っぺら

兼題「ややこしい」（詠み込み不可）　くんじろう　選

頼んでもいない一肌脱ぎたがる　岡山　藤澤　照代
妻になりそこねて豚饅になった　大阪　平井美智子
天国行きの切符握って逝く地獄　大阪　吉村久仁雄
ゴミ分別慣れてきた頃お引越し　兵庫　横田　次郎
小兎のメスかオスかがややこしい　鳥取　田中　重忠
キラキラネーム並の辞書では読めません　奈良　大久保眞澄
ブロッコリーの粒を数えるピンセット　大阪　川本　信子
まだ始末ついてへんのかあの話　奈良　安土　理恵
「花粉症」と書いたマスクで咳してる　大阪　齋藤奈津子
歯科内科予約日迷う接種券　大阪　徳山みつこ
円周率覚えてんねん黙ってて　大阪　澤井　敏治
蜘蛛の巣になった家系図ここで切る　山口　坂本　加代
慰めの言葉が傷つけたらしい　兵庫　米田利惠子
スマホ持ち電話以外は使えない　和歌山　石田　隆彦
ボールペン替芯種類多すぎる　鳥取　新家　完司
ポケットがいっぱいあって見つからん　大阪　藤村　亜成
網の目の地下鉄で見失う明日　東京　川本真理子

三人の足が縺れている炬燵　大阪　山野　寿之
アナログとデジタルに置く仕切り板　大阪　美馬りゅうこ
変異株どうやらかなり食わせ者　大阪　初代　正彦
丸なのによってたかって多角形　富山　伴　よしお
年下の義母はヤンキー風の街　大阪　内田志津子
褒められぬ人生すばらしき世界　鳥取　斉尾くにこ
込み入った話はアブサンで流す　広島　笹重　耕三
用なしになった乳房は重いだけ　大阪　増原　文子
効いたのは酒か薬か説教か　大阪　石田　孝純
嘘まことどちらも同じ包装紙　大阪　山本希久子
親のなれそめだけは聞いたらアカン　兵庫　上田ひとみ
口挟みごった返して帰る奴　兵庫　幸田　厚子
もしかして惚れる惚けるは陸続き　大阪　島田　明美
困るのは妙に行儀の良いやんちゃ　大阪　中村　恵
めんどくさい人に好かれるテレパシー　神奈川　加藤　佳子
スマホで登録あと少しで自爆　大阪　松田蟻日路
レジ打ちの最中「それは要りません」　大阪　江見　見清
7人家族ホールケーキを誰が切る　奈良　山下　純子
ガガガガーん「今日は何日何曜日」　大阪　坂上　淳司
蒙古語に訳して計算尺で処理　大阪　井上　一筒

関西のたぬきは関東のきつね　大阪　中島　一彌
電子音みんな似ていて間違える　大阪　松尾美智代
ウメ地下は出口どこだかわからない　大阪　岩崎　公誠
整列しているピーマンとパプリカ　島根　石橋　芳山
乃木坂 けやき坂 ＡＫＢ Ｎｉｚｉｕ　大阪　宇都満知子
大阪湾きれいになって困ってる　兵庫　岸田　万彩
こみ入った話になるとすぐトイレ　大阪　藤井　則彦
頭丸めはった子細は聞かんとこ　和歌山　木本　朱夏
賞味期限なんて私は信じない　大阪　柴本ばっは
行き先の違う切符を買った妻　大阪　穐山　常男
飲む前にもう泣いている泣き上戸　大阪　今村　和男
イニシャルが思い出せない日記帳　大阪　小野　雅美
愛してるでも愛人と呼んじゃダメ　大阪　谷口　東風
分からんが分かりましたと直ぐに言う　大阪　穂口　正子
国籍は日本カレーもラーメンも　青森　髙瀬　霜石

佳

パスワードついに一覧表にする　兵庫　羽奈　和子
ナイジェリアは英領アルジェリアは仏領　大阪　鈴木いさお
父の名を一字もらった子が五人　兵庫　山田　耕治
説明がしにくい駅で待ってやる　大阪　鈴木　栄子

生臭いままだし芯は曲げないし　兵庫　冨永　恭子

人

助成金頂くまでのお手続き　鳥取　竹村紀の治

地

時間差で十五種類の薬飲む　兵庫　清水久美子

天

たかが茶でございませんかお家元　奈良　居谷真理子

軸

ミミズクのミミミミですかハネですか

兼題「奇　跡」

新家　完司　選

ボクを生んだ地球を生んだビッグバン　静岡　中前　棋人

赤紙が来た代に生まれいま米寿　大阪　東　敬朗

ご先祖にガダルカナルの生き残り　大阪　西沢　司郎

軍国の少年命永らえる　佐賀　坂本　蜂朗

空襲に何度も遭って無事だった　大阪　樋口　眞

戦争を知らないままで古希迎え　大阪　高杉　力

三元号戦争知らず生きている　大阪　穂口　正子

平成に戦なかった日本国　大阪　小野　雅美

シャイですが子ども三人孫五人　大阪　江島谷勝弘

十年目産声あげたのは三ツ子　大阪　佐々木満作

五臓六腑いやいやせずによく動く　和歌山　小谷　小雪

父子孫揃って同じ誕生日　大阪　中島　一彌

新しい朝が毎日来る奇跡　大阪　廣田　和織

車だけ瑕ついただけの事故　大阪　宮崎シマ子

遊行期をゆったり毎日が奇跡　大阪　山岡冨美子

傘寿の軌跡家事が楽しくなった夫　大阪　山本希久子

八十年入院0で元気です　奈良　長谷川崇明

ほどほどの距離で妻とは五十年　兵庫　斎藤　隆浩

奇跡だと思うあなたに逢えたこと　大阪　栃尾　奏子

吐血の老猫生還夢のよう　埼玉　前田　洋子

カーナビの知らぬ抜け道まだ覚え　島根　伊藤　寿美

面会謝絶の夫にスマホで会えました　兵庫　藤岡　りこ

ステージ4奇跡起こして丸五年　大阪　齋藤奈津子

九回裏ステージ4が消え去った　大阪　原　洋志

浄土への誘いを断ったICU　兵庫　生田　頼夫

霊界に待ったをかけた執刀医　奈良　菱木　誠

エクモから解放された卒寿翁　大阪　坂上　淳司

自分の事自分でやると百一歳　兵庫　能勢　利子

警察に保護されていたうちの犬　兵庫　上田ひとみ
人生初そして最後のモテ期かも　大阪　大島ともこ
投げつけたルアーに鯛が小躍りだ　大阪　柴本ばっは
地球こそ奇跡酸素も水もある　岡山　藤澤　照代
月の石キラリ砂漠でみーつけた　大阪　藤田　武人
事と次第で奇跡を起こす諭吉さん　大阪　西出　楓楽
万病に効くとメリケン粉の湿布　大阪　平井美智子
この俺に孝行息子居る奇跡　兵庫　萩原　狸月
わたしにも煮抜き卵が作れたぞ　石川　堀本のりひろ
鍛え上げ奇跡を起こすアスリート　大阪　片山かずお
難病を越えて池江がチャンピオン　愛知　山本三樹夫
ゴビ砂漠オアシスひとつ増えた地図　兵庫　野口真桜子
泣き声の瓦礫の下の命抱く　大阪　石田ひろ子
見えぬ目が見える奇跡を待つ移植　大阪　松尾美智代
毛虫から色あざやかな蝶となる　大阪　水野　黒兎
私がこの世で脈を打っている　静岡　中田　尚
人間に生まれあなたと巡り逢う　奈良　木嶋　盛隆
こんな私にあなたが振り向いた　兵庫　中岡千代美
奇跡だったと気づかないまま二人　奈良　大久保眞澄

シナリオの無い人生の綱渡り　大阪　石田　孝純
西行のように死ねたらもうけもの　青森　髙瀬　霜石
キミに似た薔薇と出会った散歩中　大阪　立蔵　信子
バラが咲き牡丹が咲いていて空家　鳥取　斉尾くにこ
轢かれたが守り袋が身代りに　兵庫　山端なつみ

佳

叩いたら髪の毛ふえてきた気配　大阪　澤井　敏治
奇跡かな夫がパンツ干している　岡山　工藤千代子
鉄釜の蒸気で走る鉄の馬　大阪　くんじろう
ケトルの叫びで惨事を免れる　兵庫　清水久美子
この僕の娘スカウトされました　大阪　鈴木　栄子

人

あの人の前で切れたの靴の紐　兵庫　みぎわはな

地

ミジンコで生まれなかったのが奇跡　和歌山　木本　朱夏

天

恐山ビートルズすら降りてくる　青森　**稲見　則彦**

軸

自損事故マイカー廃車ぼく無傷

柳壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

川柳塔みちのく（青森）　稲見　則彦報

億単位スーパーコンが弾き出す　友二
ひとつまみ指の太さで変わる味　英子
1mmでも日々成長を続けたい　義明
目分量でも美味けりゃいいさ　母の味のぶよし
人間も単位で言えば動物園　柳子
手を伸ばす一人前という単位　規子
ぐらっと来たらマグニチュードに目を凝らす　洋子
リモートで単位修得夢つなぐ　初枝
単位不足の私にコロナ振り向かず　龍馬
背比べしてた柱の傷の跡　重虎
一俵は四斗言い張るははでした　ふさゑ
胡麻をすり教授おだてた一単位　隆樹
一升びんかかえる写真セピア色　吹喜
円満は小さじ一つの思いやり　美鈴
洋間でも畳の数で広さ知る　孝子
勝手には入れぬ丑の刻参り　ちづ子
四十路越し一寸詰めた袖の丈　ひろ
一杯のホットワインは風邪退治　和香子
ゼロ一つ増えて溜息漏れてくる　ひとし
二杯目で告白し出す大ジョッキ　風来坊
尺貫法親父と生きる曲尺　慕情
月が出て詩人になってゆくわたし　黙人
わたくしの数値執行猶予付き　霜石
だからさぁ東京ドームいくつなの？　則彦
横断幕まだまだ不安花祭り　真由美
決断を横から口を挟む妻　一呑
ボランティア趣味の会など生きがいに　京子
脇見せず我が家よく見て円満に　久美子
ツンと澄ましあなたの横へ遠い過去　澄子
人間陶冶の道行くいい仲間　劦

大山滝句座（鳥取）　新家　完司　報

小康よずっと保てよ暴れるな　幸子
ビッグバンのずっと昔もあったはず　富隆
ミケとポチ相手に源氏説く先生　順子
一つ屋根そっくりさんができてゆく　雄大
エノキ茸土の匂いを知らぬまま　由紀子
ずっと昔ハイヒール履き颯爽と　けいこ
永田町の先生文春が見張る　風露
醸し出す雰囲気どうみても親子　正人
お手紙を読んでからずっと宇宙　くにこ
上から順に縮小コピー子供達　ゆたか
何もかもすっかり捨てて星になる　照彦
上と下右も左もアホヤネン　芳山
投げた球返事を待っているずっと　楓花
パソコンの先生さまは中学生　紀の治
灯台はずっと直立不動なり　石花菜
卵産むニワトリだったこともある　麦青
おいしい物があるのはいつも坂の上　美ッ千
鼻の穴よりずっと小さい耳の穴　重忠
年金の元を取るのはずっと先　久子
ずっと前の記憶はあるが今がない　希楽良
散歩する夫の姿チェックする　コスモス
コロナ禍は嫌だと桜散り急ぐ　規夫
天国に行くまでボケませぬように　完司

川柳塔打吹（鳥取）　斉尾くにこ報

リストラで亭主の椅子に猫座る　紀美恵
指一本痛み全身かけめぐる　たけ代
困っても素直になれずぐずぐずし　貴恵
決断は君に任すと困り果て　節子
困ったら念仏唱え切り替える　陽之助
困ったら手の平かざし陽を浴びる　重利
困りごと聞いてなぐさめ長電話　義人

冗談もほどほどにして中国さん　富隆
見栄はよせ寄附はほどほど遺言だ　久芽代
ほどほどが分からず飲んで酔っぱらう　龍枝
言いなりになっているのもその辺で　大鯰
ほどほどにしたらと手伝わぬ夫　みゆき
ほどほどにドッコイサッサホイサッサ　石花菜
ほどほどの暮らしの味方冷奴　余光
ほどほどの暮らし向きだと慰める　紀の治
ほどほどにしたら取り付く変異株　照彦
川柳会ハハハなごやか風吹いて　悦子
砂嵐吹くと砂丘は生き地獄　重忠
親の小言何処吹く風と縄のれん　清
年寄りに風は前から斜めから　宣子
真っ直ぐに吹いているのは父の風　芳光
ひと吹きで迷いを消したソクラテス　三津子
観てみたいモネの運河をフランスで　紀子
人の知恵運河を掘って近回り　滋
運河辺り竹輪で狙うズワイ蟹　野蒜
てのひらの運河漂う労働歌　完司
四月馬鹿運河で鯛を釣りました　美知江
悪口はみんな運河に捨てましょう　美ッ千
春風がピッコロ吹いていい知らせ　くにこ

和歌山三幸川柳会　西川　千鶴報

生きる道突っ支い棒で探す場所　美枝子
卒業は終生ないと言う匠　敏照
得意技どんな場所でも寝られます　一雄
うっとりと猫の定位置母の膝　宏枝
年令の差越えて卒業定時制　ひろ子
いつもの席にいつもの人がいる安堵　当代
三角も丸も繋いで現在地　純子
親離れ子離れ青い実が爆ぜる　幹子
生真面目でうそは禁句と決めている　昇
嘘一つついてパズルが埋まらない　日出男
気配りが過ぎて落ち着く場所がない　碧
有り得ない嘘を認知の大真面目　まき
騙されておこう嘘だと知りながら　富香
卒業をバネにハードル飛び越える　八重子
ゆすらうめ咲いた幼い恋だった　理恵
見送ったあの日の笑顔駅の風　昭枝
嘘少し混ぜた話が盛り上がる　保州
振り上げた拳を降ろす場所がない　准一
リンゴ剥くナイフは謀反考えぬ　和子
年金が生きているかと問いにくる　智三
忘却は神の恵みと前を向く　菜摘
ついうっかり軽い嘘から出た亀裂　彦弘
嘘も混ぜ言葉の角を丸くする　起世子
何もかも卒業すると張りがない　明子
卒業はなかった母の作業帽　あき子
嫌なことで頑張ることはもうやめる　知香

村上玄也選

百歳の笑顔清々しいオーラ　満知子
バッシング覚悟で高い樹をゆする　一瑤
吹く風に任せ切りにはせぬ余生　堅坊
夢ばかり食べて凡人雲を追う　碧
しがらみを一切捨てる切れた凧　きみ子
甘い夢見ていた時の後遺症　敬子
古典にはずしり溢れるヒトの知恵　黒兎
内緒ごと聞かされてから鬱になる　節子
窓際へご出勤とは知らぬ妻　直子
タクシーをお呼びしますと追い出され　耕治

佳句地十選　（6月号から）

永見心咲選

ああ鳥がうらやましいと思う日日　ひとみ
ずばずばと核心を衝く楷書体　仁
捨ててない白を白だと言う勇気　楓花
黙食ができぬ蛸焼きの熱あつ　和郎
バッシング覚悟で高い樹をゆする　一瑤
てのひらに浪速を載せている琵琶湖　欣之
ささんか散華おんな主は病んでいる　理恵
一言で愛の牙城が崩れゆく　(福)則彦
里イモが刺せずに燃え上がる闘志　芳山
おひなさまだいまちいさいこえでいう　ちか

更迭も天下りもする居場所あり　義泰
消しゴムで消えない嘘は笑えない　眞智子
居酒屋の隅にもコロナの風が吹く　悦男
わがままに介護卒業訴える　和美
カーナビに私の居場所捜させる　みつ江
軋む世に嘘も方便潤滑油　和男
今が花その場その場で咲いてきた　夢子
定年後居場所探しに日が暮れる　康則
立ち位置を弁えている霞草　千鶴

竹原川柳会（広島）　古田比呂子報

強盗も紳士淑女もいる世間　節夫
寮に入れ世間のイロハ学ばせる　慶子
居酒屋の世間ばなしに磨かれる　敬子
樽募金世間はあたたかいものだ　蘭幸
先生方に世間のくらし教えたい　夢香
この人を説得せねば重い役　千代美
おーい青春小さな役をいただいた　笑子
爺ちゃんが留守番役をかって出る　弘子
損な役ばかり演ずるお人好し　昭紀
町内に世話焼き婆がいた昭和　輝恵
我傘寿無役無所属自由人　宣之
役職は無縁生涯が現役　淑子
花の詩が読める私の席がある　鬼焼

花束をもらった写真これだけよ　節生
大根もブロッコリーも花になり　白狐
花畑ずっと続いた先に亡夫　比呂子
人生を見直す朝の花活ける　栄香
ありがとう夜空に轟く夢花火　厚子
お母さんぼーっとしてると娘に言われ　歩美
自信ない日ちぎれ雲でもすがりたい　貞子
40を超えたら怖いものはない　史子
手のまめは負けず嫌いの証です　千枝
バランスのおてほんせんせいはフラミンゴ　五歳　ちか

川柳花の輪（大阪）　岡本　薫報

評論家それならあんたやってみて　正太郎
社の鬼も肩書き脱げば父の顔　信子
こわだかに意見言うけど顔笑顔　笑子
帽子ぬぎマスクはずしてこんにちは　やすの
ぬぎ捨てた女房の靴おこってる　薫
別の道歩んで脱いだ過去洗う　亜成
意見した吾が子に今は幸貰う　泰子

はびきの市民川柳会（大阪）藤原　大子報

弁解の余地なく現場押えられ　ひとみ
スラスラと言えず時々口ごもる　千鶴子

不安です弁解ばかり先に立ち　かつ美
弁解を聞く耳もたず腹を立て　正義
遅刻のいい訳考えながら急ぐ道　こみつ
弁解は考えてある25時　まつお
辛いなあ弁解じっと聞いてくれ　ダン吉
弁解を続ける心寒くなる　大子
言い訳はおよしと角の地蔵さん　みつこ
弁解の途中で気づく解決策　久仁雄
無事だっただけで弁解など要らぬ　さくら
残業をしてたと言うが酒臭い　いさお
弁解の余地を残して子を叱る　楓楽
通天閣似合うビリケン2ショット　冬のト
パステルカラー纏って似合う春の風　ちづる
お似合いの夫婦と言われ愚痴言えず　シルク
バツイチ同士とはとても思えない　勝弘
割れ鍋に蓋のようです妻と僕　一文
お似合いの夫婦議員の金まみれ　久仁子
花柄のマスクあなたに似合ってる　専平
正直が似合うと言われ愚直なり　洋一
欲得抜き自分に合った道歩む　美籠
藤井二冠着物姿もよく似合い　一歩
若づくり似合いませんという鏡　宏造
喝采がお似合いバラとかすみ草　扶美代
河内弁が似合って虎が勝っている　美代子

歳月が似合いの夫婦にしてしまう　理恵

南大阪川柳会　松岡　篤報

団子鼻隠すとハッとする美人　東風
九十五年生きた私はこの顔で　シマ子
懐かしい顔顔顔に合う句会　いさお
耐え抜いた白寿の顔に後光差す　柳伸
仁王さんきっと夜中は笑ろてはる　志華子
コロナには知らん顔する神仏　敏治
職安に蠢く顔の無い男女　克己
反抗期イラ立ち示す凹む壁　直子
コロナ感染急増凹む観光地　ひさ乃
コロナ禍でも凹んでないぞ呑んでるぞ　ばっは
日本の名誉が凹む化石賞　国和
絶望の横にちょこんと在る希望　博
AI車仕事無くなる板金屋　歌留多
気付いたら後にだれもいなかった　一歩
スプーンの凹みにヴィーナスの谷間　亜成
ひっそりと咲いて散りゆく山ざくら　弘委智
ひっそりと暮らすだけでも金は要る　昌紀
ひっそりと自粛したのでよく太る　勝弘
巣ごもりの鬱はそのうち倍返し　篤
主菜にはなれぬパセリの役どころ　俊雄
ひっそりと平行線の上で生き　あや子
ウイルスの所為でひっそりひとり酒　直樹
くどくどしい説得あくびかみ殺す　大子
グチひとつ聞いてくれます仏さま　通江
くどくどと言えば言うほどそっぽ向く　峰子
くどくどの話に耳がアクビする　柳右子
くどくどと忠告受けている無心　弘子
聞く身にもなれとしおれる彼岸花　常男
失敗をくどくど攻めぬ太っ腹　満作
卒寿とは無理が効かないものと知る　ルイ子
ただいまと門で仮面をつけかえる　実
久し振り幕にお詫びの草むしり　よしみ
その内に素顔忘れてしまいそう　ダン吉
自粛している間に老いが加速する　楓楽
角取れた石の哲学聞いてやる　郁夫

川柳ささやま（兵庫）　北澤　稠民報

カタカナ語省語にはアレルギー　(北)哲男
目立つ人影ではみんな笑ってる　稠民
もみじの手銭を掴めと祈る親　善輔
ちらほらと空き家が目立つ村となり　剛
昔っていつから前が昔なの　重男
コロナ禍の咳するだけで目立ちます　良子
宝もの目立つ子供が光ってる　照代
貧しくも友達がいた痩せガエル　(長)哲夫
言い伝え昔の知恵は素晴らしい　美智子
花一輪生ける余裕のある暮らし　智恵子
春夕焼け恋にはぐれたこの私　さゆ子

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

漫才で腹を探って次の手を　甚禄
鳥達に声かけながら野良仕事　草文
世の中を楽しくできる漫才師　盛桜
昇進の椅子は埃まみれのまま　すみれ
漫才に酔った顔から戻れない　美ッ千
無人駅さくら並木に歴史見る　弘子
農作業桜の花が指示をする　一平
埃まで勿体なくて貯めている　楓花
人の世の出逢いと別れ始発駅　小鹿
空覆う黄砂が喋るモンゴル語　ゆたか
農作業ボケてる暇はありません　正昭
末期の水だけは澄んでおりますヨ　孔美子
農民は頭の中に四季がある　文道
濁る川幾人の夢流したか　弘六
濁り酒のんでは老いに発破かけ　重忠
終着の駅から明日へUターン　茶子
閻魔さま終着駅でお待ち兼ね　完司
農作業妻の援助でやっと維持　照彦
濁り酒うまさに恐妻の顔忘れ　恒

農協が身近だったなあ昭和　正道
調子よくしゃべって濁す人の声　かおる
市民農園日光浴に丁度いい　孝子
漫才の好きな子供とおやつ食べ　茜
絶対に詐欺にかからぬ自惚れる　大鮟
突っ込みとボケを崩して笑わせる　蟹郎
濁り水しか飲めぬ地域がある世界　宏章
叩くほど昔の埃出て来そう　慎一
漫才師舞台で客の笑顔見る　瑞子
えらそうに叩くと埃出る奴だ　実満
ふたりともボケて毎日が漫才　睦子
震災の濁った水を忘れない　静恵

川柳ふうもん吟社（鳥取）山下　凱柳報

断捨離し身軽にならなゃ逝かれまい　昌鼓
オンライン流行り世間が味気ない　由美子
外野手の前にポトリと決勝点　何事
人の手前ばかり気にして生き辛い　みつ子
店先の手前で少し思案する　利昭
せっかくの君の決意だ邪魔しない　真智子
四コマ目不要なものは抱えない　房江
春嵐眠れぬ夜の交響詩　紀美江
コロナ禍が呑気な俺に喝入れる　大
無位無官足跡だけを子に託す　毅

血縁を切る狼として生きる　蛙鳴
言い訳は手前勝手なことばかり　龍彦
飲み会の誘いきっぱりNOと言う　紫陽
空っぽの棺は花で埋め尽くす　善平
俺の財布いつも身軽でカードだけ　勲章
堕ちていく手前で浮かぶ親の顔　恵美子
不信感広がり絆絶つ覚悟　みゆき
ちょん髷にするだらずげなことするないや　蟹郎
あほだらずばかもまとめてとぶざらえ　一平
外面はダラズで通す利口者　美恵子
だらずげな夫と暮らす妻の愛　回春子
八方塞がり悲喜こもごもの花疲れ　金祥
いつの間に決意喪失して老いる　鐘馗
終点の手前で僕の貸し切りに　紘一
もう少し喋る手前で妻の咳　振作
身の振りをすばやく決めて生き上手　千代
菜の花の黄色は僕を軽くする　観洋
身軽です意地とプライド捨ててから　月満
鏡の中私の顔に亡母がいる　真理子
延命はするな覚悟はできている　天遊
棺には身軽になって入ります　拓治
決意した心に句読点を打つ　一瑤
籍入れるだけの身軽な愛の詩　無限
旧姓に戻ると翼生えてくる　八千代

言動の一つ一つにある決意　凱柳

川柳塔わかやま吟社　小谷　小雪報

失敗を重ねて人は糧になる　光
手を重ね絆の深さ確かめる　寿子
終章へ重ねた明日の絵が温い　冨美子
歳重ね我が未熟さに呆れ果て　節子
幾年月重ね老化という誉れ　悦男
重ね着を脱げば少しは若返る　大輪
心配で言葉重ねて厭がられ　佳子
満員の寄席で腹から笑いたい　日出男
三面鏡どの角度にも母がいる　あかね
その席が空いているから譲れない　ほのか
末席でいいと言うのはホントかな　小雪
空いた席座ればそこは落とし穴　信勝
図書館の窓際僕の指定席　明
ひきこもった子のため空席がある　夕胡
指定席いつもの人を目でさがす　よしこ
席蹴って無職で帰る軽さかな　八茶
好きな子の隣で授業上の空　保州
結婚後苦労重ねて半世紀　秀夫
三度目の正直誰も信じない　紀子
何をしても三日坊主の孫いさめ　徑子
即席のラーメンだった恋終わる　和宏

三角形の底辺生きる知恵がある　寿子
三線の音色の中に母が居る　晶子
肩に乗る生みと育てと義理の母　タカ子
カップ麺できるまで愚痴聞いたげる　知香

川柳茶ばしら（愛知）　金子美千代報

戦中派イワシは骨も食べてます　まみ子
脱炭素原発だけはお断り　三樹夫
時々は丸洗いする夫婦仲　かつ子
座布団を枕代わりの昼下がり　雅美
笑い合える日はいつくるか一人鍋　遡行
赤飯を炊いてひとりの誕生日　美千代

プラザ川柳（大阪）　穂口　正子報

老害と弾かれ暫時黙秘する　正子
パートナー選んだ相手まああなた　靖子
背筋伸びハツラツ美女は古希間近　景子
コロナ禍でビデオ通話に絆見る　和代
タバコと命どっち取るかと医者の喝　清乃
政治家に見せてやりたいあの稲穂　悦夫
だんだんと丸くなるせな母に似る　五月
背筋ピンベルトで補正背が伸びる　園子
棒を立て倒れた方によし行くぞ　政夫
正座から崩せば足が礼を言う　一彌
老いたなとほろりワイフの丸い背　淳司
不祥事の度に90度のお辞儀　弘光
茹でたての蟹が螯でVサイン　克三

城北川柳会（大阪）　近藤　正報

しゃぼん玉軒の高さで虹となる　黒兎
軒下がとても楽しい燕の巣　肇
民衆の喚起を銃が狙い撃ち　和夫
喚かずに拍手を贈るホームラン　五月
野良猫よ夜中に喚くのはやめて　満知子
喚いても言う事聞かぬ変異株　正彦
ハルカスに上りコロナのバカヤロー　洋志
喚いてもオートロックは開きません　実
渡り切ってホッと一息かずら橋　福貴子
かわりゆく言の葉揺れて定まらず　弘委智
こんなにも不味いものとはひとりめし　克己
喚いてない歌っているんだ「祝い酒」　廣光
グラグラの根から蘖萌えている　久美子
喚く心お酒に溶かし生きている　堅坊
余談ではなくて本気で嫌いです　郁夫
余談だけ記憶に残り後忘れ　峰子
喚いてもどうにもならぬのは寿命　賢子
今年こそ何度聞いたか年初め　義明
余談だが財布重くてしょうがない　博
ふんわりと気持ちを包む女文字　野鶴
ブランコに乗れば消えてく今日の鬱　利子
どこがどう違うか光る子は光る　かずお
やわらかい風が捉える樹々の私語　千賀
天変地異地球が喚く涙する　俊雄
ドラえもん程度の知識宇宙論　信子
川柳で色色学び教えられ　ルイ子
第四波自粛自粛でガードする　満作
一言にグラグラくずれゆく心　優
老い二人競い合ってる物忘れ　宣子
まだ恋をしたくて今日も肌磨く　宏造
三陸の波は御霊のエレジーよ　志華子
嬉しい日花屋の前で立ち止まる　万紗子
背を伸ばし生きるか朝の米を研ぐ　星雨
ルーティーン朝飯前のスクワット　正
ときめきの心の青春と真ん中　朝子

きゃらぼく川柳会（鳥取）後藤　宏之報

きゃらぼくの木は心まで休ませる　日枝子
病んで知る幸せな日の有難さ　紀の治
日めくりの説教ピアノ弾くように　宏之
名指し避けあのその騒ぐ烏合の衆　汪
日が暮れた犬の頭を撫でていて　雨
友達にストレス与え愚痴を言う　奇
欠けてゆく月に我が身を重ねおり　多美子
水仙に誘われ春の八十路行く　恵子
暗闇にふわっと匂う梅の花　治代
瑞枝

春まじか心うきうき靴を履く　久直
悪事です手の鳴る方へ向く政治　宣子
会うたびに大丈夫よと言う娘　菜々
良妻で賢母で人が近づかぬ　令位子
神仏も五輪はきっと観たいはず　美穂
梅の花満開に咲き春を呼ぶ　博子
初夢は獏が残した福を見る　俊久
ズボン上げ気合いを入れてホックする　美緒

六甲川柳会（兵庫）　糀谷　和郎報

引越すぐ中高大の入学が　義明
震災よりもコロナ禍片付かず　洋次郎
伝来の壺が傘立てされている　ひろし
大変だ大仏マスクどうしよう　(歳)洋一
動けない背中を押してくれますか　ヨシエ
侘び住まいエレベーターの無い五階　博
大変だ言いつつ密に寄って行く　正彦
私を内から破る怠け癖　堅坊
破られた記録をエール新記録　美穂
わずかでも涙を誘う本わさび　崇史
少しやで祖母のこっそり好きやねん　美津子
ちょっとでも望みがあればやりなはれ　盛夫
ダイエットご飯ひと口その重さ　弘
夢捨てず聖火リレーはまだ走る　正和

男ですわずかに残る力瘤　利恵子
つつましい友の心が眩しくて　弘華
一周忌ルージュ眩しい母遺影　次郎
純白のドレス眩しいブーケトス　千賀子
癌完治胸に眩しい金メダル　美恵子
医療団勇気と汗が眩しくて　廣光
結婚ラッシュ本当の夫婦どれやねん　公輔
サマージャンボ当れと念じ神棚へ　真桜子
五七五喜怒哀楽を掬い取る　和宏
店も駄目路上も駄目で家で飲む　正美
振り仮名の助けで読める園児の名　哲男
老境を案じてくれる子の電話　狸月
約束の時間過ぎるとドアチェーン　利子
オンリーワンそれはそれなり大変で　ひとみ
正論を通していつも反主流　武彦
許す神いても許さぬ妻がいる　和郎
手のうちを見られぬように笑っとこ　光久
黙っとけば少し賢く見えるのに　恭子
ワクチンとうがい手洗いあとは運　隆浩
どさくさに医療費二割ねらう国　勝弘

倉吉川柳会（鳥取）　竹信　照彦報

病んでみて何もいらない命乞い　智恵子
八十路坂爺もお婆も病持ち　石花菜

呆けられぬ今日は内科で明日は外科　由紀子
山菜採り足取り疼く春が来た　紀美恵
凝りすぎて病と言われ肩身せま　恵子
気にすると病のように落ち込んで　玲子
三日月が好き満月はもっと好き　完司
好きだから刻むリズムに飲み込まれ　雄大
歌が好き聴くのも見るのもうたうのも　けいこ
一日を好きに過して我が天下　龍枝
好きな海で大蛸とした一騎打ち　重忠
好きだなあ練習の後飲むビール　道春
好き勝手政府は民意知らぬふり　大鯰
酒が好き一升びんがすぐ空に　酔芙蓉
隠された恐怖の目盛り放射能　次男
親子でも世代の目盛り議論する　日出子
コロナグラフ目盛りを誰か止めてくれ　萩江
涙目で目盛りを見れば三倍だ　隆昌
赤ワイン目盛り確かめちびちびと　祐子
紳士面俄かにシッポ隠せない　麦青
俄雨折りたたみ傘役に立つ　さちこ
人を見て俄かに態度変えている　瑞子
天気予報信じ俄雨に濡れる　風露
発言を俄かにふられ舞い上がる　凱柳
したたかなコロナ俄かに変異する　茂夫
俄かにはぼんくら頭作動せず　照彦

川柳塔さかい（大阪）　内藤　憲彦報

晩酌のジャブの蓄積血糖値　時　雄
人類へ大きなパンチ新コロナ　堅　坊
後手後手の政治にパンチ総選挙　勝　弘
妻よりも娘の言葉父に効く　満知子
忘れない父のパンチで今がある　としお
オリンピックへダブルパンチの変異株　憲　彦
生さぬ仲丸く育ててくれた母　ひろ子
子育てに正解はない愛一途　満　作
秒針に追われ続けた子育て期　輝　子
九条が育てた平和揺れている　和　夫
歳月へ愛を育てている絆　朝　子
スパイスを色々足して育つ彩　みつ江
ブランドの牛を育てて村おこし　唯　教
溜息が溶かす喪失の傷口　蕉　子
毒少し混ぜた溜息風にのる　志津子
溜息もついでに入れるのし袋　宏　造
ため息を吐くたび逃げる福の神　雅　明
涙色してる溜息医の現場　美津子
世の進歩溜息の出るはやさです　敬　子
老いてなお子の心配をするも親　ゆみ子
心配が感動に曾孫生まれる　八千代
戦中戦後五人育てた母凄い　いさお
育てたがお返しなしに嫁に行く　光　雄
世渡りの下手な子供に育ててる　さくら
育つ芽を摘んでしまったかも知れぬ　扶美代
わたくしを丸く育てた世間様　みつこ
山を育て豊かな海が生きかえる　憲
実をもいで猿は軽々木を渡る　五　月
見渡せば咲き乱れてる桔梗花　廣　子
見失う五月闇ですきれい人　ばっは
店赤字さらにコロナと厳しい世　舞　夢
見切り付けさあさお乗りよ汽車は出る　万紗子
妙手だと最後になって気付かされ　玄　也
御堂筋さっと風切る黄なコート　敏　治
未来へとさあ行くぞうのキックオフ　俶　子

岩美川柳会（鳥取）　山下　節子報

百までも生きる希望とある気力　重　忠
オギャーオギャー参加するのはイヤらしい　完　司
百円に一円足りず歩かされ　弘　六
赤ちゃんの百面相に春の風　一　瑤
ボランティア愛の仕事にのめり込む　一　平
参加して人並みの汗かいてきた　美恵子
鏡見て犬はたじろぎ牙をむく　たぬ
スーパーで孫にぐるぐる追て行く　菖　子
青虫にたじろぐ人とつぶす人　幸　安
百均のクリーム塗ってしみ予防　敏　子
よく笑う君はスーパーマンだった　茶　子
イケメンがいる飲み会は参加する　真理子
お葬式参加出来ない家族葬　振　作
参加して見せる成人晴れ姿　雅　女
無垢な子の笑みにたじろぐ時がある　彰　夫
たじろいだふりしてじっとチャンス待つ　凱　柳
無理するな参加賞なら確実だ　蟹　郎
百歳が珍しくない敬老会　節　子

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

新聞が毎日届く国に住み　直　子
お野菜をやさしく包む新聞紙　正　子
主婦である私はずっと夕刊派　純　子
新聞も今じゃスマホにお手上げだ　郁　子
暗闇に届く新聞朝が来た　信　子
昔むかしよく揉みました新聞紙　勝　弘
休刊日あって新聞見直され　守　啓
新聞の隅のオアシス美談載る　黒　兎
その日だけ妻も信じた午前様　則　彦
神の手を信じて受ける手術台　宏　造
あの世でも大阪弁のお聖はん　春　代
「あほやなあ」笑いながらに愛がある　奈津子
関西弁品ある言葉ありますよ　順　子

儲かりまっかぼちぼちでんと中途やね　一　弥

西宮北口川柳会（兵庫）　緒方美津子報

一・一七しじまの中に夜が明ける　(福)弘　子
にぎりめし根性のめし勝負めし　俊　雄
美しい謎の詰まっている蕾　いわゑ
群れを出る小鳥でっかい夢を持ち　修
志村けん偲んでマスク外せない　野　薫
うん旨いやはり新米塩にぎり　真桜子
この角をなぜ曲がったと聞かれても　ひとみ
少年の拳の中にある未来　千賀子
胃薬を飲んでどんどん食べている　光　久
あつあつをホイホイにぎるリズム感　哲　子
口癖をまねては偲ぶつまの橇　堅　坊
言葉はつい心の中を曝け出す　りこ
庭にくる小鳥と話す友として　みよし
合掌の指だ感謝の念光る　野　鶴
小六の女先生好きだった　勝　弘
漬物石洗えば亡母の手の匂い　はな
背負い投げ凛と一本影偲ぶ　邦　男
発明は謎と何故から始まった　哲　男
止まり木に並び啄む飲み仲間　廣　光
密になり喋る小鳥が羨まし　正　和
幕末の軌跡をたどり京の町　恭　子

肝試し偲ぶ郷里のほろ苦さ　正　彦
旅の空白いおにぎり竹の皮　白　備
春眠も小鳥鳴く声目覚めよし　健　彦
一羽ずつ自分の持てる空を飛ぶ　弘委智
百歳は家が一番好きという　利　子
口だけは達者と杖が笑ってる　豊　子
本当が見えない国に住んでいる　洋次郎
合宿中話つきない塩むすび　美　籠
謎多き女のままで消えたリル　盛　夫
友偲ぶ墓前の背なに小鳥鳴く　昭九朗
喜寿ですが女心は謎のまま　一　徳
謎一つ解けて大きな海に出る　武　彦
残業用おにぎり一個持たされる　新　録
豊かさに比例せぬのが幸せ度　千　代

岸和田川柳会（大阪）　石田ひろ子報

挨拶のできるコンビニひとつある　信　子
コンビニへオアシス求め行くわたし　珠　子
コンビニにトラック停めてカップ麺　玄　也
コンビニにある飢餓の子の募金箱　義　泰
コンビニの前で屯する青春　扶美代
コンビニをキッチンにする独り者　保　州
午前二時まだコンビニが眠れない　ダン吉
スマホペイ覚えコンビニなお身近　みつ江

夕焼けと遊ぶいじめの無い昭和　ひろ子
いつまでも遊び心を持つ若さ　朝　子
よく遊べだけは守っている夫　眞　澄
ハンドルも遊ばせないと疲れだす　信　二
ぼんやりと心宇宙に遊ばせる　律　雄
少年期遊びといえば草野球　康　信
遊ぶ事知らずに生きた戦中派　麻　子
野の花に逢いたくなって遠回り　大　輔
埋められた花で柩は時を知る　恵　子
夫他界気丈に生きる姥桜　タカ子
独り居にコンビニという救世主　日出男
コンビニの温いコロッケ爺が好き　睦　子
悲しみもやがて時間に癒される　喜代志
陰で咲く花にもやがて陽が当たる　ふさゑ
笑うけどあんたもいずれそうなるよ　和　美
夫婦仲良くてもやがて来る別れ　秀　夫
頑張れば人はやがては様になる　彦　弘
九条をもて遊んでる改憲論　常　男
被災地の校舎跡にも花は咲く　いさお
待合所病気自慢で花が咲く　一　歩
レンゲ草花かんむりが懐かしい　しげ子
五十年貴方の横で咲いてます　規予子
後輩に花を持たせるよい上司　節　子
真夜中の孤独とコンビニへ行こう　理　恵

一粒の種が信じているやがて　和子
テロの地もやがて平和の花が咲く　香代
世の動きコンビニの目がすぐキャッチ　三成

長柳会（大阪）　辻村ヒロ報

目の前を素通りされるカタカナ語　ヒロ
年をとりさっと読めない機微空気　弘美
とりインフル生埋めなんて酷いこと　ゆき
口笛でウグイス呼んだ散歩道　洋二
口下手も酔いが回れば上機嫌　たけし
クラス会幸せ芝居する彼女　正博
夢見てた夢に終わった玉の輿　登美子
星と月夜空のロマンス私にも　千代
玉砂利の隙を突き刺すピンホール　おくみ
アイロンで伸ばしたい皺消せぬしみ　三和子
さばさばと苦もいとわない楽天家　幸子
弱みつかれシドロモドロの玉の汗　ともこ
痴話喧嘩するとうどんが伸びてくる　澄子
孫可愛いゆえにワクチン進み打ち　邦夫
もうかりまっか大阪弁の大名刺　靖博
私の五臓六腑に感謝状　和代
つぎつぎと性差の刷込み気づかされ　ふみ
来世でも亡夫母の子でいたい　淳司
決心が揺れる人生交差点　正美

百歳もいいがじわじわ減る貯金　直樹
リフォームの計画変えたツバメの巣　和子
尊厳を持って生きたい「ガン告知」　光弘
女でも男でも良い丈夫なら　純風
コロナでは散りたくないと皆マスク　孝
コロナ禍に彩雲を見る梅雨の空　規之
浮遊するプラスチックの罪深さ　孝代

川柳塔すみよし（大阪）　古今堂蕉子報

大台に乗ったと百歳が笑う　眞澄
踏み台の叫びを知っておりますか　ダン吉
人類の土台がぐらり新コロナ　堅坊
五輪までやきもきしてる聖火台　時雄
酔った母台車に乗せて連れ帰り　小枝子
黙食のランチさながら犬の餌　寿之
峠の釜めし買って私の汽車の旅　こみつ
「愛妻弁当」その名に惹かれ買う弁当　久仁雄
昼が来た妻のキャラ弁ひやかされ　満作
初舞台家族友人顔揃え　直子
無防備で眠れる国にまだ住める　雅美
朝食が出来たと寝てる妻起こす　ひろ子
樽の中じっくり眠る味噌醤油　満知子
寝て待って棚ぼた狙う宝くじ　里子
寝る時間惜しみ遊んだ若かった　さくら

いつまでも眠っていたい春の朝　廣子
夫婦げんか寝言が元で勃発す　福貴子
聞かぬふりしても気になるあの寝言　萠
寝る前にちょっと呑む癖治らない　いさお
ワイワイと雑魚寝した日が懐かしい　大子
寝てる児の無邪気な顔に天使見る　民子
居眠りを起こしてくれた竿の引き　比呂志
土台には父が作ってくれた店　裕之
ひとり寝の夢で逢うのは遠い人　理恵
流行語鮮度が命すぐ腐る　俊雄
父の膝乗って遊んだすべり台　舞夢
ヘルパーが代わりフレッシュしたホーム　シマ子
ランチ時もスマホ片手に黙々と　篤
台所便利グッズの発明所　克博
気弱だがどこでも寝れる図太さも　勝弘
もぎたてのトマトトマトの味である　まつお
玉子焼き頬張る昼の戦士たち　志津子
滑り台から万歳すれば全宇宙　万紗子
味よりもインスタ映えのランチです　輝子
土台むりいいえ必死で地固めを　ふりこ

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

スゴモリもツバサがあれば元気出る　邦代
キラキラの名前が欲しいアホウドリ　徳利

地球儀に国境線を引くヒト科　弘　充
地に伏して地球の叫び聞いてやる　あきら
地上では土竜叩きに会う百足　とも子
月末のピンチにタンスから論吉　瑞　人
童謡のようにはいかぬ森のクマ　みちを
ひょっこりとまだ顔を出す好奇心　豊　仙
ひょっこりと顔が見えてももてなせぬ　富紫美
どろどろになってわたしは心太　雪　代
泥んこになるまで酔ってみたい夜　モナカ
ちょい悪のなかで心地いいどろどろ　芳　山
サラサラとどろどろカレー戦国史　青　帆
どろどろはあった忘れた三世代　知恵子
緊張感ゼロ山芋も納豆も　勝　美
どろどろを浄化するのに半世紀　柳　歩
軽率な言葉を吐いて悔いている　(岸)桂　子
軽い口私にあった水たまり　米　估
軽トラでちょっと昭和へ行ってくる　美智子

川柳さんだ(兵庫)　酒井　健二報

健康でいようと仲間からレシピ　恭　子
極楽へ行けぬ仲間とうまが合う　哲　男
折に触れ老いにやさしい友の情　一　子
今日の憂さ拾ってくれる仲間たち　ちあき
言いたいこと言える仲間が宝物　おさむ
輪になった仲間の笑みに支えられ　ヨシエ
ユーターン蹴った故郷恋しがり　好　文
今はただあなたの手紙抱いている　ひとみ
初恋の小骨が刺さりまだ独り　光　久
切なさを拾えば滾る思慕ひとつ　優　子
男です恋しいなどと言いません　かずお
書いて消し書いては捨てたラブレター　行兵衛
米寿とて恋しいことも欲もある　修
施設より自宅恋しく逝った母　俊　昭
春野菜むく鳥つついてまる坊主　几　代
遊覧飛行ついていません春霞　美和子
同期より後れをとった春人事　雄太郎
百歳はショックに鈍くなり元気　利　子
生き残りはかりコロナが変異する　健　二
出世魚澄ました顔で雑魚を食う　哲　夫
頼れると今の今まで信じてた　千賀子
星空を一人占めして露天風呂　健　彦
ネオン消え眺め侘しい北新地　博
来し方を眺めてみれば恥の山　廣　光
どんな人住むのか家が建ってゆく　洋次郎
みかけより舌で勝負の祖母の味　勝　正
立つ位置で眺めも変る山登り　高　志
ワクチンが済めば会いたい人数多　利　子
コロナ禍で万葉集を読み始め　昭

丑年へウフフウフフの虎の陣　正　和
早や八十路あわてて使う貯めた金　直　美
おじいさん独りと知っているカラス　耕　治
私見て尻尾振らない犬嫌い　重　男
頑張れと急き立てないで待っている　盛　夫
面白いこと探してるラストラン　美津子

川柳塔なら　大久保眞澄報

義理の弟やから馬面も許す　一　筒
幾つもの顔で渡っているこの世　大　子
顔を見てそれで気のすむ母見舞う　弘　子
この顔を出せば何とかなる話　ひろ子
交番に迷子と同じ顔が来る　孝　志
顔見せるだけで喜ぶ母だった　一　歩
母はもう許した顔になっている　(平)美智子
聖人の顔して座禅から帰る　良　一
薄化粧してデイケアへ行く母よ　保　州
人間をふんわり包み込む慈顔　欣　之
こだわらず健やか父の顔が好き　菜　美
紆余曲折やっと笑顔に辿り着く　尚　子
マスクとれ笑顔ふりまく日が待たれ　敬　子
モノクロの見合写真に一目惚れ　則　彦
戦中戦後モノクロだった僕の視野　恭　昌
パンダの可愛さとシビアな契約　すみ子

夜桜の薄片一つ水に散る　圭
仙人の声が聞こえる水墨画　眞澄
モノクロで記憶に残るあの津波　薫
辛酸の果てに纏うは墨衣　理恵
理不尽も白黒つけぬ自然体　勝代
モノクロの過去虹色に染め白寿　百合子
無観客馬を鼓舞するファンファーレ　行久
高らかに天を衝くポン菓子のポン　和郎
歌い継ぐ声高らかに反戦歌　希久子
異議ありとたったひとりが声あげる　ダン吉
宣誓の声が空しい無観客　一志
高らかに謳う平和のひ弱さよ　俊雄
核のない地図高らかに大らかに　誠
蒼天に響けと命出ずる声　恵
ひたすらに高らかな虹追っかける　ふりこ
世を揺する声高らかなデモの群れ　半六
穂のてっぺんカマキリ勝利の鎌を振り　比呂志
人間の唄高らかに裏通り　寿之
高らかに夢を語った世界一　史郎

あかつき川柳会（大阪）　磯島福貴子報

アルバムの中はスマートセピア色　(河)正
産院で身二つになり妻帰る　和大
ブランデー片手に星と会話する　栄子
立っているだけでスマートだと判る　紀乃
身のこなしスマート過ぎて近寄れず　(松)秀夫
スマートフォン持ってないけどよろしくね　春雄
一瞬の夢追いかける流れ星　寿子
恋終わるせめて別れはスマートに　一志
スマートな彼が平気で嫌味言う　裕之
スマホからポロリと恋のひと雫　公輔
角帽を被せてくれた母の恩　心平太
波風に揉まれて角のとれた石　北朗
快気祝角樽と来る飲み仲間　ひろ子
ぐっすりと眠る妻には角がない　(櫻)秀夫
正直に生きようとして角が立ち　古池蛙
幸運とばったり出会う曲り角　みつ子
ぶつかって角もまあるくなる絆　朝子
軸足をどこに置こうか迷ってる　安保子
助け舟出す潮時は思案せぬ　シマ子
やり繰りの思案限界派遣切り　緑
ワクチンを打つか打たぬか物思い　(松)敏子
思案など無駄だと走り出す若さ　楓楽
能なしの鳩首会談出ぬ思案　克己
原発の海思案重ねて漁師継ぐ　(川)信子
灰皿に何度も思案押しつける　常男
とことんまで変えないつもりガラケー派　穏夫
投票法に菅改憲の芯が見え　五二
モリカケをコロナでみんな忘れそう　清
百歳を八十歳が介護する　征之
国政を変える共闘春の風　和之
変異株日本の無策を嗤ってる　光子
気が付けば何でも下位の日本国　博美
ワクチンを輸入に頼るたよりなさ　紅絵
人権は鴻毛のごと瑞穂国　渓節
救急車での待機延延無事祈る　福貴子

豊中もくせい川柳会（大阪）初代　正彦報

少年の夢は直球青い空　真理子
妻の愚痴いつも直球ストライク　英三
直球を投げる喜び甲子園　武彦
ぽんと上げるトスで攻撃決めてやる　多美子
諭吉よりぽんとカードでキャッスレス　健二
子の夢の軽さにも似て春キャベツ　公子
老いて独り今日の相手は鯉のぼり　北舟
補聴器付けて世の雑音を聞いている　(永)玲子
変化球あるから生きる直球が　義明
風の囁き今日はワルツに聴こえます　公輔
汗かいてぽんとラムネの栓をぬく　敏昭
わたくしをかき混ぜている絵の具皿　ヨシエ
賑やかに薬並べる朝食後　堅坊
評判が評判呼んで長い列　英旺

開店に並び閉店にも並ぶ　洋志
理に適う妻の直言受けて立つ　満作
朝ラッシュディスタンスなどありません　勝弘
爪パッチン古い私を捨てる音　千賀子
もう今はぽんと飛べずに遠回り　すみ子
へそくりをぽんと差し出す妻の意気　千鶴子
ワクチン接種順番を待つ深い皺　肇
全力を出せば悔しさ残さない　(福)正彦
老ゆるとは氷がとけてゆくごとし　哲男
風のかたち水のかたちに花筏　弘委智
先頭に並んで風の強さ知る　黒兎
もひとりの私が背をぽんと押す　(初)正彦
直球に気迫が籠る名投手　則彦
なーらんだ田んぼアートのチューリップ　美津子
直球を投げて真意を確かめる　野鶴
虹でてる教えてくれる人と居る　(岩)玲子
さりげなくふたりで歩く今日の道　ひとみ

川柳藤井寺（大阪）　鈴木いさお報

コロナ禍に六甲おろしが快調　勝弘
お別れの握手に少し隙間風　シマ子
風鐸が鳴る亡師のそこに法隆寺　みつ江
風みどり亡父と話がしたくなる　扶美代
八時やでもう帰りなと風が吹く　まつお
傷心のわたしを包む里の風　ひろ子
蛹からひらりと風に乗った蝶　みつこ
アゲインストの風だ反骨心が燃え　久仁雄
ジャンケンポンやわらかい手が石になる　瑠美子
ジャンケンポン此の指止まる子がいない　喜代子
ジャンケンポン一つになって和みだす　大子
ジャンケンの強さも奴の運だろう　ダン吉
風みどり似合うピンクを着てやろう　一歩
初夏の風ときに黄砂を連れてくる　かずお
母の日の母とジャンケンポンをする　美代子
いい風がそろそろ僕に吹く頃だ　いさお

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

トンネルを抜けて輝く汗を拭く　仁
無敵です明日咲く花の逞しさ　か こ
統廃合バス通学に沸く子たち　薫
給食はしゃべる仲間で騒がしい
先生が好きで書取りうまくなり　博泉
戦火の子大地ノートにして学ぶ　かすみ
嬉しくてただ嬉しくて世話を焼く　和織
明るくていい笑顔だと褒められる　亜成
他人事も松山ゴルフ世界一　かずお
昇格へ居間に満ちてる笑い声　尚世
うれしいと笑うあなたの傍にいる　寿子
嬉しさを誰にも告げず花の萌え　星雨
トンネルの向こうは虹ときめている　弘委智
煩悩もトンネル抜けた長い影　郁夫
トンネルのまん中にある猜疑心　麗
ひとり居にウツのトンネル抜けられず　常男
引退がちらつくトンネルの長さ　玲子
出口無いトンネルなのねあなたって　武人
トンネルを抜けた歩幅が広くなる　弘一
振り返るどのトンネルも無駄はない　寿之
諦めぬ心トンネル突破する　純子
いじめって忠臣蔵もその一つ　朝子
本当は仲間はずれのいじめっ子　銀杏
佳き人に逢えた気今朝の花水木　一文
よい時代だったと思う昭和の日　鈍甲
明日もまた趣味と格闘米を研ぐ　博
マスク取りちょっと一息青もみじ　堅坊
たっぷりのお金があればもがかない　信子
高そうな果物届き写生する　勝弘
生き生きと生きて生き甲斐謳歌する　さち子
卯の花が香り母の忌巡りくる　高鶩
椿油祖母の匂いのして昭和　祥昭
均衡が取れて揺るぎも無い絆　茜
青春のかけら高まるものを抱く　壽峰
元気かい生きてるかいと友の声　あかり
高志

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 あまがさき	13日(火) 14時締切 ニアミス・積極・ぎりぎり・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ　2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
川柳 たちばな	16日(金) 13時45分締切 印象吟・橋（互選）・困る 自由吟	立花北生涯学習プラザ 尼崎市塚口町3-39-7　TEL 06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
岸和田 川柳会	17日(土) 14時 午後・化ける・凹む・オアシス	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ徒歩5分 〒596-0076 岸和田市野田町2－13－19　中岡香代
川柳 ねやがわ	18日(日) 混乱・スピーチ・内緒・溺れる 自由吟	〒572-0063 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
川柳 藤井寺	18日(日) 14時締切 逞しい・雑草・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・しゅらホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303　鈴木いさお
南大阪 川柳会	19日(月) 14時締切 情けない・ぞろぞろ・時代 雑詠	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒569-1124 高槻市南芥川町9-28-901　松岡　篤
豊中 もくせい 川柳会	19日(月) 13時50分締切 途中・守る・ひょっと・自由吟	豊中市立中央公民館　3F 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦
川柳塔 すみよし	24日(土) 14時締切 虫・弾む・ちびちび	住吉区役所内　住吉公民館　2F 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
和歌山 三幸 川柳会	24日(土) 13時15分締切 海・泳ぐ・軽い 投句締切15日	和歌山商工会議所　4階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市民 川柳会	25日(日) 14時締切 袋・長い・すっきり・席題	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	25日(日) 13時から 自由吟・平行・手ごたえ・毎日 席題	県民ふれあい会館　4F　鳥取市扇町21 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
川柳 さんだ	投句句会　5日(月)締切 裏切り・面白い・グループ 叩く・自由吟	〒651-1545 神戸市北区鹿の子台南町4－46－5 冨永恭子
川柳塔 な　ら	6月末日投句締め切りました 油・にこにこ・募る	〒633-0341 磯城郡田原本町薬王寺150－21　中堀　優
おりひめ☆ ひこぼし 川柳会	7日(火) 消印有効 親友・手紙・運命・思い出 かけはし・阿吽・感謝・祝吟	〒573-0095 枚方市翠香園町2－7 『おりひめ☆ひこぼし川柳会』　栃尾奏子 TEL 072-395-5453

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

7月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	投句句会　3日(土)締切 隣・考える・パワハラ・半分 自由吟	〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
川柳とんだばやし富柳会	3日(土) 14時締切 味・情念	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200 m 〒584-0064　富田林市不動ヶ丘8-31　山野寿之
倉吉川柳会	3日(土) 14時締切 耐える・掘る・みるみる・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔まつえ吟社	3日(土) 13時30分締切 急ぐ・夏・プール・夜更かし	投句先 〒690-1233 松江市美穂関町笠浦221－1　相見柳歩
川柳塔さかい	8日(木) 投句締切 一人・気まずい・幻 折句：さ・ぬ・き	投句句会へ変更
六甲川柳会	8日(木) 誌上句会 世間・補う・うっとり・近い 自由吟	〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4－11－11　上田和宏
あかつき川柳会	9日(金) 14時締切 ついに・手・無視・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2F） メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪市天王寺区3－6　木村ビル2階 あかつき川柳会
川柳大阪	10日(土) 13時開場 花火・酒・甘い	メトロ・長堀鶴見緑地線・京橋駅　研修室 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6　山崎珠生
川柳塔打吹	10日(土) 13時30分締切 映画・急ぐ・うんざり・席題	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
川柳塔みちのく	10日(土) 17時締切 歩・水玉・視線	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275　弘前市城西1-3-10　川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　TEL0172-36-8605
八尾市民川柳会	11日(日) 14時締切 夕焼・みくびる・和む・雑詠	八尾市安中町3－5－1　渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
川柳塔わかやま吟社	11日(日) 14時10分締切 兼　題＝積む・違う・ぐずぐず 課題吟＝走	和歌山商工会議所　4階　和歌山市西汀丁36 兼　題　〒649-6253 岩出市紀泉台366　藤原ほのか 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桒原道夫
西宮北口川柳会	12日(月)14時締切 席題・押す・冷蔵庫・ゆっくり 自由吟	西宮市立中央公民館　6F　講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8141 西宮市高須町2-1-31-830　福田正彦
ほたる川柳同好会	13日(火) 13時30分締切 冷蔵・並ぶ・明るい	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎

柳界展望

★第20回宿場町やかげ川柳誌上大会。参加者224名。

同人天位　藤井　智史

乗り換え駅のない直通の愛だ

工藤千代子

うどん啜りながら墓仕舞のこと

▽訃報△

○黒田能子さん（元同人芦屋市）は4月4日逝去。享年83。

▽訂正とお詫び△

○5月号、P77上段22行目、斎藤隆沼→斎藤隆浩。

P114下段24行目、斎藤隆浩→斎藤隆浩。

○5月号、P118 2段目11行目の坂本加代さんの句、

光り出だす→光だす。

▽**新誌友紹介**△

神戸市　**樫本　正明**
紹介者　居谷真理子

弘前市　**小山内真由美**
紹介者　福士　慕情

寝屋川市　**長尾　千賀**
紹介者　江島谷勝弘

豊橋市　**八甲田さゆり**
紹介者　新家　完司

神戸市　**城戸　誓子**
紹介者　居谷真理子

芦屋市　**荒牧　孝子**
紹介者　西出　楓楽

伊勢市　**奥田　悦生**

宮城県　**太田　良喜**

句会部よりお知らせ

川柳塔本社８月句会は、下記の要領で誌上句会といたします。
皆さまのご投句をお待ちしております。

記

『川柳塔』７月号に投句用紙を同封します。
（未読の方は川柳塔社事務所までご請求ください。）
投句締切　７月３１日（土）消印有効
入選発表　『川柳塔』令和３年１０月号
投句料　１０００円（切手不可）

兼題	「ラスト」	齋藤さくら　選	（大阪府）
兼題	「すいすい」	萩原　狸月　選	（兵庫県）
兼題	「多　少」	稲見　則彦　選	（青森県）
兼題	「　銀　」	山崎夫美子　選	（奈良県）
兼題	「個　性」	新家　完司　選	（鳥取県）

（各題２句出し）

問い合わせ・送り先
〒543－0052　大阪市天王寺区大道１－１４－１７
花野ビル２０１　川柳塔社
TEL 06-6779-3490

57回　番傘本社 水府忌　誌上投句句会

宿　題（各題　1句）
「天の邪鬼」江畑　哲男　選
「免　　疫」重徳　光州　選
「更　　に」久崎　田圃　選
「選　　ぶ」福本　清美　選
「　脱　」黒川　孤遊　選
「ほんのり」松原　寿子　選
「テレワーク」田中　新一　選
＊投句は番傘6月号・7月号に綴じ込みの投句用紙(コピー可)

投句料　1000円小為替（切手不可）
締　切　**7月15日（木）必着**
投句先　〒530−0047
大阪市北区西天満
5−6−26−605
番傘川柳本社　宛

第49回　濤明賞　作品募集

応募作品　「自由詠」
3句1組(一人3組まで可)
応募料　一組　1000円
締　切　**7月10日（土）**
当日消印有効
応募用紙　所定の応募用紙または用紙自由
選考委員　森中惠美子・島田　駱舟
髙瀬　霜石・古谷龍太郎
平田　朝子
発　表　「川柳ふんえん」9月号誌上
応募先　〒862−0907
熊本市東区水源1−5−5
川柳噴煙吟社「濤明賞」係
(TEL・FAX　096−369−7777)
主　催　**川柳噴煙吟社**

2021年度　川柳研究誌上大会

課　題（各2句・2人選）
「押　す」
青砥たかこ 選・山口まもる 選
「ピ ー ク」
山口　早苗 選・渋川　渓舟 選
「ぎざぎざ」
新家　完司 選・芦田　鈴美 選
「妙　味」
長谷川酔月 選・津田　　遥 選
投句用紙　応募用紙(コピー可)または便箋に住所・氏名・電話番号明記
投句料　1000円(切手不可)発表誌呈
締　切　**7月31日　当日消印有効**
投句先　〒353−0006
埼玉県志木市館2−3−6−1403
のべ　ふゆは方
川柳研究誌上大会係
問合せ　TEL　048−472−8885
主　催　**川柳研究社**

第73回　西日本川柳誌上大会

兼　題（各題2句）
「　風　」大家　風太　選
「　豆　」高木　勇三　選
「　暇　」牧野　芳光　選
「これから」矢沢　和女　選
「真　　心」赤井　花城　選
「　紙　」小島　蘭幸　選
投句料　1000円
(小為替・切手　現金は拝辞)
締　切　**7月31日（土）必着のこと**
投句先　〒709−3614
岡山県久米郡久米南町弓削
1146−7
柴田ゆうみ　宛
(TEL086−728−2879)
応募封筒の表に「西日本川柳誌上大会」と朱書のこと
主　催　**弓削川柳社**

第36回 国民文化祭・わかやま2021 川柳作品募集要項（概要）

黒潮薫るみかんの里 有田市「川柳の祭典」

1. 応募受付期間　2021年5月1日（土）～7月31日（土）（当日消印有効）

2. 応募規定

（1）作　品　一人各題二句詠（未発表作品に限る）

（2）応 募 料　事前投句1、000円、当日投句1、000円（ただし、海外投稿者、身体障害者手帳等の写しを添付された方は無料）
振替口座　00960-2-276220　加入者名　川柳の祭典国民文化祭わかやま大会

（3）応募方法　所定の応募用紙に必要事項を記入し、郵便振替請求書兼受領証又はその写しを添えて応募してください。

（4）応 募 先　一般社団法人全日本川柳協会　〒530-0041　大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905

3. 題・選者

〈事前投句〉

「荒　い」＝渡辺松風（秋田）　「パンダ」＝木本朱夏（和歌山）
「揃　う」＝渡辺貞勇（神奈川）　「みかん」＝弘兼秀子（広島）
「遅れる」＝佐藤孔亮（東京）　「手　紙」＝岡田　篤（兵庫）
「　鯨」＝岩田明子（大阪）

〈当日投句〉

第二次選者

小島蘭幸（広島）　田中新一（大阪）　矢沢和女（兵庫）
佐藤美文（埼玉）　荻原美和子（神奈川）

4. 賞

文部科学大臣賞／国民文化祭実行委員会会長賞／和歌山県知事賞／和歌山県議会議長賞
和歌山県教育委員会教育長賞／有田市長賞／有田市議会議長賞／有田市教育委員会教育長賞
一般社団法人全日本川柳協会理事長賞／和歌山県川柳協会会長賞

5. 発表会場

川柳の祭典（事前投句作品や、当日投句作品の入選・入賞発表、披講、選評、表彰式）
2021年11月14日（日）9時～16時30分　有田市民会館　紀文ホール
後日、入選作品集として刊行し、応募者全員に無料配布します。

6. 問い合わせ先と募集要項の依頼先

〒530-0041　大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905　一般社団法人全日本川柳協会
TEL（06）6352-2210　FAX（06）6352-2433

7. 主 催 者

文化庁　厚生労働省　和歌山県　和歌山県教育委員会　有田市　有田市教育委員会
第36回国民文化祭、第21回全国障害者芸術・文化祭和歌山県実行委員会
第36回国民文化祭、第21回全国障害者芸術・文化祭有田市実行委員会
一般社団法人全日本川柳協会　和歌山県川柳協会

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔すみよし

会長　古今堂蕉子

石田ひろ子　吉川　哲矢　藤島たかこ
石橋　直子　佐伯ミナ子　藤原　大子
磯島福貴子　阪井美世子　松崎　大輔
今井万紗子　佐々木満作　松下小枝子
井丸　昌紀　柴本ばっは　みぎわはな
岩崎　公誠　清水久美子　三宅　保州
内田志津子　鈴木いさお　宮崎シマ子
宇都満知子　立石　郁子　森松まつお
江島谷勝弘　田中　廣子　森松　芳香
榎本日の出　田中ゆみ子　両澤行兵衛
榎本　舞夢　飛永ふりこ　矢倉　五月
大治　重信　中井　萠　山根　妙子
大隅　克博　中村　民子　山野　寿之
大西　晴雄　長浜　美籠　山本　進
奥村　五月　長髙　俊雄　横山　里子
小野　雅美　西村　哲夫　吉村久仁雄
川端　一歩　藤井　宏造

☆ 暑中御見舞い申し上げます ☆

創立記念誌上大会のご案内

結婚10周年記念を機に句会を立ち上げることになりました。
北から南まで、多くの川柳人の参加をお待ちしております。

☆ 締切 7月7日、消印有効☆くわしくは川柳塔6月号見ひらきで ☆

おりひめ☆ひこぼし川柳会

〒573-0095　大阪府枚方市翠香園町2－7　藤田　武人
栃尾　奏子

投句
おまちしています！

暑中お見舞い申し上げます

川柳あまがさき

会　長　長浜美籠
副会長　藤井宏造

足立つな子　黒嶋　海童　藤田　雪菜
池野　英坊　酒井　紀華　古川　奮水
石川きよみ　酒井　健二　大林れい香
入江　修平　鈴木　新録　堀　正和
上田ひとみ　髙橋千賀子　桝本　宏子
江見　見清　竹山千賀子　宮﨑シマ子
大浦　初音　谷口　修平　森　菊江
奥村　五月　谷　祐康　森　たみえ
長川　哲夫　都倉　求芽　森松まつお
片山かずお　永田　紀恵　森松　芳香
釜野　公子　野口真桜子　山口ヨシエ
川人　良種　野口　雄次　山田　厚江
岸田　万彩　萩原　正　山田　耕治
北川　純　羽奈　和子　山田　孝治
北野　哲男　平井　富夫　山田　葉子
きとうこみつ　福田　正彦　渡辺　柳明
後藤照代　藤岡　りこ

例　会　毎月第二火曜日
場　所　尼崎女性センター・トレピエ

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔みちのく

主幹　福士慕情

同人一同

事務局　〒036-8275 弘前市城西1－3－10
稲見則彦（☎0172－36－8605）

暑中お見舞い申し上げます

川柳ふうもん吟社

会長　山下凱柳

会員一同

事務局：〒689-0202 鳥取市美萩野2丁目171-3
中村金祥方
TEL 0857-59-1056

月例会：毎月第4日曜日　13:00～

会　場：県民ふれあい会館（鳥取市扇町２１）

暑中お見舞い申し上げます

翠洋会

東　定生
安土　理恵
安福　和夫
指宿　千枝子
岩本　浩二
榎本　舞夢
大川　桃花
大久保　眞澄
太田　昭
金川　宣子
古今堂　蕉子
小谷　集一
佐々木　満作
髙杉　千歩
髙橋　敬子
田中　廣子

谷口　義
辻内　げんえい
津村　志華子
寺井　弘子
飛永　ふりこ
西出　楓楽
能勢　良子
原田　すみ子
藤原　大子
降幡　弘美
前川　善之
室田　行久
山本　希久子
米田　恭昌
渡辺　富子

初心者にもベテランにも役立つ！

川柳の理論と実践

B6判・326頁　1,680円（送料込2,000円）

新家完司川柳集（7）

令　和　元　年

A5判・137頁　1,000円+84円切手3枚（税・送料）

〒689－2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597　新家完司
TEL0858-52-2414　FAX0858-52-2449

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔さかい

会長　内藤憲彦
副会長　齋藤さくら

綾田　清
出海素頓馬
今井万紗子
宇都満知子
榎本　舞夢
太田扶美代
奥　時雄
鴨谷瑠美子
源田八千代
佐々木満作
柴本ばっは
高木世紀子
田中ゆみ子
玉瀬　富夫
徳山みつこ
西田　敬子
伏見　雅明
宮野みつ江
矢倉　五月
山根　妙子
吉田　禮子

石田ひろ子
井上　洋一
内田志津子
江島谷勝弘
太田としお
緒方美津子
柿花　和夫
楠井　輝子
古今堂蕉子
澤井　敏治
鈴木いさお
田中　廣子
谷川　憲
遠山　唯教
中林　佳子
日野　愿
古川　光雄
村上　玄也
山岡冨美子
山本　進
米澤　俶子

暑中お見舞い申し上げます

竹原川柳会

会長　小島蘭幸

会計　古田比呂子

ほか会員一同

暑中お見舞い申し上げます

富柳会

川柳とんだばやし

秋田あかり　栃尾奏子
穐山常男　中薗清
井澤壽峰　中村惠
河野彦次　林澄子
久世高鷲　肥山一文
坂本晴美　藤田武人
沢田和子　堀内きみ子
鈴木かこ　松谷由夏
関よしみ　松本正治
田嶋伸雄　山野寿之
土田欣之　他一同
都筑文重

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔みちのく

主幹　福士慕情

同人一同

事務局　〒036-8275 弘前市城西1－3－10
稲見則彦（☎0172－36－8605）

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔鹿野みか月

会員一同

会長　森山盛桜

暑中お見舞申し上げます

川柳さんだ

会員一同

例会：毎月第3火曜日 13時・JR三田駅前 キッピーモール6F

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔なら

会長　大久保眞澄
副会長　宇賀史郎
〃　長谷川崇明
〃　中堀優
会計　飛永ふりこ
編集　安福和夫
〃　中堀優
世話人　加藤江里子
〃　髙橋敬子
〃　仲西賛郎
顧問　安土理恵
〃　渡辺富子
会計監査　江島谷勝弘

事務局　〒631-0078　奈良市富雄元町1-1-7-114　大久保真澄

暑中お見舞申し上げます

川柳塔きゃらぼく

会　員　一　同

事務局　〒683-0804　米子市米原5-1-3-304
TEL 0859-21-7656　竹村紀の治

暑中お見舞い
申し上げます

川柳茶ばしら

早川遡行
板山まみ子
関本かつ子
山本三樹夫
脇田雅美
金子美千代

暑中お見舞申し上げます

豊中もくせい川柳会

会員一同

暑中お見舞い申し上げます

ほたる川柳同好会

水野黒兎　中山春代
池田純子　田中螢柳
荒木郁子　樋口順子
貝塚正子　多田契子
齋藤奈津子　上山堅坊
倉本一弥　藤井則彦
飯牟禮久仁子　田村直子
鶴岡信子　藤井宏造

句会　第二火曜日　午後一時より
場所　豊中市蛍池公民館

暑中お見舞申し上げます

六甲川柳会「ろっこうみち」

会員一同

誌上会を続けています。実句会を復活してゆきます。

事務局：〒657-0011　神戸市灘区鶴甲4-11-11
（TEL）078-851-5860　上田和宏

暑中お見舞申し上げます

いずも川柳会

会長　竹治ちかし
会員一同

事務局　〒693-0026　出雲市塩冶原町3-1-5　竹治ちかし方
TEL 0853-22-4309

暑中御見舞い
申し上げます

川柳藤井寺

会長　鈴木いさお

世話人　鴨谷瑠美子
太田扶美代
園田婦美枝
吉田喜代子

和歌山県川柳協会

会長　三宅保州
副会長　川上大輪
事務局長　古久保和子

[お問い合せ先]
〒640-8111　和歌山市新通7丁目17
TEL 073－423－8930

暑中お見舞申し上げます

和歌山三幸川柳会

主幹　三宅　保州

事務局　〒640-8111　和歌山市新通七丁目17　古久保和子
TEL 073-423-8930

例　会　毎月第四土曜日　12時30分
和歌山商工会議所　４Ｆ（バス停　和歌山市役所前）

暑中御見舞申し上げます

岸和田川柳会

岩佐ダン吉
雪本珠子
増田隆昭
松崎大輔
石田ひろ子
助川和美
宮野みつ江
高橋律雄
次井義泰
中岡香代
西田喜代志
池内恭子
出原誠夫
井戸雲水
浦上恵子
葛城隆雄
岸井ふさゑ
北原彦弘

桐島カズ子
木村心
楠井輝子
花篤洋二
鈴木益子
新海信二
立蔵信子
鶴田しげ子
中里はこべ
中原宏之
藤西義博
藤木國代
三宅保州
三宅白水
藤原昭
向井清
山内規予子

暑中お見舞申し上げます

川柳大阪

会長　山﨑珠生

会員一同

暑中お見舞い申し上げます

はびきの市民川柳会

会長　吉村久仁雄　　会員一同

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

同　人　一　同

事務局　〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14
川　上　大　輪　方
電話・FAX 073-462-7229

暑中お見舞申し上げます

南大阪川柳会

会　員　一　同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋６丁目駅③出口）
原則として第４月曜日・６時から（８時終了）

暑中お見舞申し上げます

西宮北口川柳会

会　員　一　同

事務局　〒663-8141　西宮市高須町２－１－31－830　福田正彦

暑中お見舞申し上げます

城北川柳会

会　員　一　同

おりひめ☆ひこぼし川柳会

創立記念誌上大会のご案内

課題と選者（各題2句）

☆「親　友」☆　松田　夕介　選
☆「手　紙」☆　青砥たかこ　選
☆「運　命」☆　大家　風太　選
☆「思い出」☆　木本　朱夏　選
☆「かけはし」☆　新家　完司　選
☆「阿　吽」☆　土田　欣之　選
☆「感　謝」☆　小島　蘭幸　選

★★祝吟：左記7題とは別にご参加の皆様から自由参加で1句祝吟募集しております。

投句締切　**令和3年7月7日（水）消印有効**

投句要領　規定の用紙（コピー可）

参加費　1000円（切手不可・小為替等）

投句先　〒573-0095
大阪府枚方市翠香園町2-7
藤田　武人

電話　072-395-5453

暑中お見舞申し上げます

川柳塔社

主幹 小島蘭幸

理事長 新家完司

副主幹 川上大輪

副理事長 木本朱夏

副理事長 内藤憲彦

常任理事 石田隆彦

居谷真理子

上田ひとみ

内田志津子

宇都満知子

江島谷勝弘

大久保眞澄

桒原道夫

糀谷和郎

常任理事 平井美智子

藤井宏造

藤村亜成

松岡篤

森松まつお

吉村久仁雄

相談役 板尾岳人

奥田みつ子

西出楓楽

仁部四郎

村上玄也

会計監査 西村哲夫

初代正彦

編集後記

★誕生日朝日も花のようにあり　薫風

★10月2日に開催予定の「第27回川柳塔まつり」は昨年同様誌上大会となった。（詳細は8月号に掲載）。ワクチン接種も始まったことだし、「今年こそは…」と楽しみにお待ちくださった方も多いだろう。かく言う私も期待に胸を膨らませていた一人。残念だが安全には代えられない。せめて今年の終りには本社句会が開かれることを切に祈るばかり。

★麻生路郎著『川柳とは何か』サブタイトルは「川柳の作り方と味い方」は「学生教養叢書（全50巻）」の一巻として昭和30年に至文堂から発刊された。目次の一部を紹介しょう。「川柳の三形態」「川柳を表現する語彙」「入門は身辺の写生から」「写生句は斯うして」「七七型の句について」「句会の在り方」等々。初心者に向けて懇切丁寧に「川柳とは」を説く。引用されている句は現在からみれば古いととる向きもあろうが具体的で解りよい。川柳入門の指導書は多々あるが私のお勧めは断然この一冊。

★ステイホームのお供に小説はいかが？小松左京著『復活の日』は1964年に発表。細菌兵器として作られたウイルスが世界中に蔓延。滅亡した地球に生き残っていた僅か数千人に未来はあるだろうか。楡周平著『サリエルの命題』は2017年に発表。突然発生した新型インフルエンザにより離島の住人全員が死亡。本州にも飛び火。少子高齢化、健康保険制度の矛盾を衝く。現在私たちがおかれている状況と妙にリンクして首筋が寒くなる。周木律著『災厄』は2014年に発表。原因不明の感染症により四国が全滅。感染症は本州にも蔓延。パニックが始まる。残念ながら折角の素材を周木律のペンは生かしきれていない。とはいえ感染源が身近に存在していたことに恐怖を感じている。

（朱夏）

○コロナの収束がおぼつかない日々、感染者や、死亡者の数など、数字を見る機会が増えました。

○他国と比べれば「さざ波」とはいえ、同じ病気で一日に百人も亡くなるような事態は普通ではないと私の常識が言います。

○病院が満床で自宅やホテル療養中での死亡など、重症でも入院できず、診察もしてもらえず亡くなる方がおられるのに、発表の病床使用率が百パーセントを超えないのはなぜでしょうか。数字に弱い私には理解できません。

○本誌がお手元に届く頃、五輪にどんな決着がついているでしょうか。噂では日当最高35万円、必要な医療スタッフ1万人など非現実的な数字、ボランティア1万人辞退はさもありなん。関係者は接種も検査も優先と聞きますが、さて一般人は？

○理解しにくい発表の数字より、私達には何よりも五七五。指を折りながら、再会の日を元気で待ちましょう。

（眞澄）

ひとこと

ワクチン接種奮闘記

4月末のワクチン申し込みに「乗り遅れ」。今度こそと、5月10日の朝8時59分50秒から、家内と二人して、延延百分以上のダイヤル。500回を上回る努力をしたが、結局は「話し中」の連続で、力尽きた。

ではと、私は掛かりつけの医院の13時受付へ2時間並ぶつもりで、折り畳み椅子を背負って出かけた。その間、家内は別の医院へアプローチ。こちらは「電話受付は致しません。インターネットで申し込んでください」と機械音だったとか。ところが、ありがたいことに、ものの5分もしないうちに「成功」したらしい。医院へ向かう私に電話が入り、帰宅。結局、1回目の接種は5月25日に、2回目は6月15日で一件落着。ケーキ入刀以来かもしれない久しぶりの共同作業に、疲労困憊を感じながらも、パソコンに最敬礼。夕食を待てぬと缶ビールがプシュっと鳴った。

効能よりどうも気になる副作用

（澤井　敏治）

お知らせ

本社8月11日（水）開催予定の本社句会は中止と決定、誌上句会として開催致します。詳細は112頁をご参照ください。

全国でワクチン接種も始まりましたが、変異種が猛威を振るっています。油断することなく三密を避け、マスク、消毒、換気の基本を忘れず、お大事にお過ごしください。

作品募集

9月号発表（7月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸　選
水煙抄（8句）　川上大輪　選
愛染帖（2句）　新家完司　選
檸檬抄「漂う」（2句）　桒原道夫　久保田千代　共選
インスピレーション・ナビ（2句）　大西泰世　選
「受ける」　鴨田昭紀　選
一路集（2句）　「ガード」　岸本孝子　選
初歩教室「匂う」（3句）　居谷真理子　担当

初歩教室「匂う」は10月号発表

本社８月句会は誌上句会です
詳細は川柳塔７月号112頁ご参照
投句締切日７月31日、発表10月号
兼題「ラスト」「すいすい」「多　少」「　銀　」「個　性」

10月号
檸檬抄「　音　」
一路集「　米　」「へらへら」
初歩教室「絵　本」

川柳塔柳箋

３冊　送料共 1,000円

事務所あてお申し込み下さい。

定価 八百円（送料100円）
半年分 五千円（送料共）
一年分 九千八百円（同）

二〇二一年（令和三年）七月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
発行所 川柳塔社
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七 花野ビル201号室
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替 〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。

美研アート
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL（06）4800―3018
FAX（06）4800―3028
Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp
ホームページ https://www.bikenart.com

令和三年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一三〇号　川柳塔　七月号　定価　八百円（送料　百円）

舞昆のこうはら杯　川柳大募集!!

お友達LINE
QRコード

舞昆ができた年の暮れ「頼んだ覚えがないと花巻温泉のご主人」からお電話。
翌お中元の季節、匿名で届けようという女性に「手紙を半年も言付かっていましたよ」
お盆の帰省シーズン、あの女性と手紙を言付けたご主人に可愛い女の子がご家族揃って
10年ぶりに復縁して、花巻旅館にお土産をいっぱい買って帰られました。贈り物って素敵ですね。

舞昆のお友達になって下さい。

「あったかごはんの思いで」川柳に託しませんか。

タイトルは「舞昆あったかごはんの思いで」係
メールは、senryu@115283.jp
ハガキは、559-8502　大阪市住之江区東加賀屋1-3-40

締切りは7月末まで、発表及び個人情報取扱は
「舞昆あったかごはんの思いで」川柳WEBページをご覧下さい。

舞昆川柳WEB
QRコード

ひとり2句迄とし、必ず、郵便番号、住所、
氏名（ペンネームは希望者のみ記載）、電話番号を明記してください。

新米と舞昆大賞1句、感動・心響く・希望・癒し・お笑いで各2句入選。
発表は、舞昆WEBページ、顧客情報誌に掲載します。

舞昆のこうはら
商品のお問い合わせはこちらまで（ご試食承ります）
フリーダイヤル 0120(11)5283（イイコブキヤン）

『歯を含むお口の中を一生守っていく場所』としての歯科医院
『痛くなく、怖くなく、通院が苦にならない』と思えるクリニックの実現

海岸通デンタルクリニック
KAIGANDORI DENTAL CLINIC

診療時間	月	火	水	木	金	土	日
9：00～13：00	○	○	○	—	○	9:00～17:00	—
14：30～20：00	○	○	○	—	○		—

診療科目
・歯科　・歯科口腔外科　・小児歯科
・予防歯科　・審美歯科
・インプラント　・ホワイトニング

〒651-0073　神戸市中央区脇浜海岸通２－２－３
HAT神戸メディカルモール３F（１Fケーズデンキ）
TEL.078-261-3300
www.hat-dental.com

雑誌 05703－7